

山梨県韋崎市

新田遺跡

ARA TA SITE

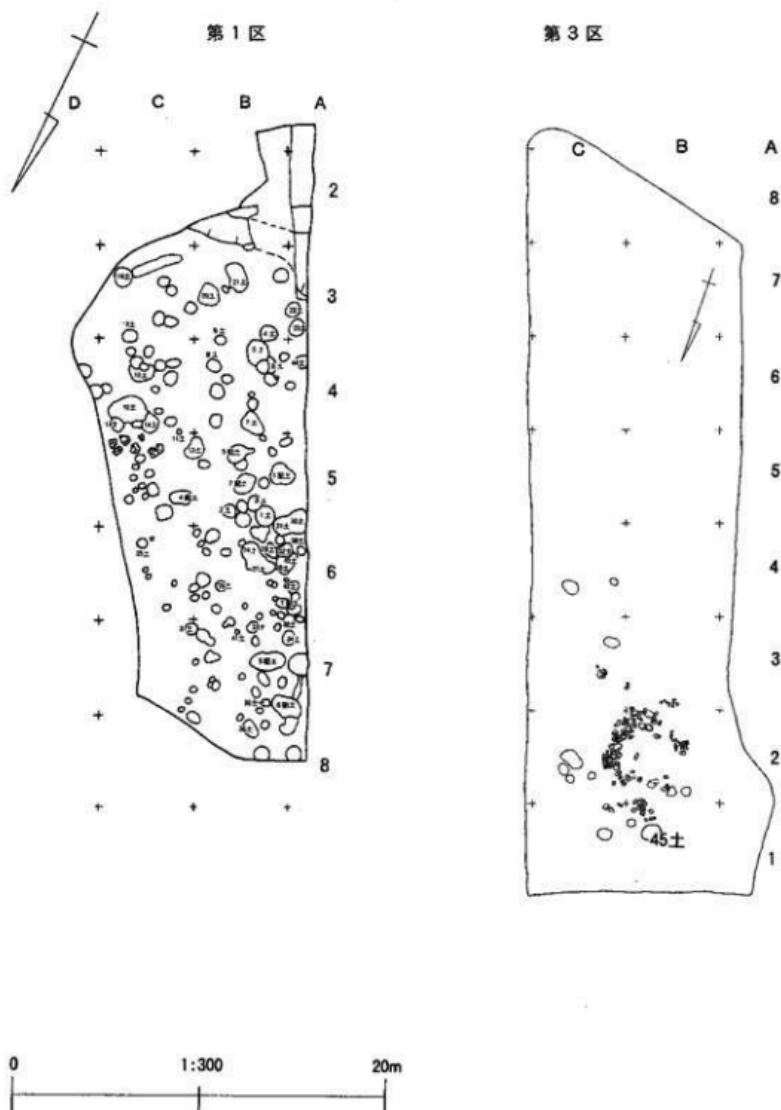
主要地方道路韋崎櫛形豊富線(旭バイパス)建設に伴う発掘調査報告書

1996

韋崎市遺跡調査会

韋崎市教育委員会

韋崎土木事務所



第3図 新田遺跡全体図(縄文時代)

山梨県韋崎市

新田遺跡

ARA TA SITE

主要地方道路韋崎櫛形豊富線(旭バイパス)建設に伴う発掘調査報告書

1996

韋崎市遺跡調査会
韋崎市教育委員会
韋崎土木事務所

序

近年、韮崎市では県営圃場整備事業、一般公共事業あるいは民間開発事業等に伴い数多くの遺跡発掘調査に迫られております。こうした事態に適切かつ迅速に対応するため、韮崎市では遺跡調査会を組織し遺跡保護に努めております。すでに韮崎市立北東小学校建設にともなう発掘調査に際して、調査面積19,295m²、堅穴住居址423軒、堀立柱建物54棟にもおよぶ遺構を検出した宮ノ前遺跡を始め、何カ所かの遺跡調査を行ない多大な成果をあげております。

今回ここに報告する新田遺跡は1994年に主要地方道韮崎横形豊富線(旭バイパス)建設に伴い調査を実施した遺跡であります。この遺跡には二枚の文化面が確認され、縄文時代中期から後期及び弥生時代後期・平安時代との遺跡がありました。縄文時代に関しては、「中部高地に花開く」とまで形容される中期の遺跡に比べ、その遺跡数の減少が指摘される後期に属する土器が主体を占めております。残念ながら住居址の検出は無かったものの墓と推定される土坑、あるいは配石遺構等が検出されました。弥生時代に関しては遺構の検出こそなかったものの、遺物の出土がみられ、この地域に弥生時代の遺跡の存在が予想されます。平安時代では住居址6軒と数的には少ないものの、当該期の遺跡の広がりが確認され貴重な成果となりました。新田遺跡が位置する本市神山町武田は武田氏発祥の地として広く知られており武田八幡神社、鳳凰山願成寺、武田信義館跡、白山城等、武田氏発祥からの史跡が多く点在しており、また武田氏最後の居城である新府城も本市にあり、武田氏発祥から終焉まで多くの歴史が豊かに展開しております。更に古代律令制の行政区域でありました余戸郷(「あまるべのさと」あるいは「あまりべのさと」)は釜無川右岸のこの地域に比定されており、現在使用する「甘利」はこの遺称だと考えられています。このように古くから豊かな歴史のあるこの地域で今回発掘調査が行われたことは実に意義深く貴重なものであります。貴重な発見があった新田遺跡の報告書が今回ここに刊行されたことは喜ばしいことであり、本市の歴史に新たな1ページが加わるとともに、地域の歴史を再確認する機会となれば、この上ない喜びであります。

最後に、発掘調査並びに報告書作成に関し、多大なる御理解と、御協力、また御指導、御助言を頂いた関係機関及び関係者の皆様に深甚なる感謝を申し上げる次第です。

平成8年3月15日

韮崎市遺跡調査会

韮崎市教育委員会

会長 秋山幸一

教育長 志村良典

例　　言

1. 本書は、山梨県韮崎市神山町武田地内に所在する新田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、主要地方道韮崎横形豊富線(旭バイパス)建設に伴う事前調査であり、韮崎上木事務所から韮崎市教育委員会に、更に市教育委員会から韮崎市遺跡調査会に依託され、実施されたものである。
3. 発掘調査及び出土品の整理、報告書の編集作成は韮崎市遺跡調査会調査員伊藤正彦が行った。執筆は第1章第1節を韮崎市教育委員会社会教育課山下孝司が、以外を伊藤が行なった。
4. 石器の石材鑑定では山梨地学会副会長樋口正氏のお手を煩わせた。記して感謝申し上げたい。
5. 発掘調査及び報告書作成に際して、多くの方々から御指導・御協力を頂いた。一々御芳名を上げることは遺漏あることを怖れ、避けさせて頂くが厚く御礼を申し上げる次第である。
6. 本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真などは一括して韮崎市教育委員会に保管してある。

凡　　例

1. 本書の挿図縮尺は、各挿図ごとに示した。
2. 遺構断面図の水糸レベルは海拔高(m)を示す。
3. 挿図断面図の は石をあらわす。
4. 歴史時代土器断面、白ぬきは土師器、黒は須恵器、網点は陶器をあらわす。
5. 遺構番号は調査現場において付けたものである。
6. 写真図版の遺物番号は、挿図中の番号と対応する。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第1章 発掘調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査区域の設定と調査方法	2
第2章 遺跡概況	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	3
第3節 基本層序	9
第3章 造構と遺物	10
第1節 平安時代	10
1・住居址と出土遺物	10
2・溝状造構と出土遺物	19
3・造構外出土遺物	19
第2節 繩文時代	39
1・土坑と出土遺物	39
2・配石土坑と出土遺物	49
3・配石造構と出土遺物	51
4・造構外出土遺物	51
(1)土 器	51
(2)土製品	57
(3)石 器	57
第4章 まとめ	125
付 章 自然科学分析調査報告	130

挿 図 目 次

第1図 新田遺跡①と周辺の遺跡	5	第33図 1, 2号土坑出土土器	76
第2図 新田遺跡位置図	6	第34図 5号土坑出土土器	77
第3図 新田遺跡全体図(縄文時代)	7	第35図 6, 8, 9号土坑出土土器	78
第4図 新田遺跡全体図(平安時代)	8	第36図 10, 11, 12, 14号土坑出土土器	79
第5図 基本層序	9	第37図 15, 18号土坑出土土器	80
第6図 第1号住居址実測図	23	第38図 19, 23, 24号土坑出土土器	81
第7図 第2, 3号住居址実測図	24	第39図 25~28号土坑出土土器	82
第8図 第4, 5号住居址実測図	25	第40図 29, 30, 32, 36号土坑出土土器	83
第9図 第6号住居址・第1号溝状遺構実測図	26	第41図 37, 39, 41, 42, 44, 45号土坑出土土器	84
第10図 住居址カマド実測図	27	第42図 1, 7号配石土坑出土土器	85
第11図 第1, 2号住居址出土遺物	28	第43図 グリッド出土土器	86
第12図 第2号住居址出土遺物	29	第44図 グリッド出土土器	87
第13図 第2号住居址出土遺物	30	第45図 グリッド出土土器	88
第14図 第2, 3号住居址出土遺物	31	第46図 グリッド出土土器	89
第15図 第3号住居址出土遺物	32	第47図 グリッド出土土器	90
第16図 第3, 4号住居址出土遺物	33	第48図 グリッド出土土器	91
第17図 第4, 5号住居址出土遺物	34	第49図 グリッド出土土器	92
第18図 第6号住居址出土遺物	35	第50図 グリッド出土土器	93
第19図 第6号住居址・第1号溝状遺構出土遺物	36	第51図 グリッド出土土器	94
第20図 グリッド出土遺物	37	第52図 グリッド出土土器	95
第21図 グリッド出土遺物	38	第53図 グリッド出土土器	96
第22図 1~4, 7~10号土坑実測図	65	第54図 グリッド出土土器	97
第23図 5, 6, 11号土坑実測図	66	第55図 グリッド出土土器	98
第24図 12~15号土坑実測図	67	第56図 グリッド出土土器	99
第25図 18~23号土坑実測図	68	第57図 グリッド出土土器	100
第26図 24~29, 32, 40号土坑実測図	69	第58図 グリッド出土土器	101
第27図 30, 31, 33~37号土坑実測図	70	第59図 グリッド出土土器	102
第28図 38, 39, 41, 42, 44, 45号土坑実測図	71	第60図 グリッド出土土器	103
第29図 1, 2号配石土坑実測図	72	第61図 グリッド出土土器	104
第30図 3, 4, 5号配石土坑実測図	73	第62図 グリッド出土土器	105
第31図 6, 7号配石土坑実測図	74	第63図 グリッド出土土器	106
第32図 第3区配石遺構実測図	75	第64図 グリッド出土土器	107

第65図 グリッド出土土器	108	第74図 石 器(4)	117
第66図 グリッド出土土器	109	第75図 石 器(5)	118
第67図 グリッド出土土器	110	第76図 石 器(6)	119
第68図 グリッド出土土器	111	第77図 石 器(7)	120
第69図 グリッド出土土器	112	第78図 石 器(8)	121
第70図 グリッド出土土器	113	第79図 石 器(9)	122
第71図 石 器(1)	114	第80図 石 器(10)	123
第72図 石 器(2)	115	第81図 石 器(11)	124
第73図 石 器(3)	116		

図 版 目 次

- 図版1 … 調査区第1区、2区(平安時代)、調査区第2区北側(平安時代)
 図版2 … 調査区1区(縄文時代)、配石遺構(西より)
 図版3 … 調査区現況、作業風景
 図版4 … 第1号住居址、第2号住居址
 図版5 … 第3号住居址、第4号住居址
 図版6 … 第5号住居址遺物出土状況、第6号住居址
 図版7 … 1号溝状遺構土層堆積状況、配石遺構
 図版8 … 1号住カマド完掘状況、調査状況、2~4・6号住カマド完掘状況、1・2号土坑遺物出土状況
 図版9 … 5・9・11・19・22・23号土坑遺物出土状況、18号土坑確認状況、ヒスイ出土状況
 図版10 … 24・29・32・30・31・39号土坑確認状況、34号土坑土層堆積状況、41・45号土坑遺物出土状況、
 調査区第1区東壁
 図版11 … 1~3号配石土坑確認状況
 図版12 … 4・5号配石土坑確認状況、5号配石土坑完掘状況
 図版13 … 6・7号配石土坑確認状況、遺跡見学会
 図版14 … 1号住出土土器、1号住出土紡錘車、1号住P-3出土鉄滓、2号住出土土器
 図版15 … 3号住出土土器、4号住出土紡錘車、4号住出土土器
 図版16 … 6号住出土土器、墨書き器赤外線写真、1号溝状遺構出土土器、遺構外出出土土器
 図版17 … 2・5・11・19・23号土坑出土土器
 図版18 … 24・25・37・41号土坑出土土器、遺構外出出土土器
 図版19 … 遺構外出出土土器
 図版20 … 遺構外出出土土器
 図版21 … 遺構外出出土土器
 図版22 … 出土石器
 図版23 … 出土石器
 図版24 … 出土石器

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成5年（1993）韭崎土木事務所より韭崎市教育委員会に、県道旭バイパスの建設にかかり、韭崎市神山町武田地内の埋蔵文化財発掘調査依頼の打診があった。しかしながら、市教委では年度内調査はもちろんのこと、内部の調査体制が整わないで一旦は辞退した。その後山梨県教育委員会学術文化課の調整により、市教委において調査員を置いて発掘調査を実施する旨の指導を受けた。市教委では内部協議を行い、その結果韭崎市遺跡調査会によって調査を受託することとして、平成6年度に発掘を行うことになった。調査対象地域は平成5年度に、山梨県埋蔵文化財センターが試掘調査をして、縄文時代後期・平安時代の遺物や遺構の落ち込みが確認されており、その報告によつて調査面積を約3000m²と決め、約6ヵ月間の調査期間を予定して、平成6年6月から発掘調査を実施するに至った。

第2節 調査組織

1・調査主体 韭崎市遺跡調査会

2・韭崎市遺跡調査会組織（平成8年3月15日現在）

会長	韭 崎 市 長	秋山 幸一	（前） 内藤 登
副会長	韭 崎 市 助 役	石井 俊之	
	韭 崎 市 教 育 委 員 長	眞壁 通展	（前任） 上野 庸民
	韭崎市文化財審議会会长	山寺仁太郎	
理 事	学識経験者	磯貝 正義	
	学識経験者	野沢 昌康	
	学識経験者	谷口 一夫	
	学識経験者	萩原 三雄	
	学識経験者	波木井市郎	
	学識経験者	志村 富三	
	社会教育委員会会長	木下 昭二	
参 与	山梨県教育庁学術文化課	出月 洋文	（前任） 小野 正文
	山梨県埋蔵文化財センター	八巻興志夫	
監 事	韭 崎 市 収 入 役	雨宮 高	（前任） 久保田正彦
	韭 崎 市 監 查 委 員	大柴 左京	

3・発掘調査及び整理作業参加者(順不同、敬称略)

秋山 たけ、秋山 東、石井 則子、小沢 国夫、大村よし子、功刀シゲ子、功刀 及子、
功刀 妙子、功刀 謙、功刀とみじ、久保田敬二、小林 賢英、嶋田とみ子、清水いつえ、
鈴木貴美子、鈴木みどり、百田きよ子、樋口きみ子、水上とよ子、山本 栄一、山本みさを、
大村 共治、小林 善平、奥石 俊雄、横森 松男、森 貞市、堀内美千子、阿部由美子、
上野 理江、樋口 浩子、平賀えみ子、柳本美津子、深沢真知子、石原ひろみ、小野 初美、
有賀 京子、三井 福江、清水由美子、青山みち枝、井富 保仁

4・事務局(平成8年3月15日現在)

事務局長	蘿崎市教育長	志村 良典	(前任) 秋山 利良
事務局次長	蘿崎市社会教育課長	深谷 卓	(前任) 福田 国夫
事務局員	蘿崎市社会教育課主査 蘿崎市社会教育課副主査 蘿崎市社会教育課主任	内藤 晴人 山下 孝司 野口 文香	(前任) 中嶋 尚夫
調査員	伊藤 正彦		

第3節 調査区域の設定と調査方法

本遺跡の調査範囲は、道路建設のため幅約12m程度の南北に長い調査区となっている。自然地形、農道等により途中で分断されるため、調査区を便宜上1～3区とし、任意に5mグリッドを南北方向に南から1～20、東西方向に西よりA～Dと設定した。尚、3区については排土処理、調査期間の都合上1、2区と同軸によるグリッドを設定できず、南北方向に北から1～9、東西方向については1、2区と同じく西からA～Dとして調査を行った。表土・耕作土を重機で排除した後、すでに試掘調査により住居址の検出が予想される試掘坑を中心に遺構確認に努めた。

また1区においては同一の文化面より縄文時代の住居址の検出が予想されていたため、同様に遺構の検出に努めたが、遺構の確認にはいたらず、更に調査区西側に新たな試掘坑を設定して土層の堆積状況を確認・把握した。その結果平安時代の文化面より約50cm下層に縄文時代の文化面が確認でき、複合遺跡であることがつかめた。本調査に入つてからの、こうした不手際、確認不足は調査期間、予算上、そして何よりも調査の遂行に大きな影響を与えること必至で、後々まで苦慮することとなった。その上、堆積土に礫が多量に混じり通常の調査で使用する移植ゴテや鍔鏟等が使えないなど困難を極めた。関係機関の御尽力により調査期間を一ヶ月延長した11月に終了することができた。

第2章 遺跡概況

第1節 遺跡の位置と地理的環境

新田遺跡は、山梨県韮崎市神山町大字武田字新田地内に位置する。

韮崎市は山梨県の北西部、甲府市より北西12kmのところに位置し、南東側は三角形をした甲府盆地の一角にある。西側には南アルプスの前衛巨摩山地が走り、東側に秩父山地の前衛茅ヶ岳から続く緩やかな裾野が穂坂丘陵として広大な広がりを見せている。北側は八ヶ岳の裾野が長く尾を引き、その先端には舌状の韮崎台地をつくり本市中心にまで達している。この台地をはさんで東側には秩父山地から塩川が、西側には南アルプスに源を発す釜無川が南流し、本市南側にて合流し甲府盆地へ向かって流れ出している。このように韮崎市は西東北の三方を山で囲まれ、南には平野が開けた地理的環境にある。

遺跡立地の地形は大きく台地上と比較的低地となる河岸段丘上に分けられる。具体的には4地区をあげられる。(1)茅ヶ岳南麓の穂坂丘陵、(2)塩川右岸の河岸段丘上、通称藤井平と呼ばれる地域、(3)本市中央部にある韮崎台地、通称「七里岩」と呼ばれ釜無川・塩川の両河川に狭まれた細長い台地、(4)釜無川右岸の河岸段丘上である。

新田遺跡はこのうち(4)の地域に位置する。釜無川右岸の河岸段丘は本市中央部を流れる釜無川に沿って約13kmにわたり形成され、北部では幅500m、最南端では幅3.5kmに及び、南にいくにしたがって幅をひろげていく。段丘面は西部巨摩山地から流れ出していく多くの河川によって開析され、更にこれら河川によって段丘面上あるいは段丘面下に扇状地が形成されている。遺跡北側には武田の集落があり、南側には八幡沢によって開析された開析谷がある。西側には江戸時代に造られた徳島堰が南下し、堰に沿うように北宮地・鍋山の集落が巨摩山地の裾から続くやかな傾斜地に発達している。更にこの徳島堰を境に地形は一段大きく下がり段丘崖線までゆるやかに傾斜している。現在遺跡周辺は前述した徳島堰の恩恵により水田地帯となっている。本遺跡は、釜無川に東西より流れ込む豊沢、八幡沢等の支流が形成した扇状地のほぼ中央部に位置し、標高405mを測る。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

本遺跡の周辺には、縄文時代から中世の館跡まで多数の遺跡が存在する。釜無川右岸の河岸段丘上には縄文時代早期の茅山式土器が表面採取された大石遺跡、縄文時代と弥生時代の土器・石器が採取されている金山遺跡・羽根前遺跡・下馬城遺跡・長塚道下遺跡などがある。古墳時代では、始めてこの釜無川右岸の河岸段丘上に組織的調査のメスが入れられ、住居址4軒が検出された旭町上条北割に位置する久保屋敷遺跡がある。古墳は、東芝タンガロイ工場の裏手に竪穴式石室を持つ古墳があったことが知られているが、既に昭和の初期に開発され、その際に出土したとされる鐵鉗1本と太刀2本、石室用材の一部である偏平な割り石を所有する人もいるらしい。平安時代では同じく

旭町上条北割に位置し、旭バイパス建設に伴い調査された大輪寺東遺跡がある。住居址2軒を検出し、他に弥生時代の土器、中世から戦国時代にかけての遺物・遺構が確認されている。「甲斐国志」によると、現在の大輪寺の周辺の地は古代末から戦国時代まで武田家の有力武将として、武田滅亡まで仕えた甘利氏の居館と伝えられており、先の大輪寺東遺跡の調査では溝等で囲まれた建物群の存在や、各種の陶磁器類や漆製品が出土し甘利氏の居館とは直接断定されないものの「居館」そのものの存在は確認されている。その北方、神山町武田には市指定史跡武田信義館跡がある。武田信義館跡から南西に約1.3kmには武田信義の要害城といわれる白山城が、更に白山城の南にはムク台烽火台がある。北方に目を転じると清哲町青木に灰釉陶器が出土し、9c中頃～10c前半に位置づけられる清哲遺跡がある。

一方、七里岩台地上・藤井平でも近年、公共事業・民間開発等により多くの遺跡が調査されている。七里岩台地上では学的に有名な坂井遺跡を始め、縄文、古墳、平安時代の住居址106軒、方形周溝墓12基を検出した坂井南遺跡がある。藤井平では縄文、古墳、平安時代の住居址を検出した後田遺跡、後田遺跡に近接し弥生、平安時代の住居址20軒を検出した堂の前遺跡、沢を挟んで位置し、弥生時代の住居址が発見された下横屋、北下条遺跡等がある。

第1図中に示した遺跡の内訳は、以下のとくである。

1. 新田遺跡（縄文、弥生、平安時代）
2. 坂井遺跡（縄文、弥生、古墳時代）
3. 坂井南遺跡（縄文、古墳、平安時代）
4. 後田遺跡（縄文、古墳、平安時代）
5. 堂の前遺跡（弥生、平安時代）
6. 下横屋遺跡（弥生、平安時代）
7. 北下条遺跡（弥生、平安時代）
8. 金山遺跡（縄文、弥生時代）
9. 久保屋敷遺跡（縄文、弥生、古墳時代）
10. 大石遺跡（縄文時代）
11. 無名墳（古墳時代）
12. 大輪寺東遺跡（弥生、平安時代、中世）
13. ムク台烽火台（中世）
14. 白山城（中世）
15. 武田信義館跡（中世）
16. 清哲遺跡（平安時代）



第1図 新田遺跡①と周辺の遺跡(1:25,000)

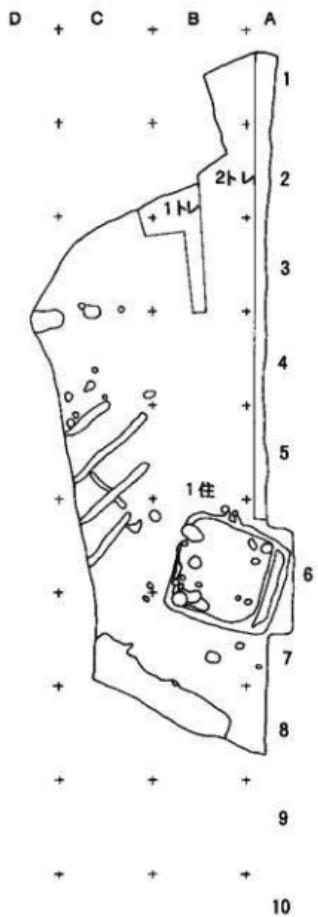


第2図 新田遺跡位置図

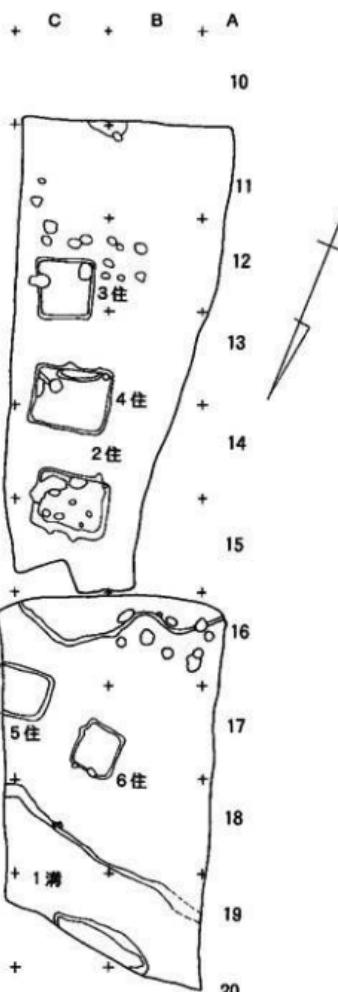


第3図 新田遺跡全体図(縄文時代)

第1区



第2区



0 1:300 20m

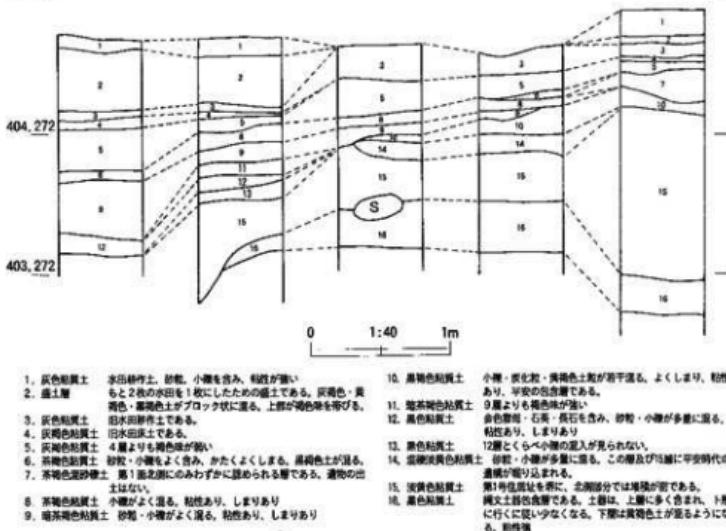
第4図 新田遺跡全体図(平安時代)

第3節 基本層序

新田遺跡における基本層序を明らかにしておく。

遺跡は東方向に緩やかな傾斜をなすが、調査対象地内では基本層序に大きな変化はなく、ほぼ安定している。第5図は調査区南側第1区西側壁のものである。やや複雑となっているが、基本的にはI 水田耕作土、II 水田床土、III 茶褐色土、IV 平安時代文化層、V 淡黄色粘質土、VI 縄文時代文化層、VII 黄褐色土となる。第1区南側では縄文・平安時代文化層が共に希薄となり、土器出土量、遺構の分布密度にも顕著に表れている。第2区ではI~V、第3区ではI~III、VIという層序をとっている。

405.272



第5図 基本層序

第3章 遺構と遺物

調査の結果、平安時代の遺構は堅穴住居址6軒、溝状遺構1条であり、縄文時代の遺構は土坑42基、配石土坑7基、配石遺構1基が検出された。以下、平安時代から遺構、遺物の順に説明していく。

第1節 平安時代

1 住居址と出土遺物

第1号住居址(第6図)

試掘調査の際にすでにカマドが確認されていたものである。確認当初、一部調査区外に広がることが判明したが、調査の進行を優先し確認範囲のみにセクションベルトを設定し掘り下げを行った。その後、調査区外に広がる部分の拡張を行い、プラン検出に努めた。

位置 A・B-6・7グリッドに位置しており、主軸はN-92°-Eをとる。

規模・形態 長軸5.60m、短軸4.37mを計測し、隅丸長方形を呈する。約80cm程の拡張の跡が認められる。

覆土 6層からなる。1層は非常に硬く締まり、しかも礫を多く含むなど掘り下げに苦労した。2層以下は礫が混じるもの比較的軟らかく、粘性のあるものである。焼土・炭化物が上層から確認でき、堆積状況などからも自然堆積とは思われず、あるいは人為的な埋め戻しを想定できるかも知れない。

内部施設 壁高は東壁が低く約15cm程度、その他は約25cm程度を計測する。床面は全体にわたって軟弱であり、特に踏み固められた跡は認められなかった。カマド右側がわずかに低くなっている以外はほぼ平坦である。周溝はカマド周辺を除き全周している。幅10~30cm、深さ5~10cm程度を測る。断面形はU字形を呈する。ピットは11個確認されている。その内、柱穴と思われるものはP4, 5, 6, 10である。P5, 6は拡張に伴う作り替えであろうか、柱穴中心間で約60cmの距離をもっている。住居址南壁の下整形をしたピットであるが、人口部施設に伴うものであろう。厨房空間と近接し無理なようであるが、宮間田遺跡の第58, 61, 62号住にもこうした施設は有り、強ち無理な推定でもないようだ。ただ宮間田遺跡例のように整然と並び、しかも柱穴中心間で約1.5mもの距離ではなく、約60~70cmなのは気になる点である。P3とP7であるが、いずれも住居址コーナー付近に設置されている。P3は微細図をのせておいたが、長軸55cm、短軸50cm、深さ70cmの平面ほぼ正円形で、断面円筒形を呈する。ピット中位から挙大の礫が十数点かたまつて検出された。その中に鉄滓が2点含まれる。1点は重さ270.7g、もう1点は199.5gを測る。P7はテラスがつき不整形をしたものである。落ち込み部分壁際から焼土・炭化物がやや集中して検出された。遺物の出土はなく性格は不明である。

カマド(第10図) 住居東壁中央より南東コーナー寄りに設置されている。規模は東西1.26m、南北1.13m、床面から深さ14cmを計測する。両側の袖石、天井石の一部、袖石を楔付けた際の粘土が一部残っているなど良好な状態だった。煙道部は緩やかに立ち上がっているが壁より張り出さず明確ではない。尚、炊口の左側ちょうど袖石の前、床面上から鉄滓が1点出土した。重さ24.7g、縦4cm、横5cm、厚さ1.5cmの小片であった。

遺物(第11図)

遺物の出土は少なく、カマド周辺を中心として出土した。1,2は小型の甕である。いずれもカマド右側脇より出土する。1は口縁部が折り返され丸く作られ、2は短く「く」の字に外反する。どちらも口縁内面上部が黒変している。4の紡錘車は拡張した南西コーナー付近から若干浮いて出土する。6の羽釜は外面、内面上部にハケ調整が施されるが、胎土・色調はいわゆる「甲斐型土器」とは異なり花崗岩系鉱物を含まず、灰色系をしたものである。住居址の時期は10c末~11c前葉に位置付けられる。

<第1号住居址出土遺物一覧>

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土師器	小型甕	—, 20.0, —	粗い砂粒を含む	黒色 にぶい橙色	内面一黒色 外面一ヘラみがき 口縁部破片1/8残存
2	土師器	小型甕	—, 14.8, —	粗い白色粒子が目立つ、砂粒を含む	黒褐色～灰黄褐色 明赤褐色	内面一棒状工具による無い刷毛目 が施される 外面一横で 輪削刃あり 口縁部一凹部破片
3	土師器	壺	—, —, 6.0	金色雲母を多く含む	にぶい赤褐色	底部一回転糸切痕 底部破片
4	土師器	紡錘車	2.2, —, 3.0	細かな砂粒を含む	にぶい黄褐色	全体的に黒変している 孔 4mm 完形
5	土師器	羽釜	—, 24.0, —	黒雲母と白色粒子が目立つ、砂粒を含む	にぶい橙色	内面一横挽で調整 外面一鈎の接続痕が明瞭 口縁部破片1/10残存
6	土師器	羽釜	—, 31.2, —	白・黒・赤色粒子を含む	灰褐色	内面一上部に刷毛目が施される。下部は磨痕により不鮮明 外面一口縁部は傾斜で、腹部は斜位～縦斜面へ円滑移行 口縁部へ円滑移行

第2号住居址(第7図)

第1号住と同じくすでに試掘調査によって確認されていたものである。南方2.2mに第4号住居址がある。

位置 C-14.15グリッドに位置し、主軸はN-86°-Eをとる。

規模・形態 長軸3.67m、短軸3.00mを計測し、長方形を呈する。

覆土 5層からなり、覆土の大部分は第2層黒色土が占める。多量の礫を含み硬く締まったものであった。堆積状況からは通常のレンズ状を呈する自然堆積とは考えられず、人為的な堆積を想定すべきであろうか。

内部施設 壁高は南東コーナー付近で40cm、カマド左脇あたりで28cmを計測する。南西コーナー付近が垂直に立ち上がる以外は緩やかな立ち上がりとなる。床面は全体に軟弱であり、東側がやや低くなっている。ピットは合計6個確認されている。P1,5などは位置的に柱穴となり得るかもしれないが、浅く、あるいは小さいなどやや難があり、明確に柱穴と推定できるものはない。周溝はカマド左脇から南壁中央、P3まで巡っている。北東コーナー付近で幅41cmと広くなり、南西コーナー付近では10cm程度と狭くなる。深さはほぼ10cmを測る。

カマド(第10図) 住居址東壁中央に設置されている。長軸、短軸とも88cm、床面からの深さ15cmを計測する。左側袖石1個のみ、やや内側に傾いて残っていた。他の袖石、天井石はカマド右側の落ち込みに抜き取られていた。遺物はカマド内よりもカマド前面、P2から集中して出土した。いずれも脆く細片と化し取り上げに困難であった。

遺物(第11~14図)

住居址覆土からの出上りが大部分を占める。1は底部全面ヘラ削りする。体部下半は斜めにヘラ削りされ、体部内面に暗文が施される。口縁端部が外反する。2は底部外周のみヘラ削りし、体部下半は斜めにヘラ削りされる。内面の暗文は磨滅により観察できない。3は口縁端部がやや外反する。7,8,10は底部全面ヘラ削りし、体部下半は斜めにヘラ削りされ、体部内面に暗文が施される。11は底部回転糸切り離し後に外周をヘラ削りしている。16,17の皿は内面に渦巻状の暗文をもつ。19,20は体部外面ヘラ削りされる。22~25は甲斐型の甕である。23,24は磨滅が著しく内外面のハケメは僅かに観察できるのみである。26~28はロクロ整形土師器甕の底部をまとめた。30の凸帯付四耳壺は口縁部破片と体部の肩にあたる破片とから復元実測した物である。平行に叩き締められた体部の肩に断面が三角形になる凸帯が貼り付けられている。口縁部には自然釉がかかり、内面には指頭痕がある。細片のものまで極力図化に努めたため量的には多いがほとんどが破片資料である。住居址の時期は9c中頃~後半に位置付けられる。

<第2号住居址出土遺物一覧>

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面) 外表面	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
1	土師器	壺	3.7, 11.6, 5.3	赤・黒・白色粒子を含む	橙色	内面-暗文あり 外面-ヘラ削り	1/4残存
2	土師器	壺	3.0, 11.4, 5.7	赤・黒・白色粒子を含む	橙色	外面-ヘラ削り 底面-回転糸切り後、ヘラ削り	3/5残存
3	土師器	壺	3.5, 11.4, 5.4	赤・黒色粒子を含む	橙色-灰黄褐色	内面-暗文あり 外面-体部下半ヘラ削り 口縁部-底部の破片	
4	土師器	壺	—, 12.8, —	赤・黒・白色粒子を含む	黒褐色 褐色-にぶい橙色	内面-内黒 外面-横擦で	口縁部破片
5	土師器	壺	—, 11.8, —	白・赤色粒子を含む	にぶい橙色	外面-ヘラ削り	口縁部破片
6	土師器	壺	—, —, —	赤色粒子を含む	橙色	内面-暗文あり	破片

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面) 外顔	整形・特徴・その他	
			器高・口径・底径					
7	土師器	壺	—	—	5.1	赤・黒・白色粒子を含む	浅黄橙色 橙色	内面一暗文あり 外面一ヘラ削り 体部～底部の破片
8	土師器	壺	—	—	4.0	赤・白色粒子を含む	橙色	内面一暗文あり 外面・底部一ヘラ削り 1/4残存
9	土師器	壺	—	—	6.0	赤・白色粒子を含む	黒色 にぶい黄橙色	内面一内黒、暗文あり 底出一回転糸切り痕 破片
10	土師器	壺	4.2	11.4	5.0	赤・白色粒子を含む	にぶい橙色～に ぶい褐色 にぶい橙色	内面一暗文あり 底部一ヘラ削り 外面一ヘラ削り みこみ部一墨脱? 3/5残存
11	土師器	壺	—	—	6.1	赤・黑色粒子を含む	浅黄橙色 浅黄橙色～橙色	外面一ヘラ削り 底部一回転糸切り後ヘラ削り 体部～底部の破片
12	土師器	高台付壺	—	—	7.4	赤・白色粒子を含む	浅黄橙色 橙色	底部一削り出し高台 底部破片
13	土師器	高台付壺	—	13.6	—	赤・白色粒子を含む	明黄褐色 橙色	内面一暗文あり 1/8残存
14	土師器	高台付壺	—	—	5.8	赤・白色粒子を含む	にぶい橙色 橙色	底部一削り出し高台付 破片
15	土師器	皿	2.0	11.6	4.8	金色雲母、赤・ 白色粒子を含む	黒褐色 にぶい赤褐色	内面一内黒 底部一回転糸切り痕 2/3残存
16	土師器	皿	—	—	13.6	赤・白色粒子を含む	橙色	内面一渦巻状暗文あり 外面一回転ヘラ削り 口縁部破片
17	土師器	皿	—	—	6.0	金色雲母、赤・ 白色粒子を含む	明赤褐色 灰褐色	内面一渦巻状暗文あり 外面一回転ヘラ削り 体部～底部破片
18	土師器	皿	—	13.6	—	赤・白色粒子を含む	にぶい橙色	内面一やや稜がある 口縁端部一やや外反する 口縁部破片
19	土師器	皿	—	—	4.8	赤・白・黑色粒子を含む	にぶい赤褐色 橙色	内面一横擦で 外面一回転ヘラ削り 体部～底部の破片
20	土師器	皿	—	—	7.0	赤・白・黑色粒子を含む	橙色	内面一横擦で 外面底部一回転ヘラ削り 体部～底部の破片
21	土師器	甌	—	—	—	赤・白・黑色粒子を含む	にぶい褐色 にぶい黄褐色	外面一ヘラ削り撫で 底部破片
22	土師器	甌	—	24.4	—	金色雲母、白・ 黑色粒子を含む	橙色	内面一横刷毛目 外面一縱刷毛目 口縁部破片
23	土師器	甌	—	27.6	—	金色雲母、白・ 黑色粒子を含む	明赤褐色	内面一刷毛目 外面一縱刷毛目があるが磨滅に より不鮮明 口縁部破片

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
24	土師器	甕	—, 28.0, —	金色雲母、黒色粒子を含む	橙色	内面-刷毛目 外面-縦刷毛目 口縁部破片	
25	土師器	甕	—, 28.8, —	金色雲母、白・黒色粒子を含む	明赤褐色 にぶい赤褐色	内面-口縁部横擦で、胴部縦刷毛目 外面-口縁部横擦で、胴部縦刷毛目 口縁部-胴部破片	
26	土師器	甕	—, —, 9.8	粗い赤・白色粒子を含む	褐色 明褐色	底部-回転糸切り痕 胴部-底部破片	
27	土師器	甕	—, —, 10.4	赤・白色粒子を含む	暗褐色	内・外面-クロクロ擦で 底部-回転糸切り痕、底部内面 満巻状の凸凹あり 底脚片1/3残存	
28	土師器	甕	—, —, 11.0	赤・白色粒子を含む	浅黄橙色 橙色	外面-擦で 底部-回転糸切り痕 底部破片	
29	須恵器	壺	—, —, 7.0	白・黒色粒子を含む	灰黄色～黄灰色	底部-回転糸切り痕 破片	
30	須恵器	凸沿付四耳壺	—, 18.4, —	白・黒色粒子を含む	灰色	内面-口縁部横擦で、胴部指頭痕あり 外面-口縁部横擦で、胴部叩き目 口縁部-胴部破片	
31	須恵器	鉢	—, —, —	白・黒色粒子を含む	灰色 灰黄色		体部破片
32	須恵器	甕	—, —, 16.0	白色粒子、砂粒を含む	黄灰色 灰色	外側-叩き目がみられる(一部削られている) 底部-ヘラ削り	胴部-底部の破片
33	須恵器	甕	—, —, —	白・黒色粒子、砂粒を含む	黄灰色 黒褐色	内面-横刷毛目がみられる 外面-叩き目がみられる	破片

第3号住居址(第7図)

グリッド掘り下げに際して、黄褐色土中に黒褐色土の広がりを確認し、土層観察用のベルトを残し掘り下げる。北方2.5mに第4号住居址がある。

位置 C-12, 13グリッドに位置し、主軸はN-66°-Eをとる。

形態・規模 長軸3.35m、短軸2.68mを計測し、方形を呈する。

覆土 6層からなる。堆積状況からほぼ自然堆積と考えられ、特に北側からの堆積が著しい。

内部施設 壁高は南西コーナー付近で47cm、北壁から東壁にかけて約30cmを計測する。床面は特に踏み固められた部分は認められず、全体にわたって軟弱であった。床面中央がやや高くなり壁際が低くなっている。ピットは3個確認されているが、いずれも柱穴とするには問題がある。

カマド(第10図) 住居址東壁中央よりやや南よりに設置されている。長軸1.24m、短軸0.73mを測る。焚口と燃焼部が明確に識別でき、燃焼部は煙道から急速に落ち込み確認面からの深さ約40cm計測する。燃焼部の表面には焼土が巡るように形成されていた。このカマドは、袖石を使用して住居内に張り出すように燃焼部を確保するカマドの構造と異なり、住居壁面を掘り込みその壁面を利用して燃焼部を造り出している。

遺物(第14~16図)

いずれも破片資料である。住居址覆土中から細片と化した土器が多く出土している。1~3の

須恵器は底径、高さとも若干ばらつきがあるが、口径はいずれも12cmと一致し、底部回転糸切り未調整である。6の土師器は磨滅により内面の暗文は観察できないが、底部全面へラ削りされ、体部下半は斜めにヘラ削りされている。8,11はロクロ整形土師器甕である。11の甕は体部下半がカマド内から、上半は住居址内に散乱していた。接合には到らなかったが胎土・色調などから同一個体と判断して復元実測を行った。9,12は外面ハケ調整される甕である。尚、住居址擾土からウマもしくはウシの歯が出土している。住居址の時期は9c前半～中頃に位置付けられる。

<第3号住居址出土遺物一覧>

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量	胎 土	色調(内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	須恵器	壺	4.5, 12.0, 5.5	白色粒子を含む	灰色	底部一回転糸切り痕 1/2残存
2	須恵器	壺	4.1, 12.0, 6.5	白色粒子を含む	灰色	底部一回転糸切り痕 1/2残存
3	須恵器	壺	3.4, 12.0, 7.0	細かな白色粒子を含む	灰色	底部一回転糸切り痕 1/2残存
4	須恵器	壺	—, —, 6.8	白色粒子を含む	灰色	底部一回転糸切り痕 底部破片
5	須恵器	高台付壺	—, —, 8.2	白色粒子を含む	灰色	高台一張り付け 底部破片
6	土師器	壺	4.6, 12.4, 6.2	砂粒を含む	にぶい橙色	ゆがみが激しい 外面一ヘラ調整 1/2残存
7	土師器	壺	—, —, 6.5	粗い白色粒子が目立つ。赤・黒色粒子を含む	橙色 橙色～にぶい橙色	外面一底部全面へラ削り 底部破片
8	土師器	甕	—, —, 8.5	粗い白色粒子が目立つ。赤・白色粒子を含む	茶褐色	内外面一ロクロ整形による凸凹 がみられる 底部一ヘラ削り? 胴下部～底部破片
9	土師器	小型甕?	—, —, 7.5	金色雲母が目立つ砂粒を含む	にぶい赤褐色～灰褐色	内面一横刷毛目整形 外面一縱刷毛目整形 胴下部～底部破片
10	土師器	甕	—, —, 10.2	砂粒を含む	にぶい黄橙色	内面一横刷毛目 外面一縱刷毛目 (?) 磨滅により不鮮明 胴下部～底部破片
11	土師器	甕	—, 24.8, 35.6	砂粒を多く含み 鋸面がザラつく感じ	褐色	ロクロ整形甕 口縁部～胴下半まで1/3残存
12	土師器	小型甕	—, 13.7, —	金色雲母、黒色粒子を含む	明赤褐色 (内部胴部黒変)	内面一縦刷毛目 外面一胸部 縱刷毛目 口縁部～胴上部破片
13	須恵器	甕	—, —, —	白・黒色粒子を含む	灰色 灰褐色～オリーブ 黒色	内面一横刷毛目がみられる 外面一叩き目 胴下部破片

第4号住居址(第8図)

グリッド掘り下げるに際して黄褐色土中に黒褐色土の広がりを確認し、土層観察用のベルトを残して掘り下げる。北側、南側にそれぞれ約2m程度の距離をおいて2号、3号住居址がある。位置 B, C-13, 14グリッドに位置し、主軸はN-87°-Eをとる。

規模・形態 長軸3.89m、短軸3.20mを計測し、長方形を呈する。

擾土 5層からなる。礫が多く混じり硬く、良く締まるものであった。特に3層までは礫の混

入が著しかった。堆積状況から自然堆積と思われる。

内部施設 壁高は北壁から西壁にかけて約50cm、東壁で30cm程度を測る。床面は全体に軟弱で、特に踏み固められた部分は認められなかった。南西コーナー付近がやや落ち込み、あるいは東側が若干下がるなど一様ではない。ピットは3個確認されているが、いずれも柱穴とは認められない。周溝は東壁から南壁にかけて確認できた。東壁では幅20cm、深さ5cm程度であるが、南壁では幅・深さとも広く、深くなりそれぞれ50cm、20cmを計測する。南壁の周溝に関してはあるいは別の施設とかかわるであろうか。

カマド(第10図) 住居址東壁中央に位置する。長軸85cm、短軸68cm、床面からの深さ15cmを計測する。左側袖石のみ残っており、右袖部分には袖石を据え付けたと思われる掘り込みが確認された。煙道となる明確な掘り込みはない。

遺物(第16, 17図)

住居址全体から出土がみられるが、大部分が廃土中から細片と化したものである。1の須恵器高台坏は角高台を呈し、底部回転ヘラ削り後、高台を付ける。底径が縮小したため傾きがやや大きくなっている。2の須恵器は焼成が悪く還元されていない。底部の回転系切りは確認できない。器高が低いため小ぶりの印象を与える。3, 5は甲斐型の坏である。いずれも体部下半を斜めにヘラ削りされ、内面には放射状の暗文がある。3は底部のみ全面ヘラ削りされるのに対し、5は底部外周のみヘラ削りされる。7~9はロクロ整形上師器甕である。9はカマド内より出土した。住居址の時期は9c前半~中頃に位置付けられる。

(単位 cm)

<第4号住居址出土遺物一覧>

番号	種類	器形	法量		胎上	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
1	須恵器	高台坏	6.2	13.8, 8.0	白・黒色粒子を含む	灰色	ロクロ整形 焼成による歪みがみられる 付高台 2/5残存
2	須恵器	坏	2.7	12.4, 7.6	白・黒色粒子を含む	灰黄色	底部一回転ヘラ削り? 口縁部~底部破片
3	土師器	坏	3.9	11.4, 4.2	少量の赤色粒子を含む	明赤褐色	内面・放射状暗文あり 外面・体部下半、底部全面ヘラ削り 1/3残存
4	上師器	坏	4.5	10.7, 6.0	極少量の砂粒を含む、細かな胎土	にぶい赤褐色	内面・暗文あり 内黒 外面・体部下半ヘラ削り 全体にすり付いている 2/3残存
5	上師器	坏	—	—, 5.8	赤色粒子を含む	橙色	内面・暗文あり 外面・底部外周ヘラ削り? 底部破片
6	土師器	土管型 土器	—	12.6, —	白色砂粒を多量に含む	にぶい褐色	内面・横撫で 外面・統一方向のヘラ削りによる 面取りがしてある 端部破片
7	土師器	甕	—	—, 8.0	粗い白色粒子を多く含む	赤褐色	ロクロ整形 外表面・頭部と体部の一部に叩き目 がみられる 1/4残存
8	土師器	甕	—	25.0, —	赤・白・黒色粒子を含む	橙色	内面・外面・横撫で調整 口縁部~胸部破片
9	上師器	甕	—	22.2, —	赤・白・黒色粒子を含む	赤褐色	内面・外面・横撫で調整 口縁部~胸部破片
10	土師器	筋縫車	筋輪厚 1.3.	筋輪径 6.2	粗い砂粒を多量に含む	橙色	孔 10mm 完形

第5号住居址(第8図)

グリッド掘り下げに際して、黒褐色土の広がりを確認し掘り下げる。調査区外に約半分程度広がる。第6号住居址の東側約2mに位置する。

位置 C-16, 17グリッドに位置する。主軸方法はN-84°-Eであろう。

規模・形態 南北2.64m、確認範囲で東西2.53m程度となる。完掘に到っていないため定かではないが形態は長方形を呈するであろう。

覆土 5層からなる。上層ほど疊の混入が多い。堆積状況から自然堆積だと思われる。

内部施設 壁高は45cm程度を測る。床面は軟弱であった。その他、周溝、ピット、カマドは検出されていない。

遺物(第17図)

遺物の出土は非常に少なく覆土中から僅かに得られたのみである。細片ではあるが極力図化に努めた。1~3は甲斐型の壺である。いずれも内面に暗文が施される。1は口縁端部がやや外反ぎみである。3は体部下半を斜めにヘラ削りされ、底部外周のみヘラ削りされる。4、5の皿は口縁部がやや外反ぎみである。いずれも暗文は細片のため確認できない。4は体部下半にヘラ削り、底部に糸切り痕がみられ、5は内面に明確な稜をもつ。6~9は甲斐型の甕である。いずれも内外面にハケメをもつ。住居址の時期は9c中頃~後半に位置付ける。

<第5号住居址出土遺物一覧>

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調(内面) 外周	整形・特徴・その他
1	土師器	壺	—, 12.9, —	赤・白・黒色粒子を含む	橙色	内面-暗文あり 口縁部~体部の破片
2	土師器	壺	—, 12.2, —	赤・白色粒子を含む	橙色	内面-暗文あり 口縁部~体部の破片
3	土師器	壺	—, —, 5.0	赤・白・黒色粒子を含む	橙色	内面-暗文あり 外面-ヘラ削り 底部-回転糸切り後ヘラ削り 体部-底部の破片
4	土師器	皿	2.3, 12.0, 5.1	赤・白色粒子を含む	橙色 にぶい橙色	内面-横擦で 外面-体部下半にヘラ削りあり 底部-回転糸切り痕 1/6残存
5	土師器	皿	—, 11.8, —	赤・白色粒子を含む	橙色	口縁部やや外反ぎみ 内面に棱をもつ 破片
6	土師器	小型甕	—, —, 7.8	粗い砂粒 金色雲母を含む	暗褐色	内面-横刷毛目 底部-木葉痕 体部~底部破片
7	土師器	小型甕	—, 15.2, —	粗い赤・白色粒子 金色雲母を含む	明赤褐色 赤褐色	内面-口縁部横擦で 外面-継刷毛目 口縁部破片
8	土師器	小型甕	—, 16.6, —	白色粒子 金色雲母を含む	暗褐色 褐色	口縁部、内面-横刷毛目 外面-継刷毛目 口縁部破片
9	土師器	甕	—, 29.4, —	白・黒色粒子 金色雲母を含む	褐色 暗褐色	内面-口縁部横擦で 外面-継刷毛目磨減により不明 口縁部破片

第6号住居址(第9図)

グリッド掘り下げに際して、黒褐色土の広がりと、崩落したカマドの天井石らしき礫を確認する。

位置 B.C-17, 18グリッドに位置する。主軸はN-103°-Eをとる。

規模・形態 長軸2.55m、短軸2.05mを計測する。ほぼ方形となる形態である。

覆土 堀り込みが浅く3層からなる。1層は砂質土、2層はこの調査区で一般的に認められた礫が多く混じる黒褐色土である。堆積状況から西側からの堆積が著しい。

内部施設 壁高はカマド周辺が28cmとやや高く、それ以外は10cm程度を測る。床面は軟弱であった。カマド周辺がやや低くなる以外はほぼ平坦である。周溝、柱穴は確認されなかった。

カマド(第10図) 住居址東壁の南東コーナーによりに設置されている。長軸1m、短軸58cm、床面からの深さ24cmを測る。両袖石、支柱石が残り、天井石もカマド周辺に散乱していた。このカマドには明確な焼土層、焼土塊が確認されず、わずかに1~3層に焼土粒が混じっていただけであった。こうした在り方は通常の消費単位としての住居址とは異質なものであり、住居址の規模、後に述べる墨書き器の出土がみられるなどとあわせて特異な感じを受ける。

遺物(第18, 19図)

1, 2の土師器蓋は縁部にかけてやや内湾して開くものであろう。3の高台壺は底部からやや内湾しながら立ち上がり、内面に花弁状の暗文が施される。底部は削り出し高台である。体部外面に「仁」の墨書きあり。住居址西壁付近の床面直上から出土する。4の皿は口縁端部を外反させ、底部及び体部下半を回転ヘラ削りされる。内面には黒墨の付着があり、底部及び体部に墨書きがある。住居址東壁付近の床面直上から出土する。5~9の甲斐型の甕は5以外カマド内から出土する。

尚、7~9は同一個体であろう。時期は9c前半に位置付けられる。

<第6号住居址出土遺物一覧>

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面 外側)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
1	土師器	蓋	—, 16.4, —	赤・白色粒子を含む	橙色	一部煤付く	外面一回転ヘラ削り 1/3残存
2	土師器	蓋	—, 15.2, —	赤・白色粒子を含む	橙色	一部煤付く	外面一回転ヘラ削り 破片
3	土師器	高台壺	5.6.15.4. 5.8	赤・黑色粒子を含む	にぶい橙色 橙色	内面一花弁状暗文あり 外側一回転ヘラ削り 「仁」あり 底部一削り出し高台	3/4残存
4	土師器	皿	1.9.12.6, —	赤・白色粒子を含む	橙色	外側一全体外面と底部に墨書きあり 底部一回転ヘラ削り 口縁部～底部一部欠損	
5	土師器	甕	—, —, 8.2	砂粒・金色雲母を多く含む	黄灰色 明赤褐色	内面一横刷毛目 外側一継刷毛目 底部一木葉痕	底部破片
6	土師器	甕	—, —, 6.4	砂粒・金色雲母を多く含む	褐色 にぶい褐色	内面一横刷毛目 外側一継刷毛目 底部一木葉痕	底部破片
7	土師器	甕	—, 25.0, —	金色雲母の目立つ砂粒を含む	にぶい赤褐色	内面一横方向刷毛目 外側一継斜ヘリ刷毛目 底部に刷毛工具による削又被痕あり 口縁部欠損	

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
8	土師器	甕	—, —, —	金色雲母の目立つ砂粒を含む	にぶい赤褐色～灰褐色	内面～横刷毛目 外面～縦刷毛目 破片
9	土師器	甕	—, —, 9.2	金色雲母、赤・白色粒子を含む	灰褐色 にぶい赤褐色	内面～横刷毛目 外面～縦刷毛目 底部～木葉底 破片

2 溝状遺構と出土遺物

第1号溝(第9図)

B, C-18, 19, 20グリッドに位置する。第6号住居址の北側4mに位置する。調査区外にまで広がるため定かではないが、幅約5m、長さ12m程が確認された。土層から河川の跡である。西北西から東南東へ流下する。

遺物(第19図)

1は口縁部が丸く作られ、頭が短く、肩がやや角張りそのまま底部にいたる甕であろう。2～5は陶磁器をまとめた。2～4は青磁の碗。5は口縁部がやや肥厚する白磁の碗であろう。中田小14号住で出土例があり、土師質の小皿と共に伴している。11c後葉～12c前葉頃に比定できる。

<第1号溝状遺構遺物一覧>

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土師質	甕	—, 23.6, —	緻密	暗褐色	口縁部破片
2	青磁	碗	—, —, —	精製 白色	淡青緑色	内面～上部均一 外面～上部均一 蓮弁文が施されていると思われる 小破片
3	青磁	碗	—, —, —	精製 白色	淡青緑色	墨付きの部分の輪と素地の境に 鉄足状の様化がみられる 小破片
4	青磁	碗	—, —, —	精製 灰白色	綠灰色	外面～蓮弁文が彫り出されている 口縁部小破片
5	白磁	碗	—, —, —	精製 白色	綠白色	口縁端部肥厚する 口縁部小破片

3 遺構外出土遺物

グリッド掘り下げに際して出土した土器をあげる。第20図は弥生時代後半から古墳時代初頭のものを、第21図は平安時代のものをそれぞれまとめた。弥生時代後半から古墳時代初頭の土器はC-3グリッドとB, C-11, 12グリッド周辺から主に出土した。第20図1, 7, 11, 13, 15は櫛描波状文が施され、5は赤彩される高杯である。6は折り返し口縁をもつ甕であろう。折り返し部に縄文が、その下に櫛描波状文が施されている。堂の前19号住にみられるような東海系と中部高地系との折衷型であろうか(中山1993)。8は櫛状工具による羽状文、9は節の細かい縄文と、ボタン状貼付文が施される。10, 12も8, 9と同じく甕肩部の破片資料である。10は肩状文が、11は節の細かい縄文が施されている。いずれも東海系の影響がみられる。

16はS字型の脚台部である。櫛歯状工具によりハケメが斜めに施される。比較的新相なものであろう。第21図1は口縁部がやや外反し、内面に暗文をもつ壺である。底部は回転糸切り離し後、外周のみ指でナデたような調整がされている。体部下半にはヘラ削りがみられない。2は口縁部がやや外反し、底部全面にヘラ削りされる。3は体部下半にヘラ削りされ、内面には暗文が施されない。底部は回転糸切り後外周のみヘラ削りされる。体部下半のヘラ削りが十分でないためか肉厚が厚くやや異様な感じを受ける。4、5の土師器皿は4が体部下半及び底部をヘラ削りされ、内面に稜をもつ。5は内面の稜は不鮮明で、口縁端部はやや外反する。11は後田D区4号住で出土している土師器の壺となるものであろう。底を大きく抜かれ、丁寧に調整がしてある。15は柱状高台皿である。底部は回転糸切り無調整で壺部の端部は面取りされていない。皿部が窪み直線的に口縁端部にいたる。11c後葉から12c前葉に位置付くものである。

<グリッド出土土器一覧>(第20図)

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外側)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	弥生土器	壺	—, 16.8, —	金色雲母・白色 粒子を含む	赤色	内外でいねいな磨きが施されて いる 口縁部破片
2	弥生土器	壺	—, 17.8, —	砂粒を含む	暗褐色	口縁部内側から折り返し部分まで赤彩されている 口縁部破片
3	弥生土器	甕	—, 19.2, —	白色粒子の目立 つ砂粒を含む	にぶい橙色 にぶい橙色～に ぶい赤褐色	内面～頸部に横刷毛目(磨滅によ り不鮮明) 外面～頸部に織刷毛目、頸部に横 刷毛目か? 口縁部破片
4	弥生土器	壺	—, —, —	粗い赤・白・黒 色砂粒を含む	橙色	内・外面～横刷毛目は擦れでられている ようだが、磨滅によりさら ついていて調整は不鮮明 頸部破片
5	弥生土器	高杯	—, 22.8, —	白・黑色粒子を 含む	内外面 赤彩	内・外面～いねいな磨きによ る整形 杯部破片
6	弥生土器	壺	—, —, —	砂粒を含む	黄橙色 にぶい黄橙色	折り返し口縁で、折り返し部に 縄文が施されている 口縁部破片
7	弥生土器	壺	—, —, —	白色粒子と金色 雲母少々含む	暗褐色 灰褐色	口縁部に波状文が施されている 口縁部破片
8	弥生土器	壺	—, —, —	細かい砂粒を含む	にぶい黄褐色 橙色	外面～櫛歯状工具による刺突文 が施されている 破片
9	弥生土器	壺	—, —, —	砂粒を含む	にぶい黄橙色 明黃褐色	外面～縄文が施されているが磨滅 により不鮮明 ボタン状貼付文が施されて いる 破片
10	弥生土器	壺	—, —, —	砂粒と金色雲母 を含む	にぶい橙色 橙色	外面～肩状文が施されている 破片
11	弥生土器	甕	—, —, —	白色粒子を含む	にぶい褐色	外面～櫛描波状文が施されて いる 破片

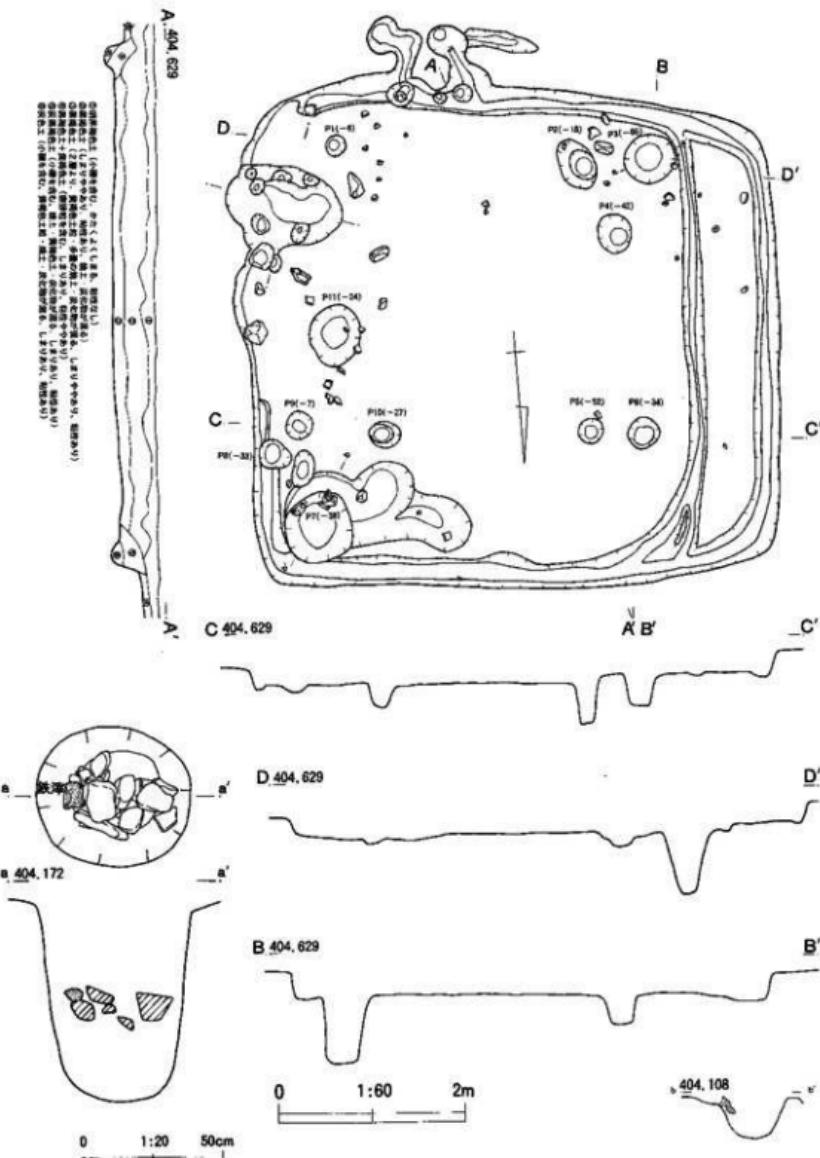
番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
12	弥生土器	壺	—, —, —	赤・白色粒子と金色雲母を含む	浅黄橙色 にぶい橙色	外面一縦文が施されている 破片
13	弥生土器	壺	—, —, —	砂粒と少量の金色雲母を含む	明黄褐色 にぶい黄橙色	外面一横描波状文が施されている 破片
14	土師器	高环	—, —, —	赤・白・黒色粒子を含む	にぶい橙色	外面一擦での後継方向の丁寧な削り 脚部破片
15	弥生土器	壺	—, —, —	白・黒色粒子を含む	にぶい橙色 灰褐色	外面一横描波状文が施されている 破片
16	土師器	台付壺	—, —, 7.6	砂粒を含む	にぶい橙色	内面一擦削痕がみられる 外面一擦底付工具による擦毛目痕が施されている 縫合跡が見つかる 脚部破片
17	弥生土器	壺	—, —, 6.5	赤・白・黒色粒子を含む	にぶい橙色	外面一縦方向にヘラ削り調整が施されている 底部破片
18	弥生土器	壺	—, —, 5.5	細かい砂粒と白色粒子を多量に含む	明赤褐色	外面一きれいに擦でられている 底部破片
19	石器	磨製石器	—, —, —		—	表面各辺を研磨により仕上げられている 1/4残存
20	土製品	勾玉	長さ 厚さ 孔径 3.3, 1.3, 0.3	砂粒を含む	赤褐色	「く」の字形に溝曲が観察され、完形

<グリッド出土土器一覧>(第21図)

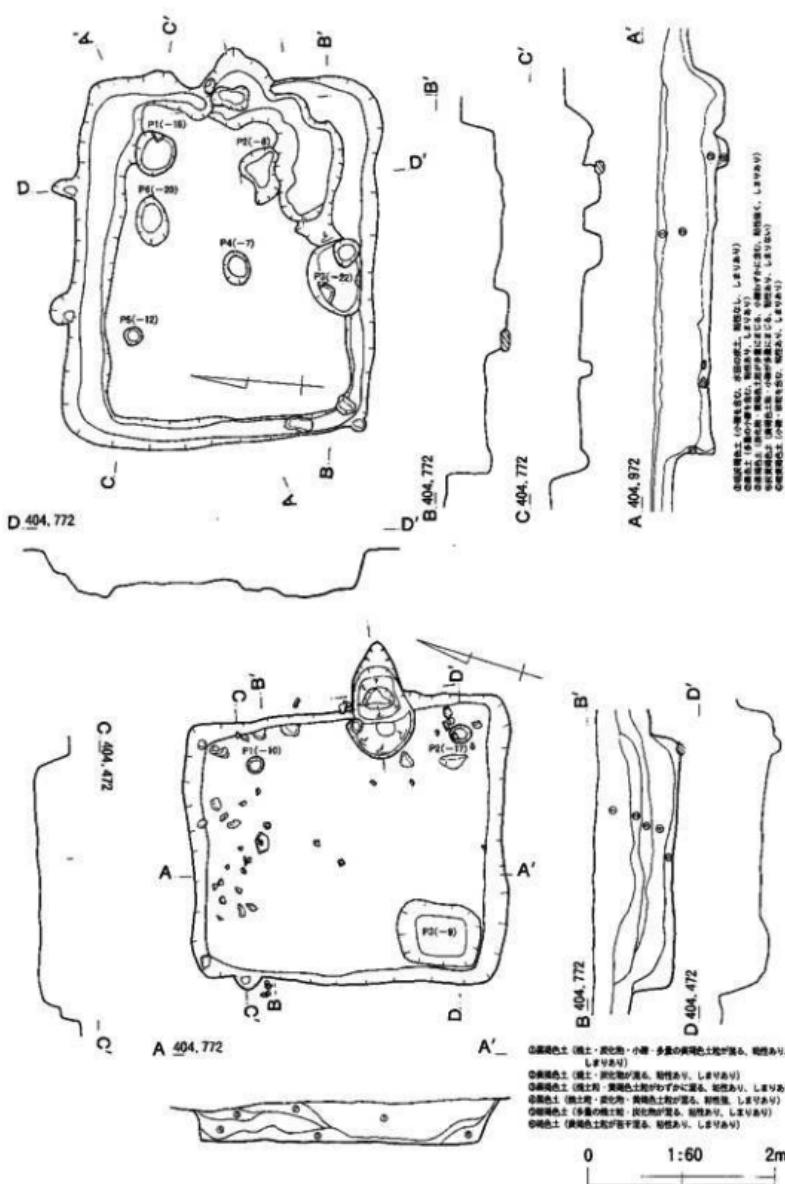
(単位 cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土師器	环	4.4, 12.4, 6.0	金色雲母が目立つ	にぶい黄橙色	内面一晴文があるが磨滅により形が不明瞭 外面一ヘラ削りが施されない、底部底付糸切り 1/4残存
2	土師器	环	4.1, 12.8, 4.6	赤・黒色粒子を含む	にぶい橙色	外面一底付手打ちヘラ削り 底部下半にヘラ削り? (磨滅により不鮮明) 1/4残存
3	土師器	环	4.7, 11.7, 5.3	細かい砂粒を含む	橙色	外面一ヘラ削り 底部一回転糸切り痕 3/4残存
4	土師器	皿	2.3, 13.0, 6.0	細かな白色粒子を含む	橙色	内面一晴文がありそうだが不鮮明 外面一ヘラ削り 1/4残存
5	土師器	皿	2.1, 13.0, 5.0	細かな赤・白色粒子を含む	橙色	内面一晴文があるが磨滅により不鮮明 底部一回転ヘラ削り 1/4残存
6	須恵器	高台付环	—, —, 8.7	白色粒子を含む	灰色	底部一高台貼り付け 底部破片
7	須恵器	环	4.2, 12.0, 6.0	白色粒子を含む	灰色	底部上半邊元されていない 底部一回転糸切り痕 1/5残存
8	灰陶陶器	壺	—, 14.1, —	白色粒子を含む	灰白色	内面一施釉 外面一底部下部を除き施釉 口縁部破片
9	須恵器	壺	—, 18.0, —	白色粒子を含む	暗灰色	内面一灰の付着によるピンホールの多い自然釉がみられる 外面一自然釉 口縁部破片

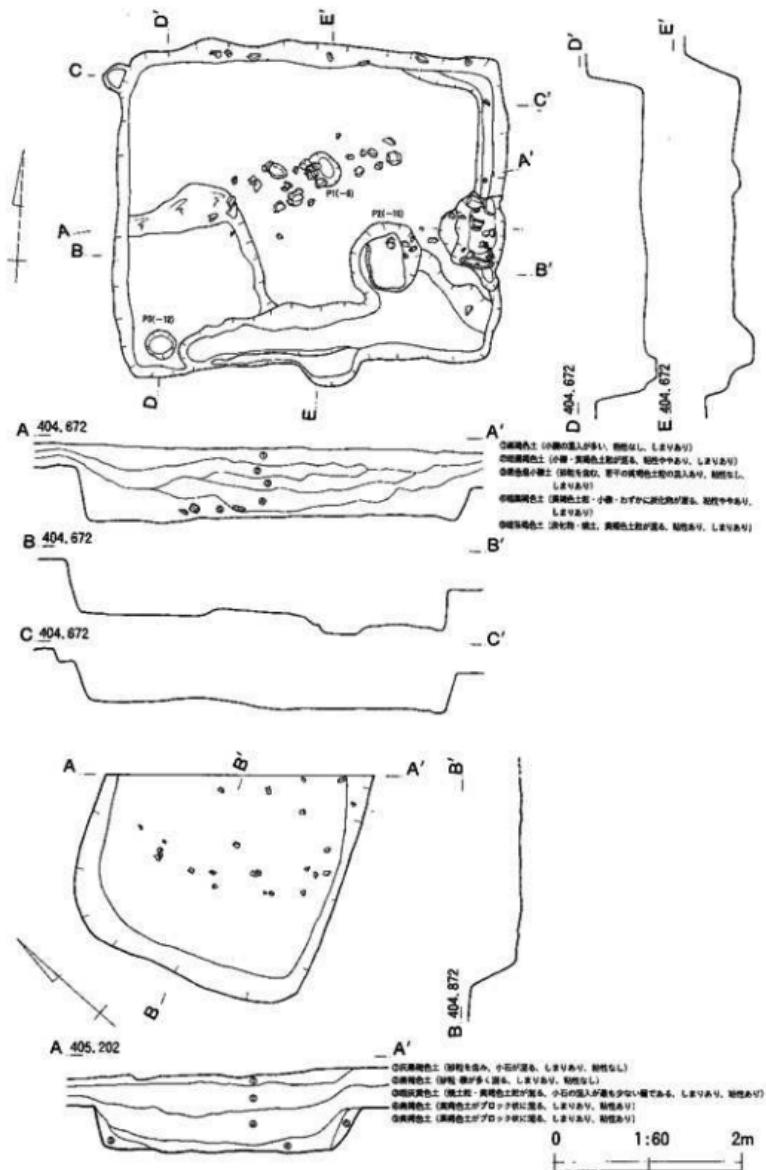
番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
10	灰釉陶器	壺	—, —, 13.6	白・黒色粒子を含む	灰色	雑な整形 底部破片
11	土師器	甌	—, —, 12.0	赤・白・黒色粒子を含む	にぶい赤褐色	内面一横撫で 外面一縦方向へラ削り調整 底部破片
12	須恵器	甌	—, —, 13.3	白・黒色粒子を含む	オリーブ灰色	内面一胸部にはっきりした輪郭が一本みられ、その上に指彫痕あり、棒状工具による底部と胸部の接合痕もみられる 外面一平行印き目 胸下半部～底部の擦付
13	土師器	甌	—, —, 5.5	白色粒子の多い砂粒を含む	にぶい褐色 橙色	内面一粗い横刷毛目整形 外面一斜縦刷毛目整形 底部一木炭痕あり 底部破片
14	土師器	甌	—, —, 7.5	金色雲母の目立つ砂粒を含む	赤褐色	内面一指彫正によりつぶし調整 外面一斜縦刷毛目整形 底部一木炭痕あり 底部破片
15	土師質	柱状 高台皿	3.6, 8.1, 4.8	白色粒子と多量の金色雲母を含む	橙色	口クロ整形 底部一回転糸切り 口縁部一部欠損



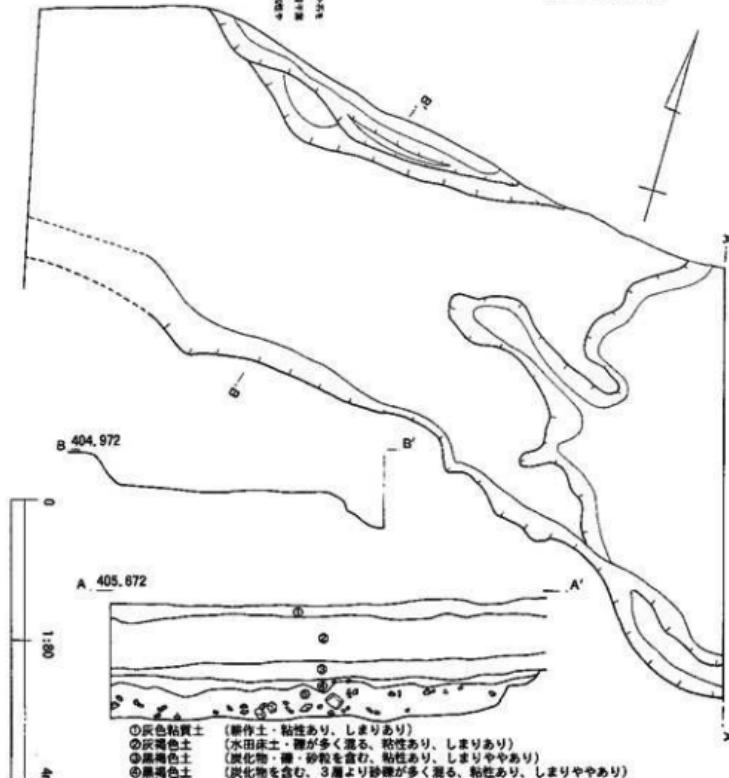
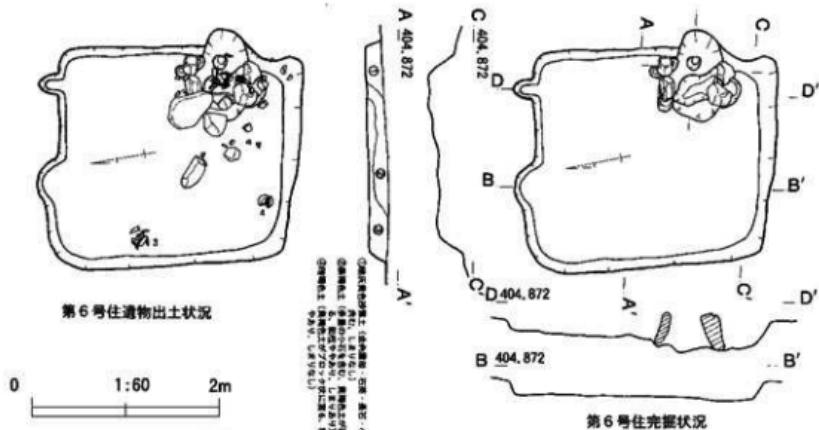
第6図 第1号住居址実測図



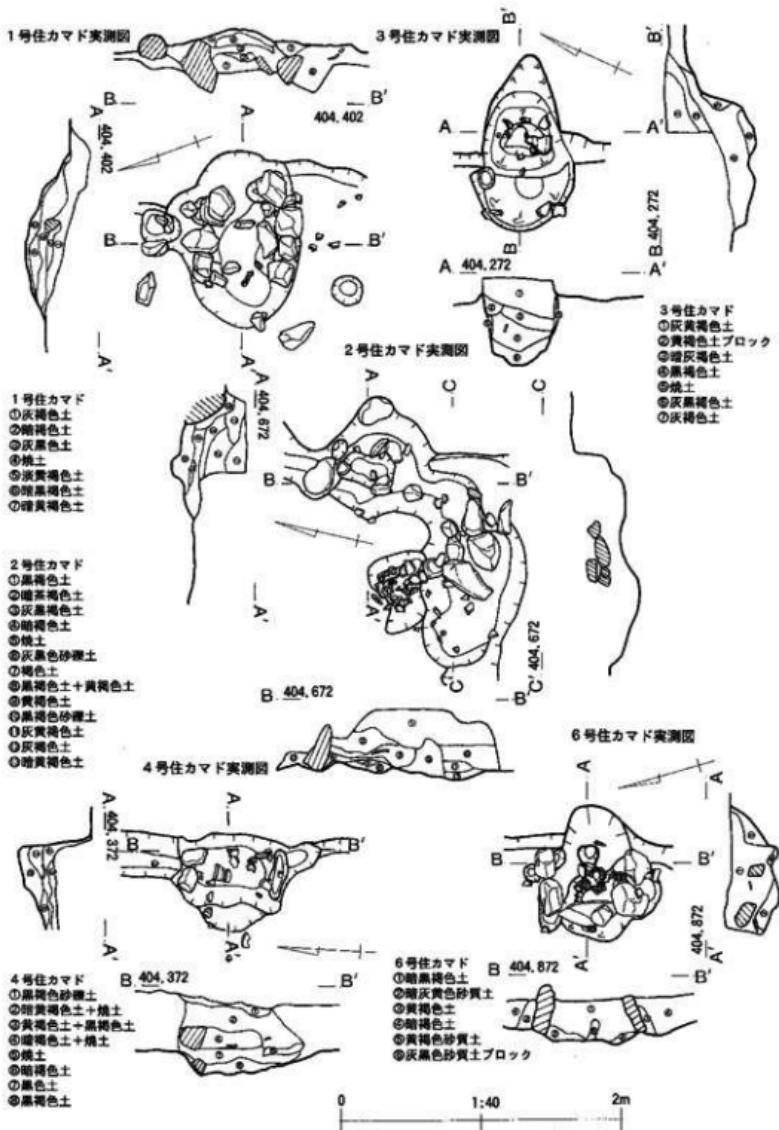
第7図 第2、3号住居址実測図



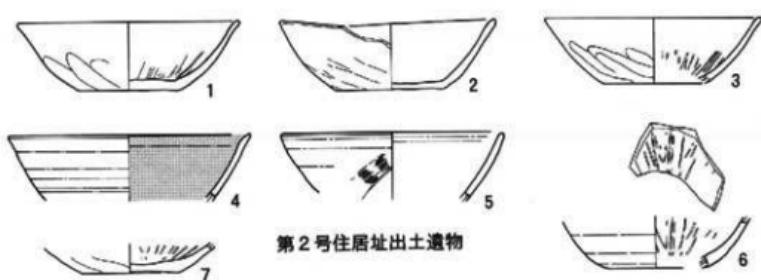
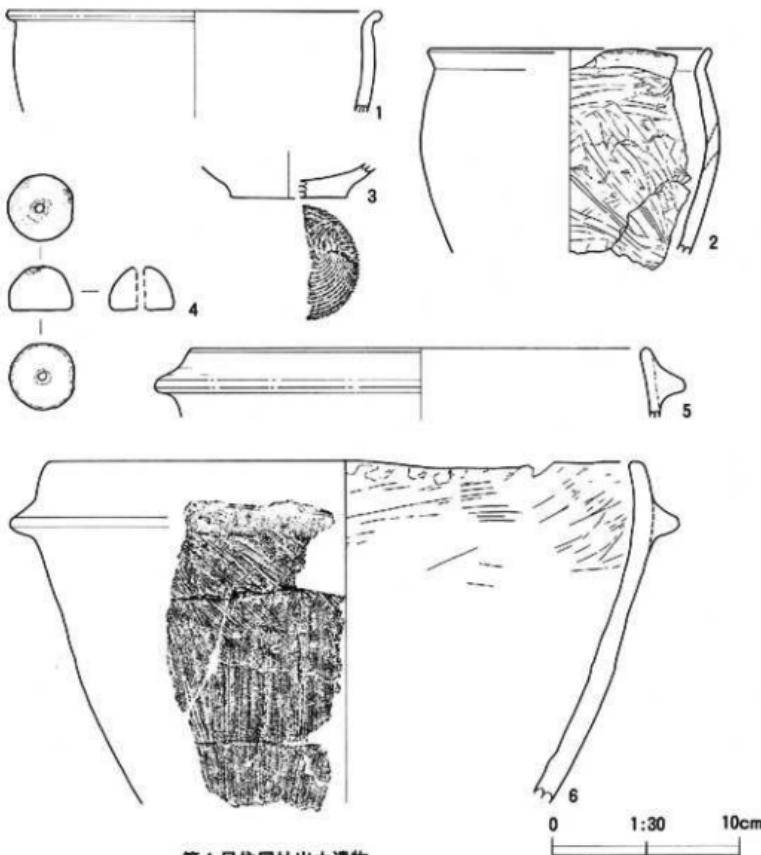
第8図 第4. 5号住居址実測図



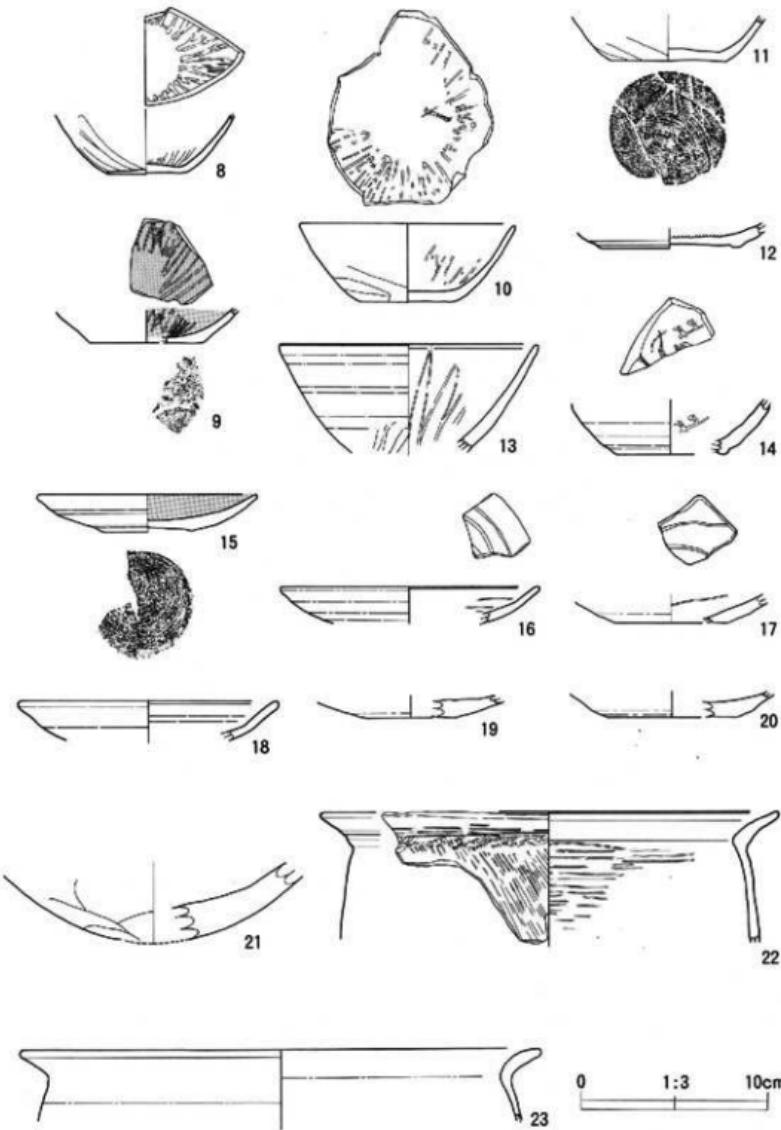
第9図 第6号住居址・第1号溝状遺構実測図



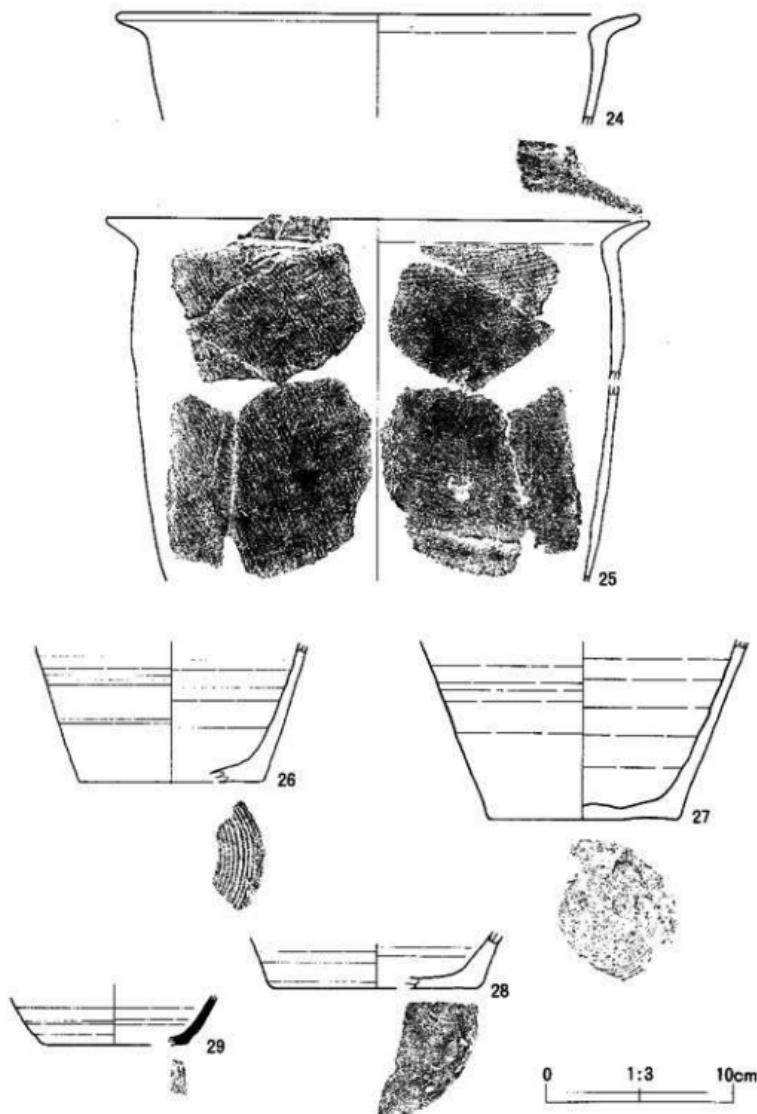
第10図 住居址カマド実測図



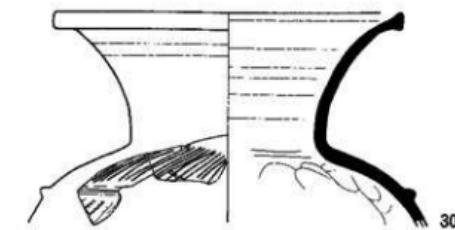
第11図 第1、2号住居址出土遺物



第12図 第2号住居址出土遺物



第13図 第2号住居址出土遺物



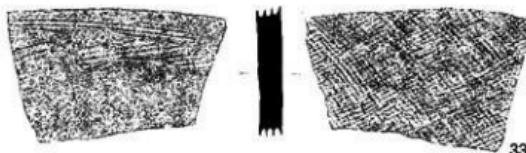
30



31

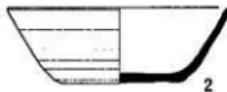


32



33

第2号住居址出土遺物



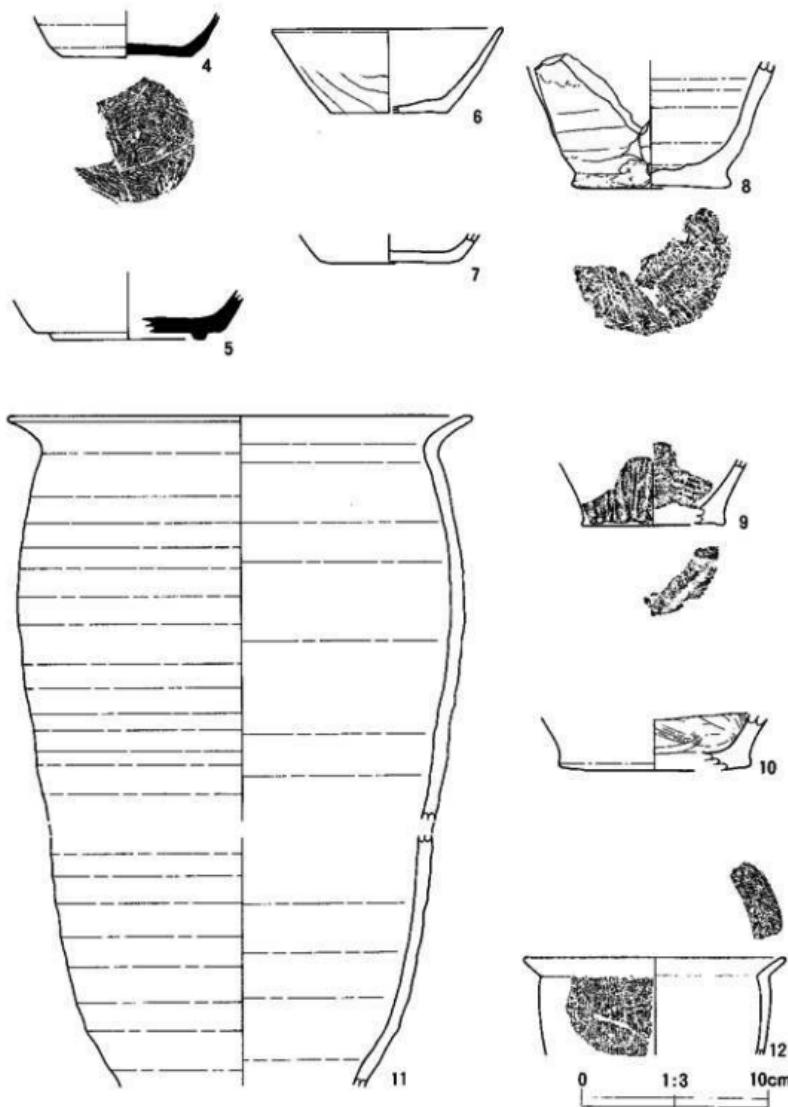
3



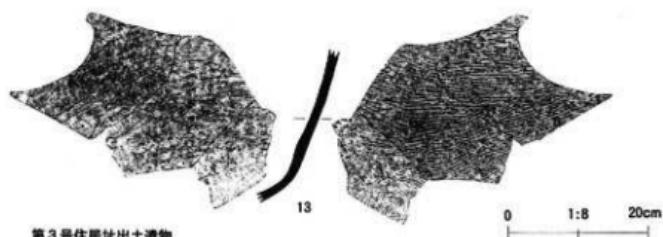
0 1:3 10cm

第3号住居址出土遺物

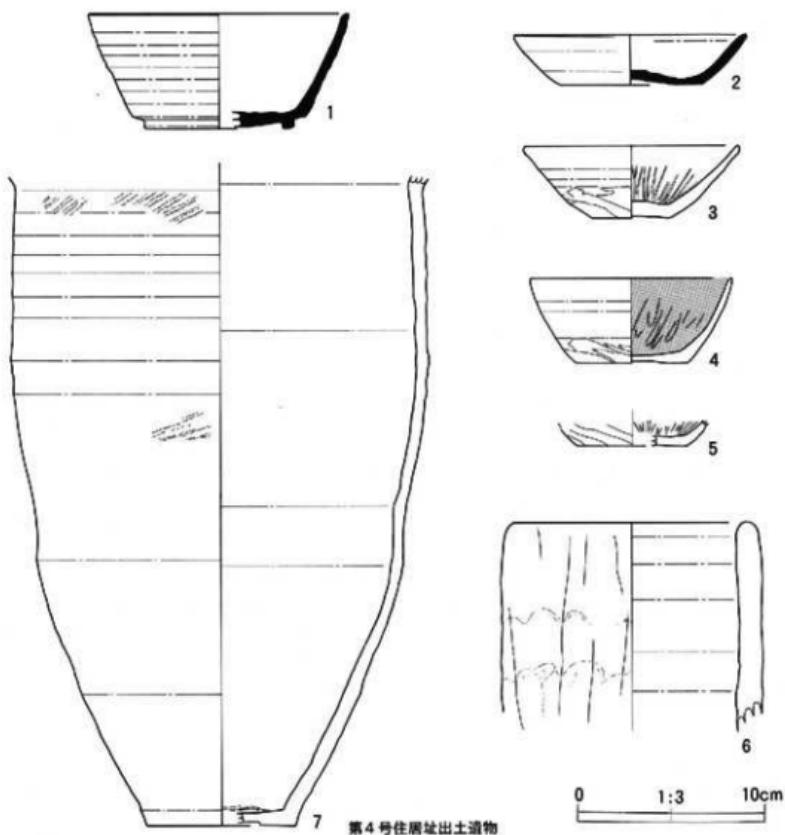
第14図 第2、3号住居址出土遺物



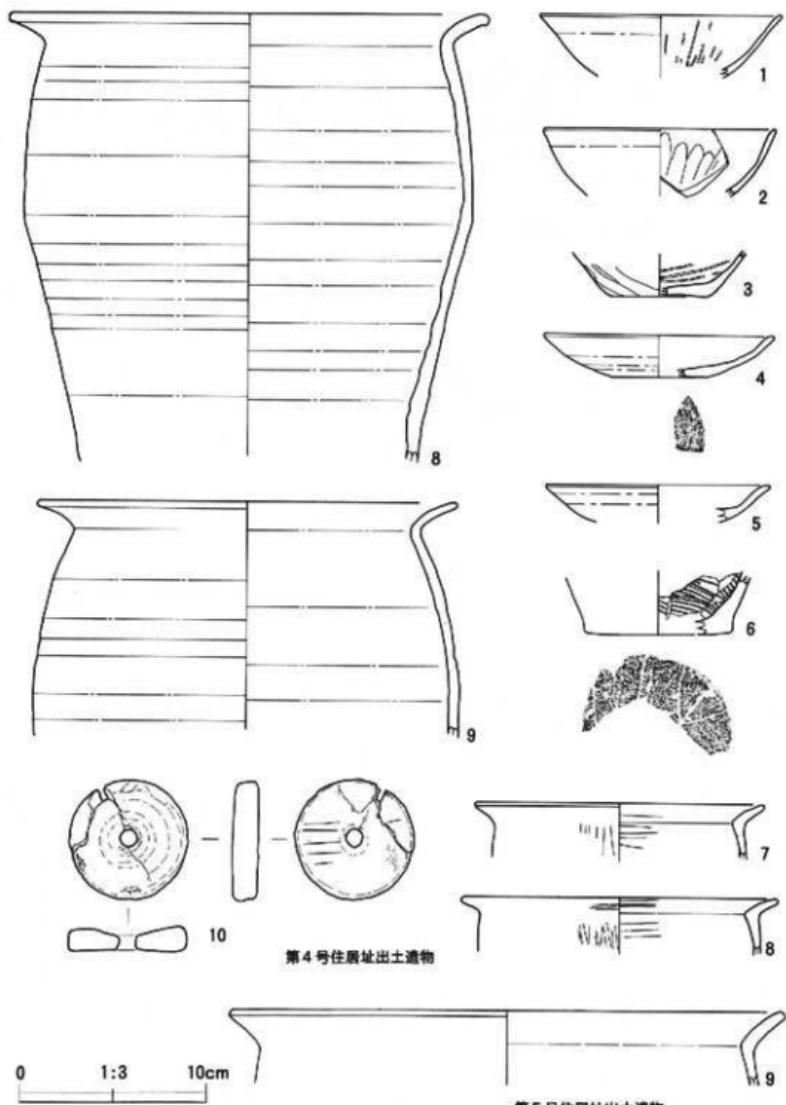
第15図 第3号住居址出土遺物



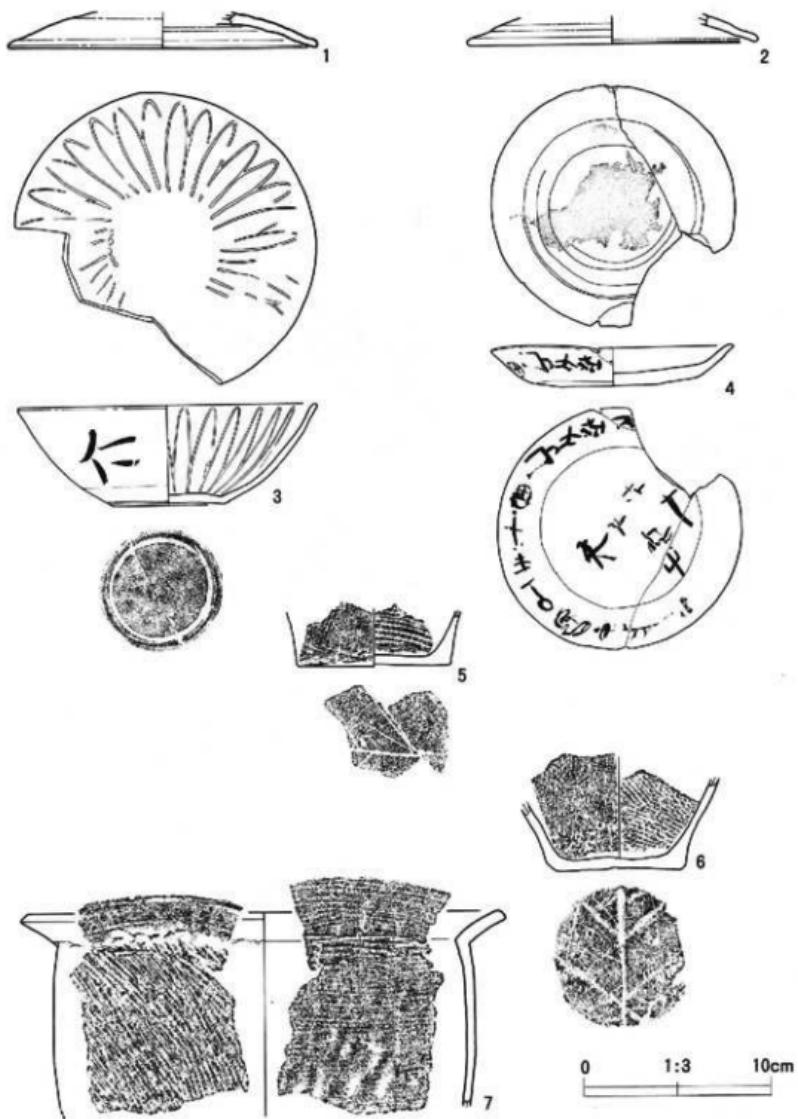
第3号住居址出土遺物



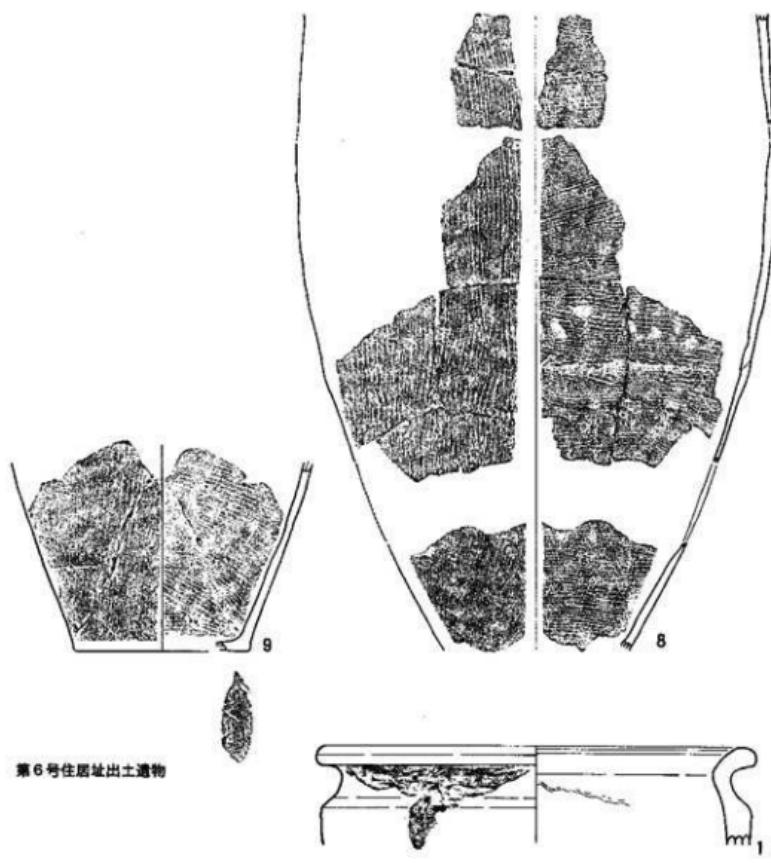
第16図 第3、4号住居址出土遺物



第17図 第4、5号住居址出土遺物



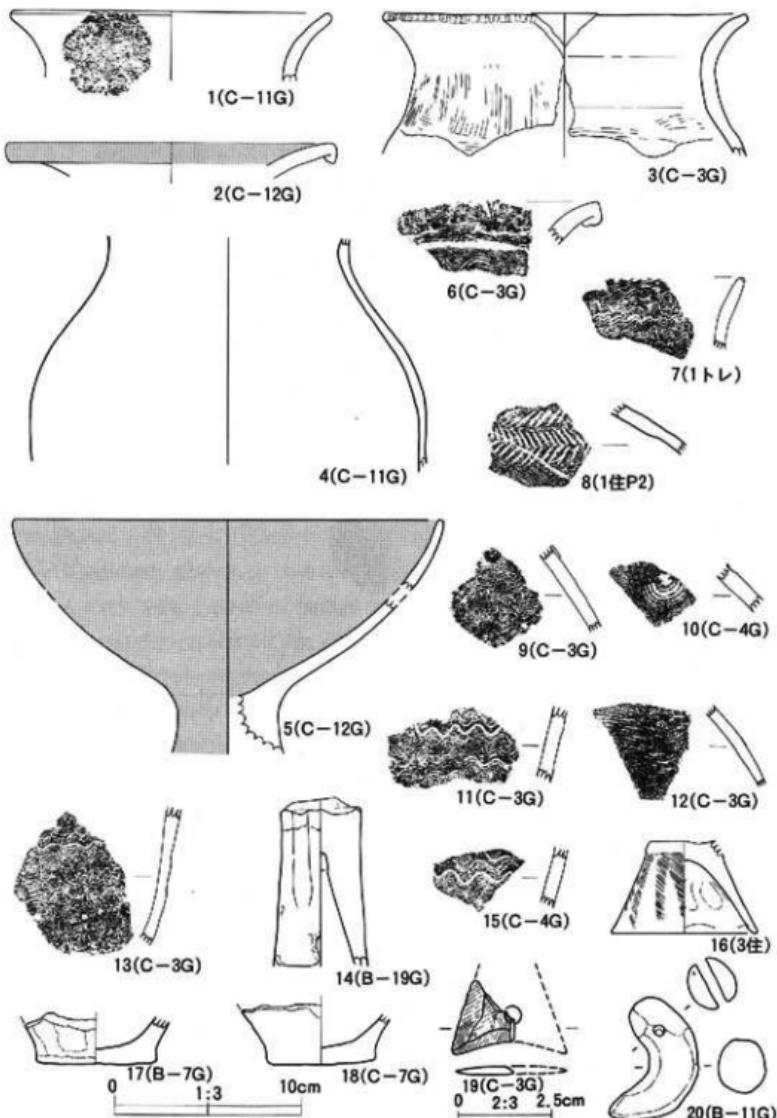
第18図 第6号住居址出土遺物



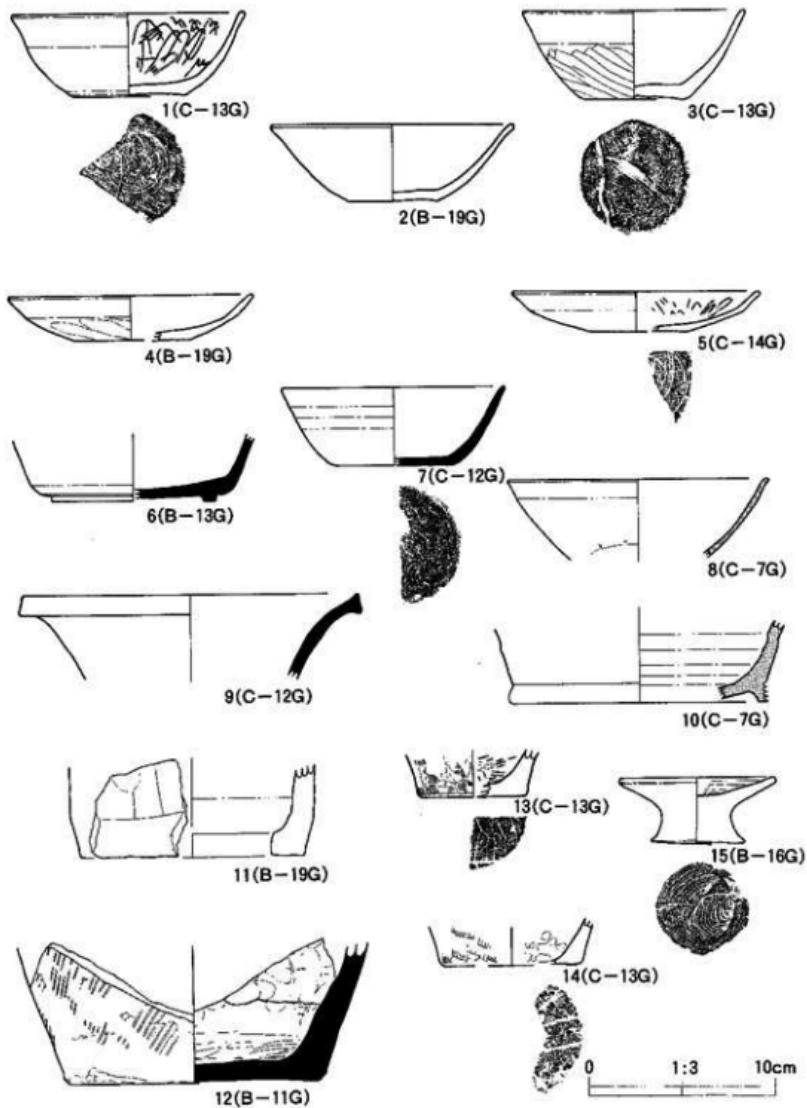
第1号溝状遺構出土遺物

0 1:3 10cm

第19図 第6号住居址・第1号溝状遺構出土遺物



第20図 グリッド出土遺物



第21図 グリッド出土遺物

第2節 繩文時代

1 土坑と出土遺物

今回の調査では42基の土坑(16, 17, 43号土坑は欠番)と7基の配石土坑及び配石遺構1基が確認された。配石土坑は土坑上部に比較的大きな礫が集合状態にあるもので、意図的に配列されていると思われるものについて配石土坑とした。挙大ほどの礫が土坑上部あるいは内部に集合状態のものについては集石あるいは配石土坑とはせず、土坑として一括した。配石遺構は礫がある程度の面的な広がりを持って配列され、配石下に土坑などが確認されなかったことから配石土坑と区別した。配石遺構と第45号土坑が第3区で確認された以外は全て第1区からの検出である。

第1号土坑(第22図)

B-5グリッドで確認する。平面形はやや不整形ではあるが円形を呈し、底面は1段深くなっている。規模は長径111cm、短径94cm、深さ39cmとなる。遺物は確認面近くからの出土がほとんどであった。すぐ東側に第3号土坑が隣接する。

土器(第33図)

1は口縁部の細片資料である。おそらく2本の平行する沈線により帯状部を作り出しその中に繩文を充填するものと思われる。充填繩文は単節LRである。2は底径4cmの小形の土器である。3の口縁部破片は櫛歯状工具による条線文が横位に、その後縦位に施されている。格子目状となるかどうか定かではない。堀之内1式段階のものであろう。4の底部には木葉痕があり、5の土器は磨滅により器面がザラつく。外面縦方向、内面横方向のナデにより調整が行われ、底部は丁寧に磨かれている。土坑の時期は出土土器にやや時間幅があるが、堀之内1式段階としておく。

第2号土坑(第22図)

B-5グリッドにある。規模は長径67cm、短径66cm、深さ75cmとなり、平面形は円形を断面形は円筒形を呈する。坑底はほぼ平坦である。覆土は2層からなり大部分を1層が占め、2層は土坑南側から南東側にかけての坑底から中位にかけて認められたに過ぎない。

土器(第33図)

1は土坑上部からの出土である。口縁部から胴部まで約1/3からの復元である。推定口径32cm、現高23.5cmである。色調は赤褐色、胎土には砂粒を多く含む。器形は口縁部が「く」の字状に外反し、頸部から胴下半まではほぼ直線的にすぼまる。口縁部に最大径を持ち、口唇部はやや内折する。口縁部は無文帶となり頸部以下胴部下位まで刺突文がほぼ全面に施されるものである。刺突文は縦位に施され、器面に対して斜め上から押し引かれ、三角状になる。

また胴下半に到るに従って手抜きが認められ刺突は浅く、押し引きは短くなる。この土器は新潟県から福島県会津地方に濃厚に分布する三十稻場式土器の影響を受けたものであろう。通常、四単位の橋状把手が口縁部無文帯に付ぐが、検出されなかつた。三十稻場式土器の刺突文にはいくつかの種類が認められているが(田中1985)、この土器の刺突文類例を敢えて求めれば、「施文具の背を土器に押し引き、三角状を呈するもの」に求められるであろうか。2の土器は2層中から出土したもので、胴中位から下位の部分であろうか。縦位に単節LR繩文が施文されている。土坑の時期は1の土器が三十稻場式土器の古段階に対応し、称名寺式との併行関係が想定されていることから大きく称名寺式段階と捉えておく。

第3号土坑(第22図)

B-5グリッド、1号土坑の東側に隣接して検出される。規模は長径80cm、短径65cm、深さ11cmを測る。平面形は梢円形、断面皿状となり、坑底はほぼ平坦である。出土遺物は無文の土器片のみであった。

第4号土坑(第22図)

B-3グリッドで確認し、規模は長径78cm、短径76cm、深さ52cmを測る。平面形はほぼ円形、断面円筒形となり、西側から北側にかけてテラスがある。出土遺物はなかった。

第5号土坑(第23図)

B-4グリッドで確認する。規模は長径138cm、短径105cm、深さ43cmを測る。平面梢円形、断面丸底状となり、北側にテラスがある。土坑底に挙ほどの礫が多数詰まっており遺物の出土はその上からである。礫や土坑底に被熱の痕跡はなかった。第6号土坑と重複関係にあり、土層堆積から第6号土坑が先行するものと判断した。

土器(第34図)

1の深鉢底部は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。隆帶貼付後に棒状工具により沈線が施される。2は土圧により押し潰された状態で1ヵ所に纏まって検出された。口縁部を欠損する以外、ほぼ完形の土器である。底部より口縁部にかけて緩やかに外反し、内面底部付近にはオコゲが付着している。煮炊きに使用されたものであろう。文様は丁字形に粘土紐を貼付し、器面を4分割し区画内に半截管状工具により沈線が充填される。充填された沈線は非常に雑な感じを受ける。底径15.2cm、現高43.1cmを計り、胎土に砂粒を含み、赤褐色を呈する。2次焼成を受けているため器面がザラつく。3は口縁部から胴中位と胴中位から底部までの2つに分かれて土坑の東側、西側から纏まって出土した。口唇部が欠損する以外ほぼ完形である。胴中央に窓枠状の隆帶とX字状の突起がおそらく四単位貼付され胴部を上下に2分割する。胴上部には粘土紐を5本貼付し、その間に波状の粘土紐を4本貼付する。胴下部にはX字状の突起から2本一単位の隆帶が垂下し器面を4分割する、分割された区画内には棒状工具により沈

縁が縦位に充填される。X字状の突起は3ヶ残存するが、1ヶは穿孔されていない。赤褐色を呈し、内外面ともミガキが行われる。底径12.4cm、現高26.4cmである。4は3の土器より10cm程度浮いて出土したものである。ミミズクと思われるモチーフが隆線と沈線によって表出される中空把手である。ミミズク把手の上に配される隆線のU字状のモチーフが把手間を連結するものとなろう。把手の下には半截竹管状工具による沈線が縦位に施されている。赤褐色を呈し、白色粒子の目立つ砂粒を多く含む。これから4点はいずれも曾利I式に比定できる。

第6号土坑(第23図)

B-4グリッドで確認し、第5号土坑と重複する。規模は長径97cm、短径91cm、深さ36cmを測り、平面形は円形、坑底は1段深くなる。土坑内に幼児頭などの穢がいくつか混じるが、遺物の出土は少なかった。

土器(第35図)

1は波頂部にC字状の突起があり、口縁部が段をなし無文帯部を作るなど称名寺式期のものであろう。2は隆線と沈線が施される把手。3には棒状工具による沈線が見える。前述したように本土坑は5号土坑より先行するが、その際1の土器が問題となる。1は土坑内からではなく、土坑の縁からの出土であり確実に伴うものかどうか不安な資料である。そのため2,3の資料から土坑の時期を曾利I式期としておく。土器以外の遺物では黒曜石片(72図36)、石錘(79図93)が出土している。

第7号土坑(第22図)

B-4,5グリッドで確認する。長径129cm、短径86cm、深さ31cmを測る。平面横円形を、断面皿状となり、西側にテラスがある。坑底は平坦であった。遺物の出土はない。

第8号土坑(第22図)

B-4グリッドで確認し、長径58cm、短径53cm、深さ45cmを測る。平面円形を、断面円筒形となる。粧ほどから幼児頭などの穢が3点混入していた。覆土は3層からなり1層中に焼土、炭化物が混じっていた。

土器(第35図)

5点出土したが、図化できたのは1点のみであった。2本の沈線により帯状部を作り出しているが、繩文が充填されているか磨滅により定かではない。文様の流動化が窺われることから、称名寺II式に位置付けられるものである。

第9号土坑(第22図)

B-3,4グリッドに位置し、長径55cm、短径50cm、掘り込みは12cmを測る。平面円形を、断面丸底状となる。本来黑色土をした包含層から掘り込まれていたものであろうが、土層の

見分けがつかず掘り込んでしまった。遺物の出土状況は土坑底に35図2,3の土器片が敷かれ、その上に多数の礫が積み重なるような状況であった。

土器(第35図)

1は沈線による帯状部に単節LR繩文が充填される。称名寺式期に属するものであろうか。2は内外面とも良く磨かれており、赤褐色を呈する胴下半部の破片である。3は口縁部から胴上部まで約半分残存する深鉢である。口縁部では横位に、胴部では縦位にLR繩文が施されている。黒褐色を呈し、砂粒を多く含み器面がザラつく。他に石錐(80図109)が出土する。

第10号土坑(第22図)

B,C-5グリッドに位置する。長径105cm、短径77cm、掘り込みは17cmを測る。平面不整形となり、断面皿状、坑底はほぼ平坦である。土層中に掘り込みが確認できず、土坑と認定するのにやや不安なものである。遺物は土坑中に散在していた。

土器(第36図)

小片ばかりが何点か出土している。3の口縁部片は円形の刺突が2列あり、その下に微隆起帶が確認できる。称名寺期の関沢類型と呼ばれるものであろう。4~6はいずれも称名寺式期のものであろう。他に黒曜石片(72図33)が出土している。

第11号土坑(第23図)

C-4,5グリッドに位置する。長径27cm、短径27cm、掘り込みは28cmを測る。平面正円形を、断面すり鉢状となる。土坑底に挙ほどの礫があり、土器は確認面近くからの出土である。出土した土器は1点で(第36図)、推定口径14.2cmを計る小形の土器である。口縁部が内折し、底部まで直線的に到る器形と思われる。刻みが施される隆帶が3本貼付され、更にそこから2本一単位の隆帶が垂下し器面をおそらく4分割する。区画内には半截竹管状工具により沈線が充填される。曾利I式に比定されるものである。

第12号土坑(第24図)

C-4グリッドに位置する。長径211cm、短径128cm、掘り込みは54cmを測る。平面梢円形をなし、土坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。13,14号土坑と重複する。大型の土坑であるが遺物の出土は僅かで、しかも散在的な出土状況であった。

土器(第36図)

1は口縁部に沈線によって枠状の区画が作り出されるもので称名寺式でも古い段階のものである。充填繩文は単節LRである。2は微隆起線が口縁部を巡る加曾利E IV式土器であろう。3は櫛齒状工具による斜行線で、おそらく格子目状に引かれるものである。5は太く、深い沈線が引かれ、6には単節LR繩文が縦位に見られる。時間差があるが本土坑は称名寺式段階に位置付ける。

第13号土坑(第24図)

C-4グリッドに位置する。長径82cm、短径57cm、掘り込みは51cmを測る。平面橢円形をなし、西壁は垂直に落ち込み、東壁は緩やかに立ち上がる。土層は3層からなり東側からの堆積が顕著である。遺物の出土はなかった。

第14号土坑(第24図)

C-4グリッドに位置し、長径104cm、短径71cm、掘り込みは44cmを測る。平面不整形円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がり、北側がすり鉢状に深くなる。西側にテラスがある。遺物の出土は少ないものの西側から集中して検出された。

土器(第36図)

1~3は半截竹管状工具により肋骨文が施文されるものであり、6は節の細かいLR繩文が見える。いずれも諸磣a式土器である。4,5は太く・深い沈線が引かれ、特に5は内面に粘土の盛り上がりが見える。充填繩文は単節LRである。どちらも称名寺式土器の古段階に位置付けられるものである。

第15号土坑(第24図)

C-4グリッドに位置する。長径136cm、短径104cm、掘り込みは39cmを測る。平面不整形を呈し、壁は緩やかに立ち上がり、中央がすり鉢状に深くなる。あるいはいくつかの土坑が重複しているのかも知れない。遺物はすり鉢状に深くなる中央部分に集中していた。

土器(第37図)

1は無文の粗製深鉢である。暗褐色を呈し、胎土に大粒の砂粒を含み、磨滅によるためか器面が非常にザラつく。3は櫛齒状工具による格子目文があり、堀之内1式に比定できる。4は2本の沈線間に列点が充填される。称名寺式の新段階に位置付けられる。出土土器に時間差があるが、土坑の時期は堀之内1式段階まで下るであろうか。

第18号土坑(第25図)

C-3グリッドに位置し、長径74cm、短径65cm、掘り込みは20cmを測る。平面円形を呈し、断面皿状となる。人頭大ほどの礫が中心にかたまって出土する。土坑底には土器底部が伏せてあり、その上に礫が置かれていた。

土器(第37図)

1,2は同一個体であろう。太くかつ深い沈線が引かれ、沈線間には節の細かい繩文が充填されている。赤褐色を呈し、砂粒を多く含む。磨滅により器面がザラつき繩文がはっきり確認できない。1の口唇部には刺みが3ヶ所ある。3~6も同一個体であろう。同じように太くかつ深い沈線が引かれ、内面に粘土の盛り上がりが確認できる。充填文様は磨滅により確認できない。

第19号土坑(第25図)

C-3,4グリッドに位置する。長径90cm、短径88cm、掘り込みは40cmを測る。平面円形を呈し、断面鍋底状となる。人頭大ほどの礫1点と38図の土器が破片となって散在しており、特に意図的なものは感じられなかった。土層は5層からなり、全体的に花崗岩の小礫を多く含み、しまりのないものだった。出土土器は数点あり全て同一個体であった。38図の土器は口縁部に橋状把手がつき、隆帯が胴上部と口縁部に巡る。胴上部の隆帯下には単節LR繩文が施されている。推定口径10.3cm、現高21cm、約1/4からの復元実測である。暗褐色を呈し、砂粒を含む胎土である。内外面とも良くミガキが行われているが、胴部は磨耗によりザラつく。加曾利E IV式に比定できる。

第20号土坑(第25図)

B-3グリッドに位置する。長径120cm、短径111cm、掘り込みは35cmを測る。平面不整円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がり、西側にテラスがある。礫は土坑中央部に底から浮いて検出された。遺物の出土はなかった。

第21号土坑(第25図)

B-3グリッドに位置し、長径90cm、短径88cm、掘り込みは16cmを測る。平面円形を呈し、断面皿状となる。壁は緩やかに立ち上がり、坑底はやや凹凸がある。礫1点が土坑中央部に底から浮いて検出された以外、遺物の出土はなかった。

第22号土坑(第25図)

A-3グリッドに位置し、長径67cm、短径67cm、掘り込みは23cmを測る。平面円形を呈し、断面鍋底状となる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は北側が低くなる以外はほぼ平坦である。礫が数点検出された。土坑中央部に底から浮いて石皿(81図124)が検出された以外、取り上げるべき遺物の出土はなかった。

第23号土坑(第25図)

A-3グリッドに位置し、長径96cm、短径77cm、掘り込みは36cmを測る。平面橢円形を呈し、断面鍋底状となる。壁は緩やかに立ち上がり、坑底はほぼ平坦である。出土土器は圓化したもののが全てであり、2点の把手は土坑西側の底近くからの出土で、それ以外の小片は土坑上部からの出土であった。

土器(第38図)

1の把手は断面三角形をした粘土を貼り付け把手を作り出し、沈線によって渦巻きのモチーフが描かれる。暗褐色を呈し、砂粒が多く混じり器面がザラつく。2は水煙形土器の把手であろう。隆線と沈線によって渦巻、波状に文様が表出されている。内面上部と外面下部に単節

LR縄文が施されている。3~5はいずれも半截竹管状工具による沈線がみられる。全て曾利I式段階のものであろう。他の遺物では黒曜石製の石鍤(71図20)が出土する。

第24号土坑(第26図)

B-6グリッドに位置し、長径144cm、短径82cm、掘り込みは37cmを測る。平面不整形を呈し、断面丸底状となる。壁は緩やかに立ち上がり、坑底は南側で一段深くなり、北側が比較的平坦である。土層からは確認できなかったが北側で別の土坑と重複しているのかも知れない。土坑内からは人頭大から拳程度の礫が多数検出した。特に土坑底が1段下がるところに礫が集中するようである。図化した土器は大きく2枚に割り、しかも礫を間に挟んで重なって出土する。土坑上にあたかも蓋をするように礫が検出されているのとあわせると特異な状態である。出土土器は十数点あったがいずれも細片となっており図化にいたらなかった。図化した土器は胴下半から口縁部にかけて約1/2残存しており、明赤褐色を呈し、砂粒を含む。口縁部には粘土の輪積痕が残り、胴部にはミガキがみられる。石器では磨製石斧(74図52)と台石(81図129)が出土する。

第25号土坑(第26図)

C-6グリッドに位置し、長径48cm、短径45cm、掘り込みは18cmを測る。平面円形を呈し、断面丸底状となり、壁は緩やかに立ち上がる。拳ほどの礫と土器片が中央にかたまって検出された。

土器(第39図)

1~3, 5, 6, 8は同一個体であろう。小突起をもつ深鉢形土器となろう。胎土に砂粒を多く含んで器面がザラつく。黒褐色を呈し、明らかに在地の土器と異なる色調である。内面が盛り上がるほど深くかつ太く沈線が引かれ、筋の細かい単節LR縄文が充填される。口縁部に窓枠状の区画を施すなど称名寺式土器の古段階に位置付けられるものである。

第26号土坑(第26, 39図)

B-6グリッドに位置し、長径56cm、短径52cm、掘り込みは72cmを測る。平面円形を呈し、断面円筒形となる。遺物の出土は非常に少なく土坑上部から土器片2点のみであった。1は単節LR縄文が斜位に、2は縦位に施されている。

第27号土坑(第26, 39図)

B-6グリッドに位置し、長径80cm、短径63cm、掘り込みは58cmを測る。平面梢円形を呈し、断面すり鉢状となる。礫と土器が散在的に検出された。出土土器は非常に少なく土坑上部から破片が2点のみであった。

第28号土坑(第26、39図)

A, B-6グリッドに位置し、40号土坑と南側で重複する。規模は長径62cm、短径58cm、掘り込みは38cmを測る。平面円形を呈し、断面鍋底状となり、坑底はほぼ平坦である。礫と土器が土坑北側に集中して検出された。あるいは40号土坑と重複するために振り返された結果かも知れない。出土土器は非常に少なく、1は「8」の字状の貼付文を中心に弧線状の沈線により文様が描かれる。2は単節LR繩文が縦位に施文されている。堀之内式期に属するものである。

第29号土坑(第26図)

B-6グリッドに位置し、32号土坑と西側で重複する。規模は長径77cm、短径57cm、掘り込みは65cmを測る。平面不整梢円形を呈し、坑底は中心が深くなり、壁は垂直に立ち上がる。土坑断面はU字状となる。小礫から幼児頭大まで無数の礫が土坑上部から中位までつまっていた。出土した土器は礫に比べ少なく10点程度であった。

土器(第40図)

1, 4, 5は称名寺I式段階のものである。1は口縁部に帶繩文がみえる。2, 3は堀之内式土器の頸部がくびれる深鉢形土器であろう。いずれもくびれ部の破片で、2は「8」の字状貼付文がつき、その下に沈線によって渦巻文を施すものであろう。3はくびれ部に隆帯が貼付されその上に単節LR繩文が転がる。

第30号土坑(第27図)

A-5, 6グリッドに位置し、一部調査区外に広がる。31号土坑と東側で重複している。規模は南北124cm、東西72cm、掘り込みは深いところで61cmである。平面梢円形を呈し、坑底は一部が深くなる以外はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がり、断面鍋底状となる。小礫から幼児頭大まで無数の礫が土坑上部につまっていた。出土した土器は礫に混じり10数点出土した。

土器(第40図)

1, 2は微隆起帯の上に刺突が施されている。1は波状の口縁となり、2は微隆起帯下に繩文が見える。3は無文の深鉢形土器の口縁部、4は口縁部には横位に、その下には縦位に単節LR繩文が施される。5は口縁部の形態から堀之内式期のものであろう。7は堀之内式期の頸部がくびれる深鉢形土器となり、頸部に沈線が引かれる。10, 11は小形土器である。出土土器に大きく時間差があり土坑の時期を決定できない。他に磨石(74図60)が出土する。

第31号土坑(第27図)

A, B-5, 6グリッドに位置し、30号土坑と重複する。長径121cm、短径86cm、掘り込みは63cmを測る。平面梢円形を呈し、土坑底は円筒形に深くなり一段テラスがつく。壁は西側で

垂直に立ち上がり、東側では緩やかな立ち上がりとなる。多数の小礫が積み重なるように検出され、特に円筒形に深くなる部分に集中している。礫は土坑上部にのみ見られた。土器の出土はなく、磨製石斧(74図61)が出土したのみある。

第32号土坑(第26図)

A, B-6グリッドに位置する。長径69cm、短径55cm、掘り込みは47cmを測る。平面円形となり、断面鍋底状、坑底はほぼ平坦である。東側で29号土坑と重複する。人頭大の石から小礫まで土坑上部に詰まっていた。遺物は土坑中からわずかに出土しただけである。

土器(第40図)

小片であるが、いずれも口縁部から頸部屈曲部までを基本的に無文とし、屈曲部以下に文様が施される深鉢形土器の屈曲部以下である。1は「8」の字状の貼付文がつき、弧線状の沈線が引かれる。2は屈曲部を巡る沈線が見える。どちらも堀之内1式であろう。

第33号土坑(第27図)

B-7グリッドに位置する。長径60cm、短径52cm、掘り込みは36cmを測る。平面円形を呈し、壁は北側で垂直に立ち上がる以外は緩やかな立ち上がりとなり、土坑底には1段テラスがある。遺物の出土はなかった。

第34号土坑(第27図)

A-7グリッドに位置する。長径79cm、短径71cm、掘り込みは93cmを測る。平面円形をなし、土坑底は1段円筒形に深くなる部分がある。遺物は打製石斧(73図47)が出土するが確認面からの出土であり確実に本土坑に伴うか不安なものである。他に遺物の出土はなかった。

第35号土坑(第27図)

B-7グリッドに位置する。長径45cm、短径43cm、掘り込みは33cmを測る。平面円形をなし、断面すり鉢状となる。土坑中央に礫が検出された。遺物の出土は土器1点あるが、磨滅のため図化できなかった。

第36号土坑(第27, 40図)

B-8グリッドに位置し、長径101cm、短径71cm、掘り込みは53cmを測る。平面椭円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がり、東側がすり鉢状に深くなり、西側にテラスがある。遺物の出土は少なく土坑上部からわずかに検出された。図化できたのは1点だけであった。底部約1/3からの復元実測であり、推定底径9cmとなる。2本の平行する沈線が曲線的に施されている。赤褐色を呈し、砂粒が多く混じる土器である。

第37号土坑(第27, 41図)

B, C-7グリッドに位置する。長径54cm、短径48cm、掘り込みは37cmを測る。平面円形を呈し、壁は南側が垂直になる以外、緩やかに立ち上がり、断面鍋底状となる。幼児頭大ほどの礫が土坑内に詰まっていた。出土土器は図化したものだけで、胴上部から頸部にかけての破片である。頸部には2本の隆帯が横走し、眼鏡状の把手がつく。胴部には隆帯による曲線的な区画が施され区画内外に縦沈線が引かれている。縄文中期末葉曾利期に位置付けられよう。

第38号土坑(第28図)

A, B-6, 7グリッドに位置し、長径67cm、短径60cm、掘り込みは24cmを測る。平面円形を呈し、断面鍋底状となる。人頭大ほどの礫がかたまって検出された以外遺物の出土はなかった。

第39号土坑(第28図)

A-6グリッドに位置し、一部調査区外へと広がる。東西方向31cm、南北方向41cm、掘り込みは31cmを測る。平面円形を呈すると思われ、断面は鍋底状となる。掌ほどから幼児頭大ほどの礫が土坑内から検出されたが、比較的小さな礫が底近くに多くあり、幼児頭大の礫がちょうど蓋をするかのように土坑上部から検出された。土坑内に入れられていた礫に磨石(75図68)と石棒(81図120)があった。石棒はC-5グリッド出土の破片と接合した。

土器(第41図)

出土土器は数点あったが、全て小片であった。1の小形土器は体部に1ヶ所孔があけられている。外面底部、内面に指頭痕が残る。赤褐色をした非常に緻密な胎土である。口径5.4cm、高さ2.1cmである。2は口縁部に沈線が引かれ、その下に円形の刺突が施される。口縁部の形態から壺之内式段階のものであろう。3, 4には縦位に沈線が引かれ、5は隆帯上に刻みが施される。出土土器には混入があり、土坑の時期を決定できない。

第40号土坑(第26図)

A, B-6グリッドに位置する。長径111cm、短径48cm、掘り込みは32cmを測る。28号土坑と北側で重複する。平面不整橢円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がり、断面鍋底状となる。礫が土坑西側に底から若干浮いて検出されたが、意図的な配列などは特に認められなかった。あるいは土坑東側で更に別の土坑と重複しているのかも知れない。凹石(77図80)が1点出土する以外、他の遺物は出土しなかった。

第41号土坑(第28, 41図)

B-7グリッドに位置し、長径23cm、短径23cm、掘り込みは10cmしか確認できなかった。土坑は黒色土の包含層中から掘り込まれていたものと思われるが、見分けがつかず掘り下げて

しまった。遺物取り上げ後にわずかに掘り込みが確認されたために土坑と認定したものである。出土土器は口縁部が欠損する以外底部からほぼ推定復元できる。頸部には工字状文が2段見られる。その下にX字状の把手が四单位つけられる。X字状の把手のまわりには弧状の隆帯がつき、更に把手から隆帯が垂化する。胴部には条線が充填されている。曾利I式に比定できる。頸部の工字状文は八ヶ岳山麓地域に独特の文様要素であり、すでに甲府盆地とは異なった地域性であることが指摘されている(櫛原1993)。

第42号土坑(第28図)

A-6グリッドに位置し、長径62cm、短径62cm、掘り込みは80cmを測る。平面正円形を呈し、断面円筒形となる。壁は比較的緩やかに立ち上がり、坑底は北側がやや低くなる。礫が1点底部近くで検出された。

土器(第41図)

5点のみの出土であった。2は内側の粘土が盛り上がるほど深くかつ太く沈線が引かれている。4,5は縄文の施文がみえる。どちらも単節LRである。5点全て称名寺式土器であろう。

第44号土坑(第28, 41図)

A-4グリッドに位置し、一部調査区外に広がる。南北方向57cm、東西方向45cm、掘り込みは42cmを測る。平面円形を呈するであろうか。断面鍋底状となり、壁は緩やかに立ち上がり、坑底はほぼ平坦である。土坑確認面北側に大きな礫があった。遺物の出土は土坑上から1点のみであった。沈線によって帶状部をつくり縄文を充填するものである。

第45号土坑(第28, 41図)

第3区B-1グリッドに位置し、長径104cm、短径90cm、掘り込みは41cmを測る。平面梢円形を呈し、断面鍋底状となり、壁は緩やかに立ち上がる。礫が底部から浮いて検出された。土器は2点のみ出土した。いずれも小片で縄文が施されるものである。

2. 配石土坑と出土遺物

第1号配石土坑(第29図)

A, B-5グリッドに位置し、土坑の規模は長径131cm、短径100cm、掘り込みは47cmを測る。平面不整形を呈し、断面鍋底状となる。ちょうど土坑を覆うように石が配列する。配列する石はほぼ同じ大きさで、周辺や間にあるものが若干小さい程度である。土坑覆土には焼土・炭化物が混じっていた。土坑内から僅かに土器が散在的に出土した。

土器(第42図)

1は口縁部が内折し、文様が渦巻文構成をとる称名寺式土器であろう。2,4は加曾利E IV式であり、2は無節L、4は平行に垂下する沈線間に磨消縄文が施される。縄文は単節LRであ

る。5は斜行沈線が引かれている。堀之内式土器であろう。6は節の細かい縄文が施されている。

第2号配石土坑(第29図)

B-5グリッドに位置し、土坑の規模は長径117cm、短径82cm、掘り込みは46cmを測る。平面橢円形を呈し、断面鍋底状となる。礫の配置は中央部分に集中していた。土器は配石の周辺で何点かあったが、確実に伴うものか不安なため図化しなかった。土坑内からの遺物はなかった。

第3号配石土坑(第30図)

B-5グリッドに位置し、土坑の規模は長径151cm、短径82cm、掘り込みは31cmを測る。平面不整形を呈し、坑底はほぼ平坦となり、断面鍋底状となる。人頭大の礫が土坑上部に配置される。小ビットが付属するが、本遺構に伴うか明らかではない。出土遺物は土器片のみで、しかも細片のため図化できなかった。

第4号配石土坑(第30図)

C-5グリッドに位置し、土坑の規模は長径119cm、短径70cm、掘り込みは42cmを測る。平面橢円形を呈し、坑底はほぼ平坦であり、断面鍋底状となる。配置される礫は人頭大程度のものが主体となり、その周辺に比較的小さい石がある。土器は何点か出土したが、磨滅のため図化できなかった。

第5号配石土坑(第30図)

A, B-7グリッドに位置し、土坑の規模は長径192cm、短径90cm、掘り込みは50cmを測る。平面は長楕円形を呈し、断面鍋底状となる。坑底は西側へ緩やかに立ち上がっていく。配置される礫は土坑の形態にあわせて人頭大程度のものが2列配列されている。遺物は検出されなかった。

第6号配石土坑(第31図)

A, B-7グリッドに位置し、一部調査区外へ広がるが土坑の規模は長径206cm、短径110cm、掘り込みは100cmを測る。平面は橢円形を呈し、断面鍋底状となる。坑底は東側が1段下がっている。配置される礫は人頭大程度のものが配列されている。遺物は検出されなかった。

第7号配石土坑(第31, 42図)

A, B-6グリッドに位置し、土坑の規模は長径140cm、短径85cm、掘り込みは53cmを測る。平面不整形を呈し、テラスが何段がある。配置される礫は人頭大程度のものを中心にして、その周囲に小礫が配されている。出土遺物は土器2点であるが、確実に伴うものか不安なもので

ある。1は約1/2残存する小形土器である。口縁部と底部及び内面に指頭痕が残る。2は微隆起帯が斜めに施されその下に無節L縄文がみえる。加曾利E IV式であろう。

3. 配石遺構と出土遺物（第32図）

第3区B,C-1,2グリッドに広がる。直径4.5mほどの環状となるであろうか。東側が配石の残りが良く、西側は散在的だった。ほとんどの礫が浮いた状態となるが、本来黒褐色土中に配置されていたものであろう。黄褐色土まで掘り下げを行ったが、配石下に土坑などは検出されなかった。配石の間やその下から打製石斧(73図46)、磨石(74図59、75図69,70、76図75,77,79)、凹石(77図83,84)など石器が9点出土した。

4. 遺構外出土遺物

(1) 土 器

今回の調査では縄文時代前期後半から後期前葉までの土器が出土している。その内の大部分を占めているのが後期の土器である。しかも遺構に伴うものは僅かで、ほとんどが遺構を確認するまでに掘り下げた包含層中からの出土である。文様が判別できるものについては極力図化に努めた。

第I群 諸縞式土器(第43図1~9)

いずれも諸縞a式に位置付けられるものである。半截竹管状工具により押引連続刺突文、肋骨文が施され、器形は口縁部が開く朝顔形となるものであろう。6は押引連続刺突文の下に縄文が施される。胴以下の部分であろう。5,7は押引連続刺突文によって縦区画をなし、その区内に肋骨文が施されている。2,5以外、他は赤褐色を呈し、金色雲母・白色砂粒を含む胎土である。おそらく同一個体であろう。

第II群 前期末葉土器(第43図10~13)

1種 鍋屋町式の影響を受けているもの。(10,11)

どちらも口縁部に隆帯を貼付し、隆帯上に結節状沈線文を施す。11には三角印刻文も加わり文様を構成している。

2種 十三菩提式に比定できるもの。(12,13)

同一個体である。大きく張り出した口縁部が内湾し、口縁端部は外反する。おそらく四単位の波状口縁となるであろう。口唇部に細い粘土紐を貼り付け、更にその下にも直径5mm程度の円環を3段貼り付けている。13は単節の斜縄文を地文として、結節浮線文により渦巻文様が施される。12は結節浮線文の下にソーメン状の粘土紐が斜めに貼付されている。

第III群 五領ヶ台式土器(第43図14~17)

14は斜行沈線が引かれ、口縁部に満巻状突起がつく。15は2段にわたって斜行沈線が施され、16は山形、斜行の沈線が施される。16の口縁部片には羽状の沈線文がみえる。全て五領ヶ台式に比定できる。

第IV群 曽利式土器(第43図18~20、44図1~16)

1種 曽利I式に比定できるもの。(43図18~20、44図1~5,9)

いずれも半截竹管状工具により縦位に沈線が描かれ、隆帶が垂下する。区画をなすもの、曲線的となるものがあり、隆帶上には刻みが施されるものもある。

2種 曽利II式に比定できるもの。(44図6~8,10~14)

地文に縄文をもち、蛇行の粘土紐が貼り付けられるものと、刺突文が施されるものがある。蛇行の粘土紐が貼り付けられるものは同一個体であろう。

3種 曽利V式に比定できるもの。(44図15,16)

どちらも「ハ」の字文が施される。15の方が深く、短く描かれている。

第V群 加曾利E式土器(第44図17~46図17)

いずれも加曾利E IV式に位置付けられると思われるが、称名寺式期にも加曾利E IV式の系譜をひく土器が共存するため、ここでは加曾利E 系土器程度の意味で分類した。尚、器形は大部分が口縁部片から観察する限り、頸部がくびれ、口縁部から底部までほぼ直線的に到るものであろう。

1種 沈線又は微隆帶によって口縁部に水平の区画を持ち、胴部に並行する沈線又は微隆帶が垂下し、垂下文には一帯ごとに縄文が充填されると思われるもの。(45図1~3,6,8~12、46図1,3,4)

45図1は胴部に垂下文がなく、口縁部を沈線で水平に区画し、区画線下全面には無節L縄文が縦位に施文されている。45図2,3,6,46図3が沈線による区画線を持つ以外、他は全て微隆帶による区画線である。45図12は口縁部を隆帶で区画し、その下には条線が施されている。称名寺式期まで下るものであろう。46図1は微隆帶区画後に縄文が施文されている。

2種 沈線又は微隆帶によって、U字あるいはO字状などの曲線的な区画が施されるもの。

(44図17、45図4,5,7,13、46図2,5,6,16)

44図17は文様描出を全て沈線により行い、口縁部を水平に区画し、その下に楕円区画、更に楕円区画の連節部に波頭が対応するように逆U字文が描かれている。口縁部区画と逆U字文には無節L縄文が施文される。褐色を呈し、砂粒を多く含む胎土である。45図4,5は口縁部まで曲線的な区画がせり上がっている。4は単節L.R.、5は単節R.L縄文が施文されている。46図2,5は微隆帶で区画後、縄文が充填されている。46図16は縄文帯が口縁部までせり上がっている。おそらくせり上がった部分は小波状の口縁となり、その下に対応

するようにU字あるいはO字状の曲線的な区画が施されるものであろう。

3種 微隆帯に付随して刺突文を施すもの。(46図7~14)

いわゆる「関沢類型」と呼ばれるものも含めておいた。7, 8, 11などは隆帯に付随して比較的小さな刺突が施され、他は大きく明瞭である。46図15は刺突は施されていないが、口縁部にC字文が対向するような突起がつき、隆帯による区画内には無節LR縄文が施文されている。

第VI群 称名寺式土器(第46図17~54図1)

本遺跡から出土した縄文土器で後述する壺之内式土器と共に主体をなすものであるが、大半は破片の状態で実測可能なものはごく僅かであった。特に口縁部文様と胴部文様の相互の関連については不明とせざるを得なかった。そのため充填文様によって概略的に分けたにすぎない。

1種 沈線により描出される帯状部が縄文によって充填されるもの。(46図17~51図11)

図では口縁部(46図17~48)と胴部(49図~51図11)に便宜的に分けた。口縁部で枠状の区画をもつもの(46図17, 20, 24)、西日本方面との関係の強い土器で角頭状の口唇部となり、そこに縄文が施されるもの(46図21)などは比較的古い段階のものであろう。口縁部が小波状となり渦巻文が施されるもの(46図26, 27)。主文様間に別の文様意匠を挿入し、縄文部と無文部を等しくする空白部処理が行われているもの(47図4~8)などは中段階に位置付けられるであろう。47図1は上方を向く注口状に貫通した円筒状突起を持ち、比較的太い沈線によって円形、逆三角形状に区画する。区画内あるいは主文様間には更に別の文様意匠が描かれ空白部処理が行われる。黒色処理がなされているのか内外面とも黒褐色を呈し、僅かに内面口唇部のみ赤褐色となり、胎土に砂粒を多く含んでいる。この円筒状突起は加曾利E式からの系譜でなく西日本方面からの影響が指摘され、称名寺式でも古い段階に位置付けられている(鈴木1991)。同図2は口縁端部は内側に折り返され、口縁部は波状となり波頂部に円形の貼付文がつく。文様は沈線による区画内に単節LR縄文が充填され、波頂部と連動するかのように文様帶が迫り上がっている。称名寺式の中段階から見られる縦位を基調とした帯状等分割構成が窺える。48図1も口縁部小突起がつき、文様構成に帯状等分割が窺え、空白部へ突出する鉤状の付随的な文様の付加が認められる。中段階のものであろう。同図2~8まで帯縄文がみえる。9, 10は波状を呈する口縁部に対応するように縄文帯が施され、9には波頂下に小さなJ字文が施される。古段階に比定できるものだろうか。11~17は中段階でも終末に位置付けられるであろう。胴部片(49図~51図2)にはJ字文、渦巻文あるいは空白部処理のための付隨的な文様などが見られる。51図3, 4, 6~9からはJ字文などの縦位2段構成が窺える。5はJ字文間に見られる筋縫文であろう。10, 11は刻みが施された隆帯が垂下している。垂下隆帯類型と呼ばれているもので(石井1992)、2段J字文構成が一般的であるらしい。

2種 充填文様が列点によるもの。(51図12～53図11)

充填文様が施されないものと共に新段落に位置付けられる。53図8～11には縄文の充填と共に列点がみられ、8,10は沈線に沿うように、9,11は縄文が充填された区画内に列点が施されている。

3種 充填文様が施されないもの。(53図12～54図1)

いずれも小片ばかりである。54図1のみ口縁部から胴下半まで約1/3程度残存し器形、文様が知れる。器形は口縁部から底部までほぼ直線的に到るものと思われる。口径28.2cm、現高24.4cmを計り、黄褐色を呈し、砂粒を多く含んだ胎土である。磨滅のため器面がザラつき文様が不明瞭であった。口縁下に1本沈線が引かれ、そこから垂下文様が施されている。口縁部に幅広い無文帯が形成されている。口縁部無文帯、3本垂下する細沈線からは一見すると堀之内式期における「H」字状文が形骸化したものかと思えるが、口縁部の内折が見られず、また口縁部文様帯の欠如などからも堀之内式まで下らない資料であろう。

第VII群 堀之内式土器(第54図2～59図9、60図～63図18、67図5～15)

大部分が堀之内1式だと思われ、2式だと確認できたものは僅かであった。1式、2式の大別、更に1式、2式での細分は行わず、ここでは文様構成から大まかに分類したにすぎない。

1種 地縄文をもち縦位の沈線が施されるもの。(54図2～4)

口縁部の形態、文様構成など次にあげる2種と岐別し難いが、地縄文を施していることから区別して扱った。東関東を中心に分布し、地縄文を施し沈線によって蕨手文などの単位文が描かれるものであろう。尚、図化したものは出土地点、砂粒をわずかに含む緻密な胎土、節の細かい縄文が施されるなど共通項が多く、おそらく同一個体と思われる。

2種 複数沈線による懸垂文と、それを斜位に連絡する斜行文が施されるもの。(54図5～55図4)

西関東の堀之内1式土器群の中で主体をなすと考えられているものである。本遺跡からは破片ばかりが確認された。54図6,9などはあるいは6種として分類したものの中縁部かも知れない。

3種 2種の懸垂文に代わって蛇行文が施されたもの。(55図5～9)

僅かに5点が確認された。5は懸垂文と蛇行文が交互に施されるものであろうか。

4種 東関東に分布の中心があるものを取り上げた。(55図10,11)

2点のみの確認であった。本来両者は区別されるべきものであるが、ここでは出土点数も少なく各々1点であるため便宜的に4a、4bとして扱う。

4a 朝顔形の深鉢となり、口縁部頂部から隆帯・懸垂文が垂下し、更には文様下端区画をも有し、区画内には集合沈線などが充填される類型であると思われる。10は口縁部が波状をなし、波頂部から満巻状の隆帯が2個連続するように垂下している。隆帯の起点(終点)には刺突がある。口縁・隆帯の両脇に沿って沈線が施され、更に器面にも蛇行、クランク状に沈線が施され区画をなす。区画内・隆帯上に縄文が施されている。黄褐色を呈

し、砂粒を含んだ胎土である。

4 b 地縄文を有し、沈線によって蕨手文などの単位文が描かれる類型に含められる。1種としたものも本来はここに含められるだろう。11は口縁部から胴部まで約1/3程度残存している。おそらく3単位程度の波頂部がありやや内湾しながら底部にいたる器形と思われる。文様は地縄文と言うより間隔を開けて縦位に単節LR縄文が施されたにすぎず、その後、沈線によって逆U字状・Y字状の文様が描かれている。暗褐色をし、砂粒を多量に含んだ胎土である。

5種 条線文が描かれるもの。(56図1~57図18)

大部分が櫛歯状工具により格子目状に施されるが、56図1, 2, 9、57図3, 14などは縦位に施され、また56図3は単沈線によるものかも知れない。口縁部に刺突列があるもの(56図4)、ボタン状の貼付文が付くもの(同図11)。条線文が横位にも施されるもの(57図1)などいくつかバラエティーが指摘できる。これらの中には同一個体と思われるものがいくつかあり、おそらく2, 3個体が破片となったものであろう。

6種 頸部がくびれ、口縁部から頸部までを無文帯とし、頸部以下に主文様が施されるものを一括した。(57図19~58図、60図1~10)

この種類にはバラエティーが多く、また多様な変遷をとげることがすでに指摘されている(石井1993)。そのためここでは縄文が施されるものと施されないものに分けたにすぎない。

6 a 縄文が施されないもの。(57図19~58図14、60図1~7, 10)

頸部屈曲部に隆帯が巡るもの、沈線が巡るもの、8字状貼付文がつくものなどがある。主要文様は渦巻文が描かれるであろうか。58図5は弧線基調の文様構成をとり、同図12は渦巻文とそれを斜位に連絡する斜行文からなる横位に文様構成をとるものであろう。

6 b 縄文が施されるもの。(58図15~20、60図8, 9)

文様構成は基本的に変化ない。頸部に隆帯、沈線が巡り、渦巻文が主文様となるであろう。60図10は渦巻文が施されず、集合沈線が施されるものかも知れない。

7種 磨消縄文が施される朝顔形を呈する深鉢形土器となるもの。(59図1~7)

堀之内2式の中頃に位置付けられるだろうか。

8種 縄文のみが施されるもの。(60図11~61図2)

60図13が単節LR縄文である以外全て無節L縄文が縦位に施されている。60図11は胴中位でくびれ、外反しながら口縁部にいたる深鉢形土器である。口縁部には両側が窪みその間に捻転状となる隆帯が貼付されている。口縁部から無節L縄文が縦位に施文されている。推定口径31.6cm、現高21.5cmを計り、暗褐色を呈し、砂粒を含む胎土である。

9種 無文の粗製深鉢形土器を一括する。(67図5~15)

5は口縁部が外反し、頸部でくびれ、胴部が若干の膨らみをもつ。口縁部から頸部まで横方向、頸部以下が縦方向のナデが施されており、その際の砂粒の移動痕が顕著に観察で

きる。赤褐色を呈し、大粒の砂粒を含む。6は内外面とも良くみがかれており、胎土も緻密である。黄褐色を呈し、口径29.4cmを計る。7は底部からくびれ部まで約半分残り、輪積痕が観察できる。8~15までは条痕文が施される。

10種 口縁部片を一括した。2, 3, 6種の口縁となるものであろう。(61図3~63図18)

刺突(61図3~5, 7, 62図1~3, 5~7, 9~12)刻み(62図4, 8, 13)が施されるもの。凹線、沈線が巡るもの。同心円状の沈線が描かれるもの。隆帶上に刻みが施されているものなどがある。

11種 刺突文を主体に文様表出されるもの。(63図19)

便宜的にここで分類した。三十幅場式の影響を受けているものであろう。刺突は斜め上から半截竹管状工具によってなされている。黒褐色を呈し、砂粒を多く含んだ胎土である。

第VII群 浅鉢形土器を一括した。(64図1~65図2)

称名寺式からみられるもので、便宜的にここに分類したにすぎない。注口がつくのが一般的だが、省略されたものもあり、注口部が確認されない限り注口土器とは分類して扱った。64図1は注口が省略された、堀之内1式でも比較的古い段階のものではないだろうか。64図7~65図1などは称名寺式に位置付けられるであろう。特に65図1は称名寺式の新段階における突起を内面に向くように曲げた、非常に発達した波状となる突起が付けられたものであろう。また64図8なども称名寺式に特徴的なS字状の貼付文が折り曲げられたように付けられている。

第IX群 口縁部突起・把手(65図3~66図8)

加曾利E式から堀之内2式まで突起・把手部分を雑多に一括した。65図3~6, 9は口縁部に刺突が巡るであろう。5は突起上にまで繩文が施され加曾利E式まで巡るであろうか。他は称名寺式期の関沢類型と考えられる。4などC字状の隆帶が対向した突起となり称名寺式に特徴的なものである。65図10~12なども称名寺式にみられるものである。10は称名寺中段階の後半から新段階に特徴的な極端に迫り上がった波状の口縁突起であり、11, 12はS字状の貼付文が内側に折れ曲がったようにつくもので、中段階に位置付けられる。65図7, 13, 14、66図4などは堀之内式に属するものであろう。66図2, 3, 11は注口土器の把手となるものであろう。66図7は堀之内2式に特徴的な突起である。

第X群 注口土器(66図9~67図4)

前述したように浅鉢形を呈するものは除外したが、厳密に言えば注口部分のみしか確認できず器形は不明とせざるを得ない。

第II群 底部片を一括する。 (68図～70図)

グリット出土の底部片は全部で 256個確認できた。その内木葉痕があるものは12個 (4.7%) 網代痕が確認できたものは23個 (9%) であった。他は無文か磨滅が著しく不明なものであった。

(2) 土製品 (第59図8～15)

8は中空土偶の脚部であろう。本遺跡から出土した土偶はこれ1点だけだった。12は土製円盤である。直径3.3cm 程で 7mmの孔が両側からあけられている。他はミニチュア土器である。

(3) 石器 (第71図～81図)

本遺跡から出土した石器は 128点を数えた。図化したものは石核2点を含め130点である。遺構に伴ったものは僅かで、大部分が遺構外出土である。そのため時期を明確にすることができないが、出土した土器は縄文後期に属するものがほとんどであるため石器についても同様に解説しておく。以下、遺構・グリットを問わず一括して述べる。尚、全体組成率は剥片・石核類は除いて定形化した石器のみから算出した。

石鎚 (第71図1～18)

18点を数え、全体組成は15.3%を占める。14～18は未製品と考えられる。基部は6, 7, 11, 12が平基無茎である以外、他は全て凹基無茎である。側面観はいずれもレンズ状となり、側縁部は直線的なものとやや外側に張り出すものがある。欠損部位は先端部を欠損する13以外、全て脚部である。石材は全て黒曜石である。

石錐 (第71図19～24)

6点の出土があり、全体組成は5.1%である。錐としての機能があるものを一括した。全て断面三角形をなす。20, 22は先端部分を欠損する。石材は20が珪質頁岩である以外、他は黒曜石製である。本遺跡から出土した剥片・チップ (全重量678.2g) を全て調べたが、灰色をしたチャートが7点(22.5g) あったのみで残りはすべて黒曜石であった。20は製品として搬入されたものではないだろうか。

石匙 (第71図25、73図42)

2点出土した。全体組成は1.7%である。25は細身の縦長型で黒曜石製、42は横型で、石材は硬質砂岩である。

楔形石器 (第72図26～29)

出土点数は4点を数え、全体組成は3.4%である。全て黒曜石製である。

小剥離のある剥片 (第72図30～39)

定形的な石器にあてはまらず、刃部を作り出したと思われるものを取り上げた。全てを図化できなかったが、32点を確認した。石材は全て黒曜石である。

石核（第72図40、73図41）

2点とも黒曜石である。40は全ての面に剥離痕があり、重量は37.7gである。41は大きく裏面と側面に剥離痕がある。重量は902.6gと大きなものである。

打製石斧（第73図43～49）

出土点数は7点を数え、全体組成は5.9%を占める。三形態分類すれば43～46が短冊形、47、48が楔形となり、49は不明である。欠損部位は刃部が全てであった。尚、47は完形で出土したが取り上げ後に、脆くて割れてしまった。

磨製石斧（第73図50～74図57）

出土数は8点であった。全体組成は6.8%である。全てが定角式であると思われる。欠損部位は刃部がほとんどである。

磨石（第73図58～76図79）

出土数は22点を数え、全体組成は18.6%を占める。形状に3種類あり、A. 円形もしくは梢円形で扁平となり、主な磨面を表裏2面にもつ一般的な磨石と考えられるもの。B. 全面研磨され球状を呈したもの(69)。C. 不定形となるもの(59, 68)があり、大部分がA形態となる。石材は輝石安山岩が14点(63.6%)と半数以上を占め、砂岩が4点(18.2%)を数える。

凹石（第77図80～78図91）

出土数は12点を数え、全体組成は10.2%を占める。磨石として利用された痕跡があるものもある。ほとんどのものが表裏面に窪みを持つ。石材は磨石と同様に輝石安山岩の利用度が高く、9点(75%)と3/4を占め、他は玄武岩2点、砂岩1点である。磨石、凹石ともに輝石安山岩の利用が顕著に認められた。こうした傾向は大泉村姥神遺跡においても指摘されており、磨石、凹石、石棒、石皿、多孔石、丸石、不定形扁平石などに輝石安山岩の利用が多い（櫛原1987）。この輝石安山岩は姥神遺跡が位置する八ヶ岳山麓及び本市中央部にある蓮崎台地にかけて火山放出物、溶岩、岩屑流堆積物として広域にわたり普遍的に分布していることも同時に明らかにされている。姥神遺跡同様、本遺跡でも石材と器種に強い相関関係が認められる。

石錐（第78図92～80図118）

出土点数は27点を数え、全体組成では22.9%と本遺跡出土の器種で最も高い数値となる。製作法から、A. 切り目が入れられたもの(92～104) [48.1%]、B. 打ち欠かれたもの(109～118) [14.8%]、C. 打ち欠き、その後切り目が施されたもの(105～108) [37%]と3種類に分けられそうである。ただ詳細に見ればCとしたものは後のカケ・欠損との区別が付け難く、94は後の欠損と判断できたものだが、105～108については定かではなく、明確に分類できるかやや不安である。96には切り目を上下端に2本入れた形跡があり、110には上下端の他に左右の側面にも切り目を入れている。出土点数中欠損品は7点あり、25.9%を占める。全て切り目を入れたものであり、13点確認された切目石錐の内じつに53.8%が欠損品となる。

完形品20点について長軸を縦軸に、重量を横軸にとったものが表1である。重量では30g、70～80g、120～150gと3ヶ所に分布が集中し、重さ30g程度のものは長軸4.3～7.5cmとや

や幅をもち、70~80gとなるものは長軸5.5~6.6cmと6cm前後に集中している。120~150gに集中するものは長軸6.4~9.5cmやや大きくなる。両端が打ち欠かれたものが100g以上にやや多い傾向となる。

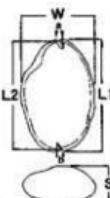
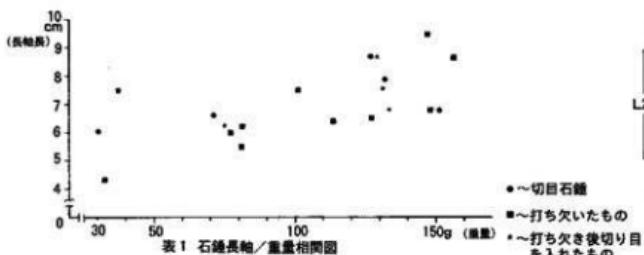


表2 石錐計測法

石材は粘板岩（変質粘板岩を含む）が8点(29.6%)と最も多くを数え、輝石安山岩が6点(22.2%)、砂岩（細質砂岩を含む）が5点(18.5%)、泥岩が3点(11.1%)、ホルンフェルスが2点(7.4%)となり、砂岩変岩、泥質変岩、半角岩が各1点であった。

石棒（第81図119～121）

3点のみの出土であり、全体組成は2.5%を占める。3点ともよく研磨されており、119は断面円形となるが、121は断面横円形となるであろう。石材は119が石英粗面岩、120, 121が輝石安山岩である。

石皿（第81図122～127）

6点の出土があり、全体組成は5.1%である。全て欠損品であり127以外いずれも肉厚のもので、全体を整形、皿部を作り出し、横円形を呈するものである。127はやや異なるもので磨石あるいは凹石を転用したものが中央部分に深い漏斗形の皿部を作り出すものである。石材は全て輝石安山岩である。

台石（第81図128～130）

出土数は3点であり、全体組成は2.5%を占める。石皿と同様な作業が想定できるが、形態が異なるため分類しておいた。129はやや肉厚であるが、基本的に板状の素材を利用し、機能部としての明瞭な皿部は形成されていない。形状は円形を呈する。石材は全て輝石安山岩である。

石器觀察表

番号	出土位置	器種	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	形態	備考
71図1	B-5	石 鋸	1.73	1.32	0.3	0.5	黒曜石	凹基無茎	
# 2	C-3	"	1.73	1.31	0.31	0.6	"	"	
# 3	3区C-2	"	2.43	1.79	0.36	1.1	"	"	
# 4	B-5	"	(1.66)	(1.17)	0.26	(0.4)	"	"	片脚欠損
# 5	B-3	"	1.96	(0.93)	0.44	(0.8)	"	"	"
# 6	B-5	"	1.27	1.34	0.13	0.4	"	平基無茎	
# 7	3区C-1	"	1.88	1.53	0.3	0.9	"	"	
# 8	B-5	"	(1.76)	(1.35)	0.43	(0.9)	"	凹基無茎	脚部欠損
# 9	B-6	"	1.61	(1.39)	0.48	(0.9)	"	"	片脚欠損
# 10	1区1トレ	"	1.54	(1.27)	0.28	(0.4)	"	"	"
# 11	B-4	"	1.85	(1.29)	0.31	(0.6)	"	平基無茎	脚部欠損
# 12	C-5	"	1.66	(1.4)	(0.4)	(0.7)	"	"	"
# 13	C-4	"	(1.92)	1.35	0.3	(0.6)	"	凹基無茎	先端欠損
# 14	B-4	"	1.39	1.47	0.29	0.4	"	"	未製品
# 15	B-3	"	2.7	1.17	0.33	1.0	"		"
# 16	C-5	"	1.46	1.15	0.3	0.5	"		"
# 17	C-4	"	1.78	1.4	0.62	2.0	"		"
# 18	3区表採	"	2.37	1.7	0.62	2.9	"		"
# 19	C-4	石 鋸	3.52	2.21	1.17	4.6	"		
# 20	23号土坑	"	(2.42)	1.77	0.77	(2.6)	"		先端欠損
# 21	B-8	"	2.6	1.46	0.72	1.9	"		
# 22	C-4	"	(4.6)	2.98	0.87	(9.9)	珪質頁岩		先端欠損
# 23	"	"	3.47	1.19	1.6	3.9	黒曜石		
# 24	C-3	"	2.65	2.26	0.77	4.6	"		
# 25	C-4	石 匙	3.58	1.12	0.52	1.8	"	鍼長型	
72図26	B-5	楔形石器	1.96	0.95	0.37	0.7	"		
# 27	C-5	"	2.37	1.71	0.51	2.2	"		
# 28	A-5	"	2.1	1.48	0.5	1.4	"		
# 29	B-4	"	1.45	1.14	0.33	0.6	"		
# 30	B-5	剥 片	3.4	1.84	0.98	3.7	"		
# 31	3区C-2	"	2.28	1.83	0.5	2.4	"		

石器観察表

番号	出土位置	器種	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	形態	備考
72回32	B-3	剥片	2.86	1.49	0.72	3.1	黒曜石		
#33	10号土坑	"	2.18	1.05	0.45	0.8	"		
#34	1区表探	"	2.77	1.04	0.44	1.1	"		
#35	C-4	"	2.89	1.36	0.7	2.6	"		
#36	5号土坑	"	2.34	1.98	1.22	4.8	"		
#37	3区C-2	"	3.75	1.42	0.81	4.7	"		
#38	B-5	"	1.96	1.76	0.69	1.8	"		
#39	C-6	"	2.07	2.06	0.67	2.5	"		
#40	B-6	石核	3.27	5.05	2.3	37.7	"		
73回41	C-4	"	9.08	9.92	7.82	902.6	"		
#42	1区1トレ	石匙	4.74	6.16	1.1	30.5	硬質砂岩	横型	
#43	B-6	打製石斧	(7.95)	4.74	1.27	(75.8)	粘板岩	短冊形	刃部欠損
#44	C-4	"	11.88	5.01	2.24	144.1	粒状片岩	"	
#45	配石遺構	"	(15.0)	(7.0)	(2.3)	(284.3)	砂質粘板岩	"	刃部欠損
#46	C-4	"	10.9	5.5	1.9	160.1	砂質ホルンフェルス	"	
#47	34号土坑	"	18.0	9.5	(2.7)	(438.8)	粘板岩	撥形	
#48	B-4	"	(11.8)	(9.1)	(2.0)	(202.1)	硬質砂岩	"	刃部欠損
#49	C-5	"	(5.5)	(5.3)	(2.0)	(83.5)	粘板岩	"	
#50	B-6	磨製石斧	7.4	4.0	1.3	67.7	ヒスイ	定角式	
74回51	31号土坑	"	(13.6)	5.9	2.8	(420.1)	蛇紋様岩	"	刃部欠損
#52	24号土坑	"	(11.6)	6.0	2.7	(323.2)	蛇紋岩	"	"
#53	3区	"	(9.6)	4.7	2.0	(141.1)	輝綠岩	"	刃部、基部欠損
#54	7配上坑	"	(9.2)	5.4	2.2	(191.7)	蛇紋樣岩	"	刃部欠損
#55	B-7	"	(8.8)	6.0	2.8	(284.5)	硬砂岩	"	基部欠損
#56	C-4	"	(4.5)	3.8	1.7	(58.5)	蛇紋樣岩	"	"
#57	1区表探	"	(3.2)	(3.0)	(1.7)	(20.4)	変質砂岩	"	破片
#58	B-6	磨石	12.7	7.6	4.8	742.1	石英斑岩		磨面2
#59	配石遺構	"	13.4	6.6	4.5	583.2	輝石安山岩		磨面3
#60	30号上坑	"	10.1	8.7	5.5	578.8	角閃石安山岩		磨面1
#61	C-3	"	11.5	7.0	3.7	453.2	輝石安山岩		磨面2
#62	C-7	"	(5.1)	(8.8)	(3.7)	(225.7)	半花崗岩		磨面2、欠損

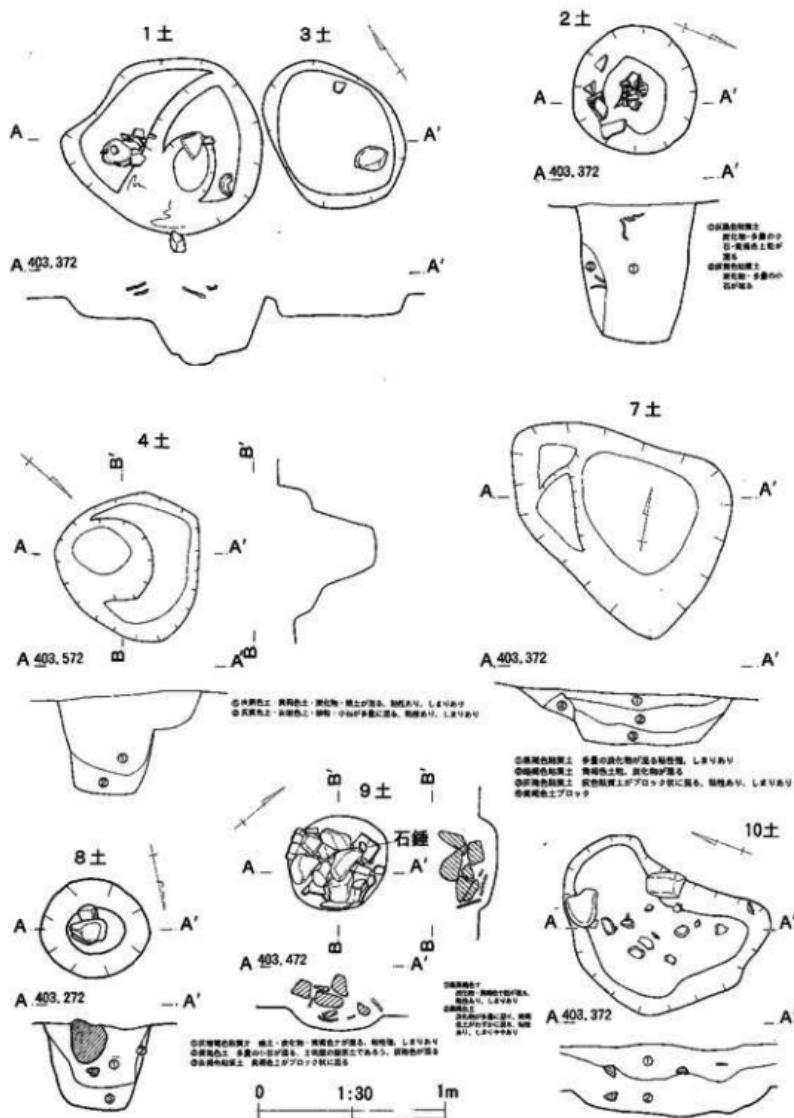
石器觀察表

番号	出土位置	器種	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	形態	備考
75図63	C-3	磨 石	(8.8)	(12.0)	5.5	(746.2)	硬 砂 岩		磨面2、欠損
" 64	A-4	"	7.5	5.4	5.1	265.0	輝石安山岩		磨 面 1
" 65	B-6	"	10.6	5.4	3.2	219.7	"		磨 面 2
" 66	"	"	10.8	6.4	3.8	401.5	"		"
" 67	3区B-1	"	13.6	5.4	3.2	355.5	砂 岩		"
" 68	39号上坑	"	9.2	5.6	5.5	407.0	輝石安山岩		"
" 69	配石遺構	"	7.4	6.5	6.5	437.2	"		
" 70	"	"	9.5	6.8	3.6	350.1	"		磨 面 2
76図71	B-4	"	9.8	6.3	4.5	375.5	"		磨 面 3
" 72	B-7	"	11.4	9.5	5.9	812.0	"		磨 面 2
" 73	"	"	(9.8)	6.4	5.7	(511.5)	砂 岩		磨面2、カケ
" 74	C-4	"	(10.3)	7.3	3.6	(350.0)	輝石安山岩		磨面2、欠損
" 75	配石遺構	"	12.5	7.3	3.8	(488.5)	"		"
" 76	A-4	"	(5.5)	(7.3)	(5.1)	(207.0)	"		"
" 77	配石遺構	"	(6.3)	(6.0)	(2.7)	(130.1)	砂 岩		"
" 78	B-4	"	(3.9)	(6.8)	(3.9)	(127.6)	輝石安山岩		"
" 79	配石遺構	"	(7.0)	6.2	3.8	(183.3)	砂 岩		"
77図80	40号土坑	凹 石	11.6	8.6	5.0	567.4	角 開 石 輝石安山岩		
" 81	4配土坑	"	(6.8)	8.1	3.1	(207.6)	輝石安山岩		欠 损
" 82	5配土坑	"	10.7	8.4	4.3	(518.3)	"		"
" 83	配石遺構	"	10.1	8.7	5.5	567.4	"		
" 84	"	"	12.3	7.4	5.0	570.1	玄 武 岩		
" 85	C-5	"	13.3	7.7	5.7	960.6	輝石安山岩		磨 面 3
78図86	C-4	"	10.9	9.0	5.3	607.8	"		
" 87	"	"	10.9	7.3	3.7	406.5	"		
" 88	3区C-2	"	(7.2)	(8.5)	5.5	(481.5)	"		磨面1、欠損
" 89	1区表探	"	10.9	7.6	4.6	524.7	砂 岩		
" 90	3区表探	"	12.6	6.6	2.7	359.8	輝石安山岩		磨 面 2
" 91	B-6	"	9.5	5.8	5.2	302.7	玄 武 岩		

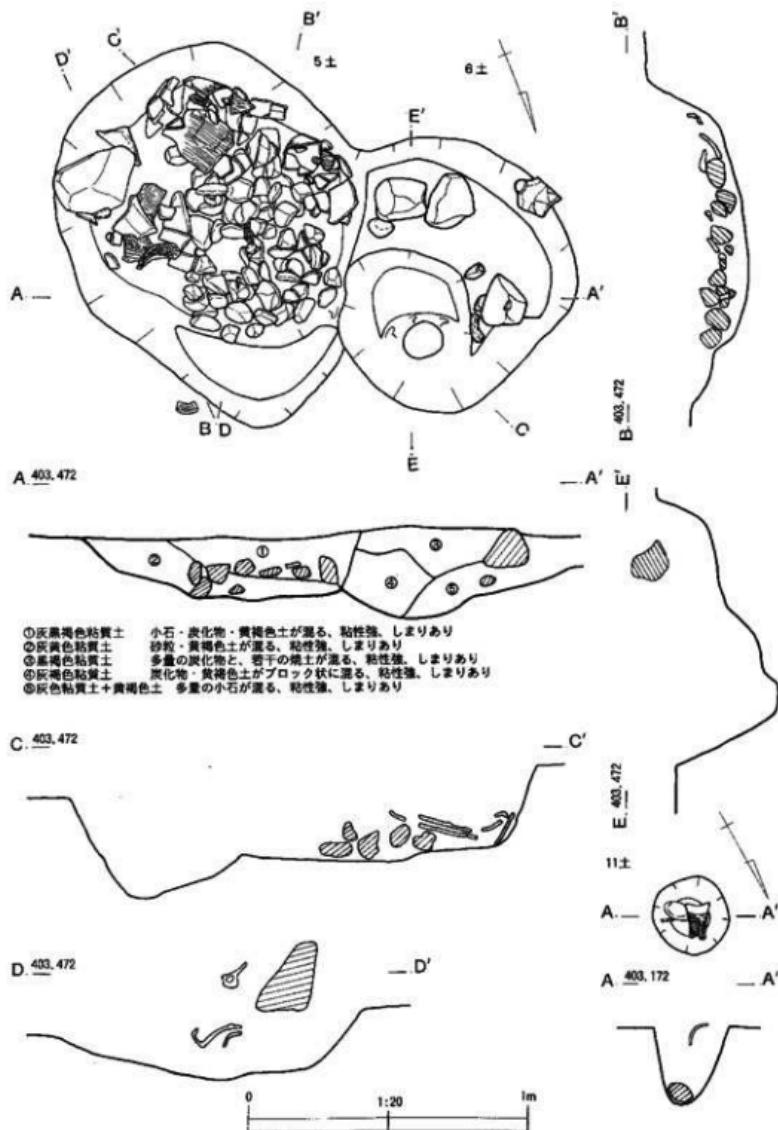
石器觀察表

石錠計測値

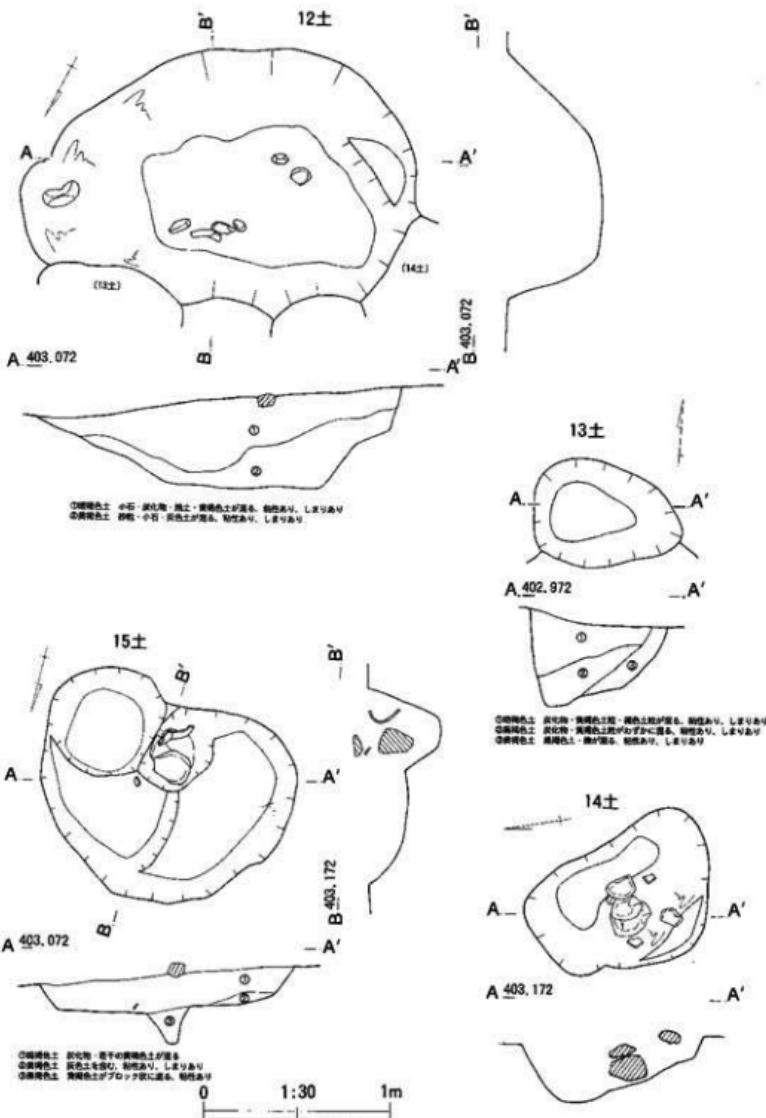
番号	出土位置	a(mm)	b(mm)	w(mm)	L1(mm)	L2(mm)	s(mm)	石材	形態	切り目	備考
78回 92	A - 5	-	2.0	60.0	(69.0)	(69.0)	(20.0)	変質粘板岩	ホルンフェルス	"	欠損
79回 93	6号土坑	2.5	2.5	23.0	58.0	13.0	30.0	ホルンフェルス	岩	"	欠損
# 94	C - 4	4.0	(3.0)	47.0	(60.5)	58.0	21.5	(68.7)	泥	"	欠損
# 95	"	4.0	6.0	47.0	66.0	63.0	16.0	71.3	細質砂岩	岩	"
# 96	C - 6	11.0	7.0	(56.5)	81.0	78.0	20.0	(121.1)	砂岩	岩	欠損
# 97	C - 4	5.0	3.0	55.5	87.5	82.5	22.5	126.8	ホルンフェルス	岩	"
# 98	B - 4	4.5	6.0	52.0	68.0	65.5	30.0	150.4	輝石安山岩	岩	"
# 99	"	5.0	6.0	(38.0)	66.0	64.0	16.0	(52.4)	泥	岩	欠損
# 100	表探	(8.0)	7.0	47.0	(61.0)	58.5	(22.0)	(73.0)	粘板岩	岩	"
# 101	B - 6	(4.0)	3.5	54.0	84.0	83.0	18.0	(126.2)	砂岩	變岩	"
# 102	C - 4	4.0	-	(34.0)	(61.0)	-	(14.0)	(32.4)	泥	岩	"
# 103	B - 3	4.5	4.0	27.0	75.0	73.0	11.0	37.6	泥質變岩	岩	"
# 104	B - 4	5.0	4.0	52.0	79.0	76.5	26.0	132.0	粘板岩	岩	"
# 105	B - 2	4.5	9.5	50.0	62.0	57.5	18.0	75.4	"	打ち欠き後切り目	
80回106	C - 6	7.0	7.0	47.0	87.5	84.0	21.0	129.0	砂岩	岩	"
# 107	C - 5	13.0	6.0	51.0	76.0	73.0	26.5	130.9	"	"	
# 108	B - 8	8.5	7.5	57.5	68.0	65.5	27.0	133.2	輝石安山岩	岩	"
# 109	9号土坑	18.0	7.5	52.5	64.0	61.0	28.0	113.5	s	打ち欠き	
# 110	B - 3	14.0	13.0	60.0	87.0	83.0	18.0	156.8	"	"	
# 111	B - 4	17.0	17.0	51.0	65.0	58.5	26.0	127.2	粘板岩	岩	"
# 112	B - 5	13.0	9.0	48.0	62.5	59.5	22.0	81.8	"	"	
# 113	C - 4	12.0	18.0	57.0	60.0	57.0	17.0	76.8	"	"	
# 114	"	7.0	9.0	43.0	75.5	74.0	21.0	101.7	砂岩	岩	"
# 115	B - 6	16.0	15.0	52.0	95.5	87.0	22.0	147.4	粘板岩	岩	"
# 116	C - 3	10.0	22.0	61.0	69.0	63.0	23.0	148.6	半角岩	岩	"
# 117	C - 5	8.0	11.0	47.5	55.0	51.5	20.0	80.9	輝石安山岩	岩	"
# 118	B - 4	8.5	7.0	37.0	43.0	41.5	18.0	32.1	"	"	



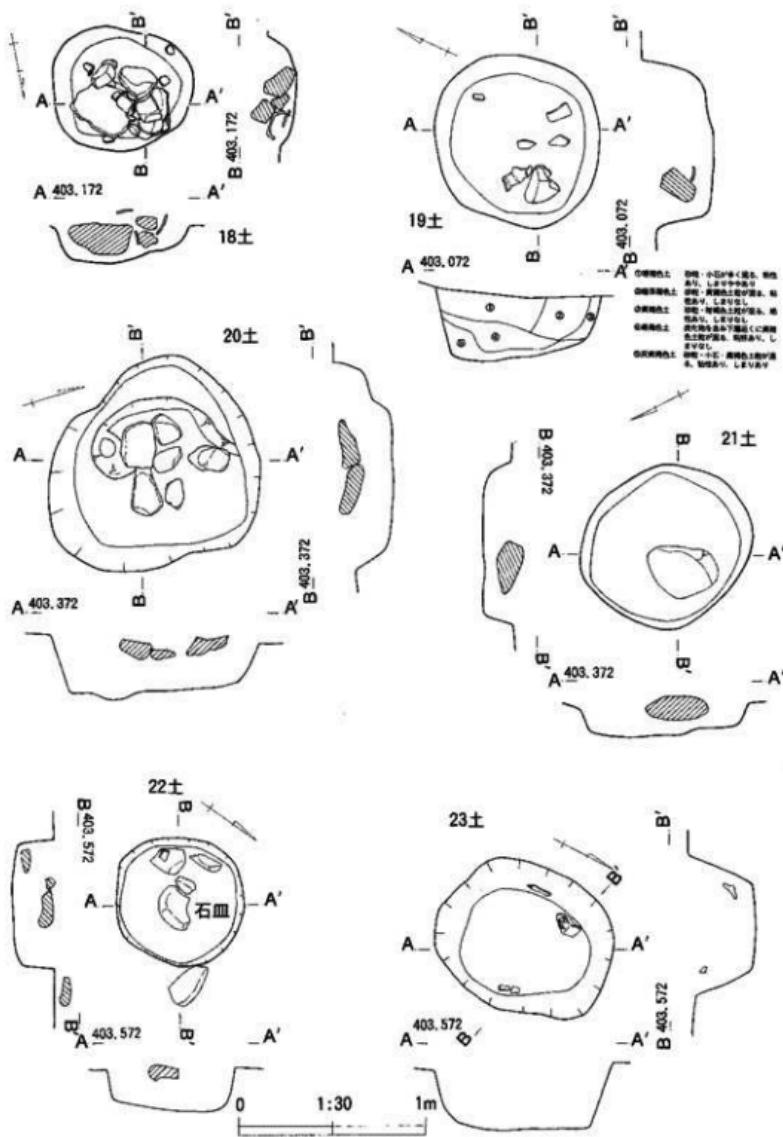
第22図 1~4, 7~10号土坑実測図



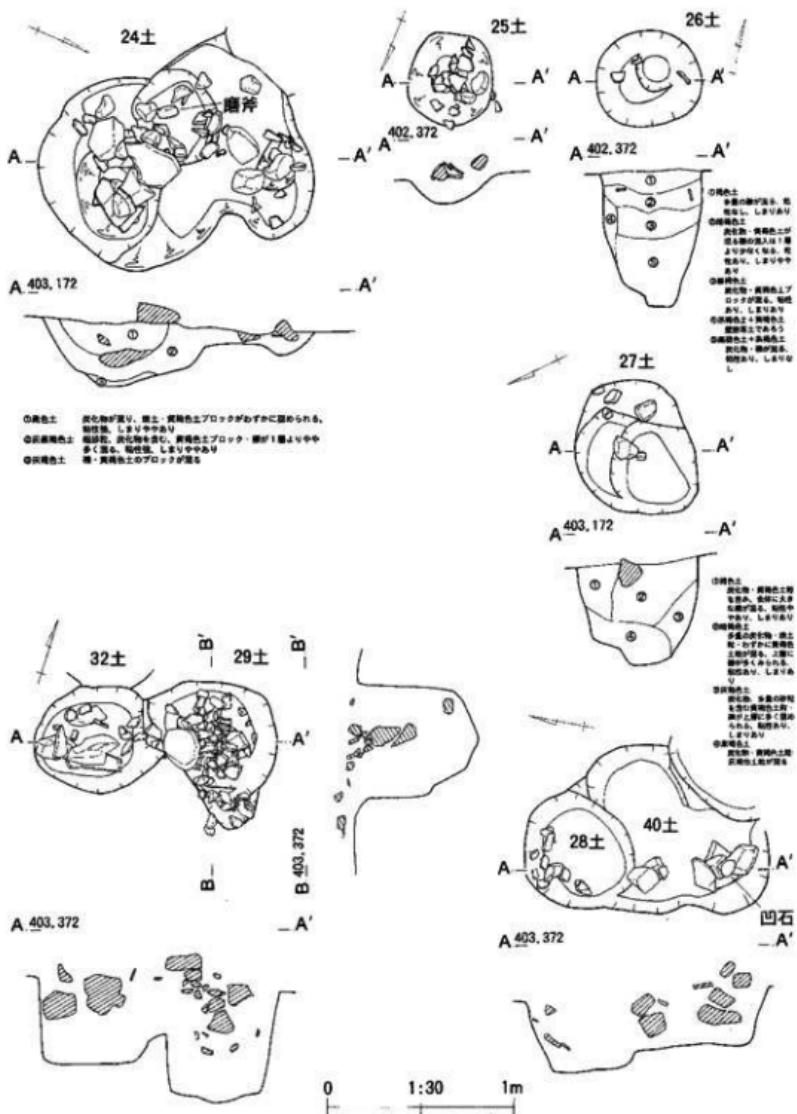
第23図 5, 6, 11号土坑実測図



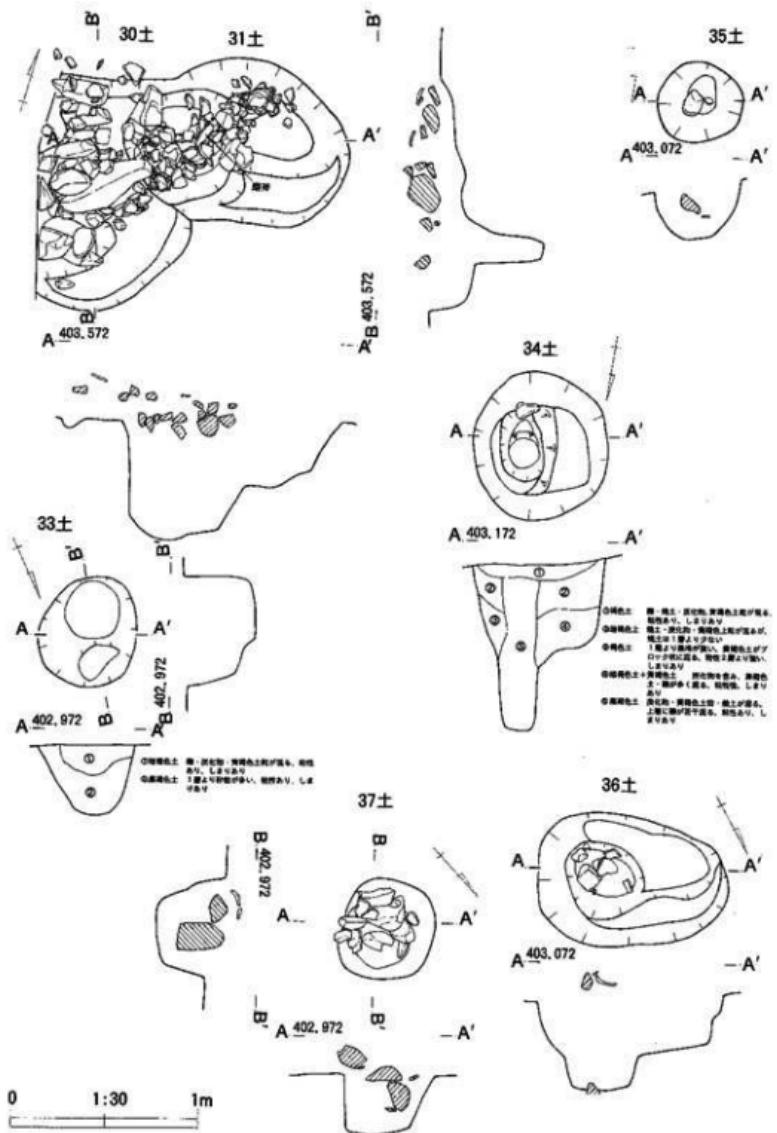
第24図 12~15号土坑実測図



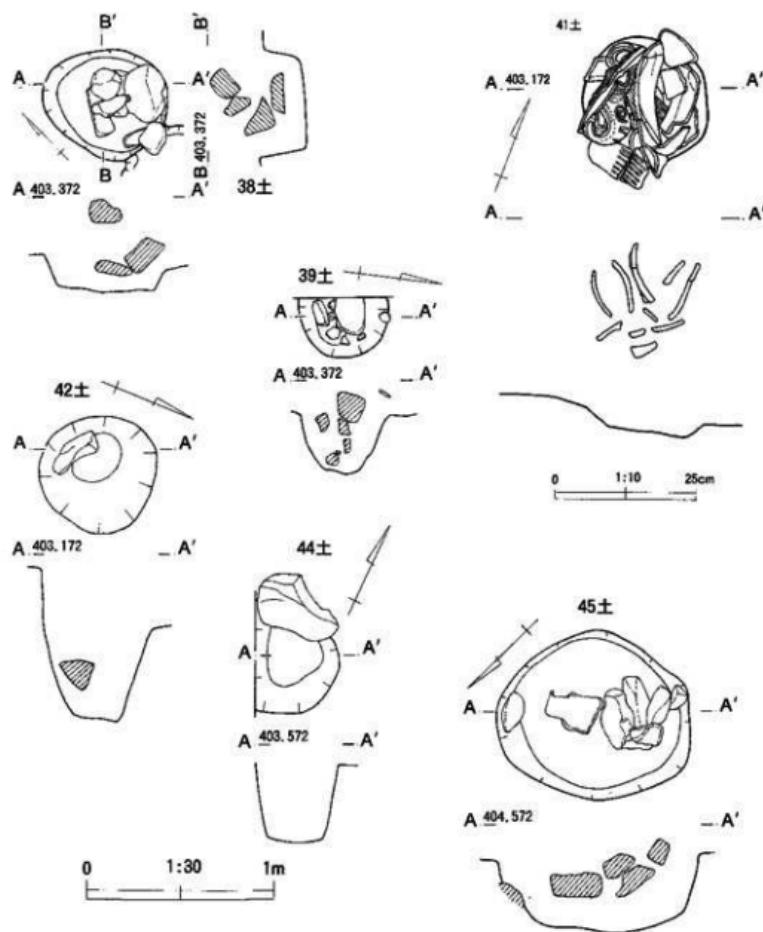
第25図 18~23号土坑実測図



第26図 24~29, 32, 40号土坑実測図

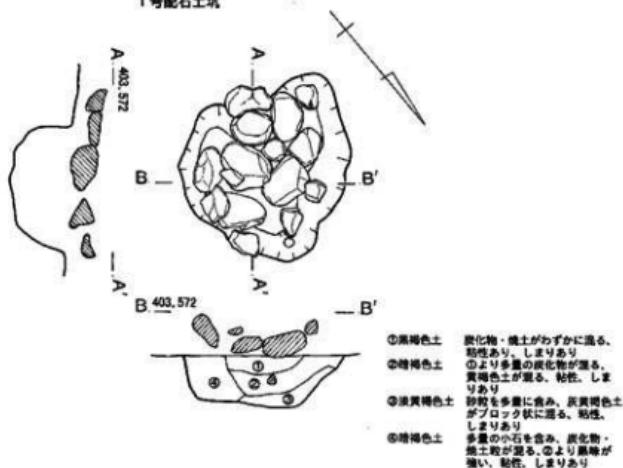


第27図 30,31,33~37号土坑実測図

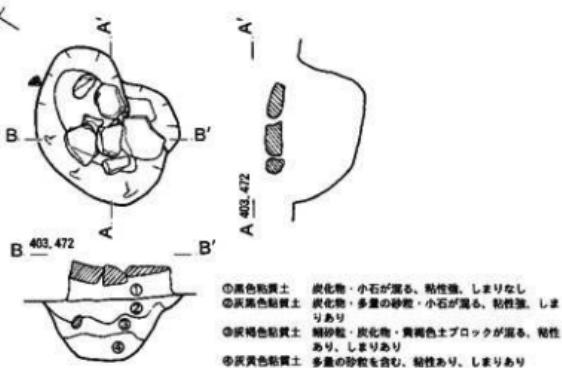


第28図 38, 39, 41, 42, 44, 45号土坑実測図

1号配石土坑

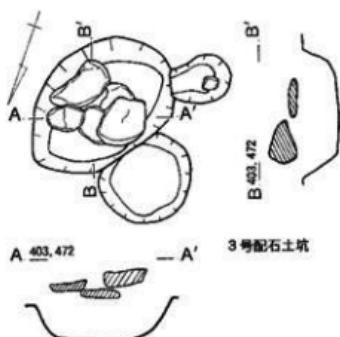


2号配石土坑

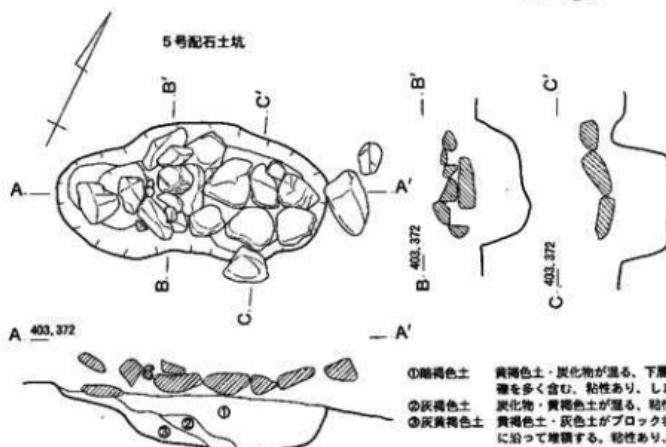
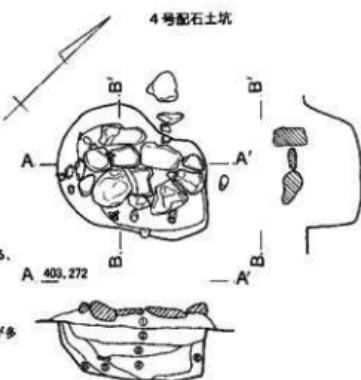


0 1:40 2m

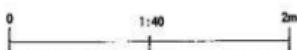
第29図 1,2号配石土坑実測図



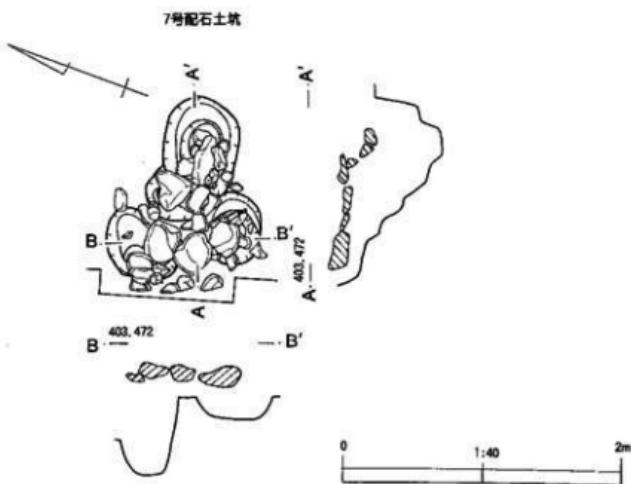
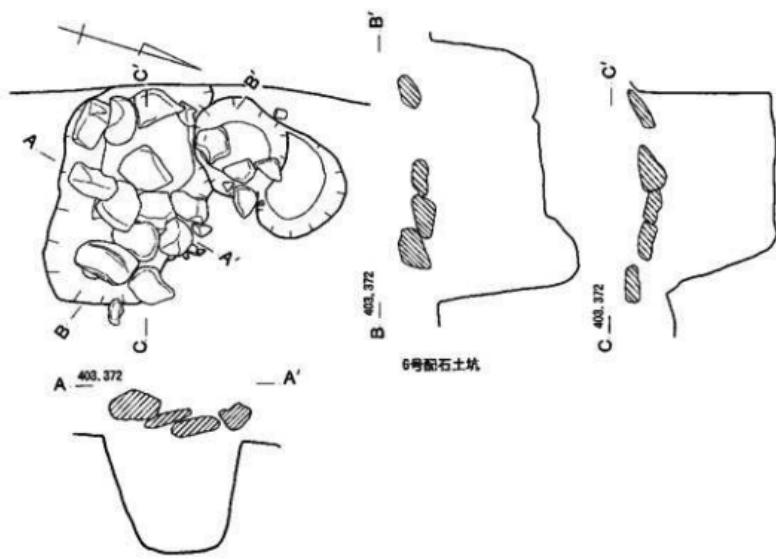
- ① 黒色土 砂粒・炭化物が混る、粘性あり、しまりあり
- ② 暗褐色土 炭化物・礫が混る、粘性あり、しまりあり
- ③ 暗褐色土+黄褐色土 ②と同一の暗褐色をベースに、黄褐色土が混る、炭化物・小石が混る、粘性あり、しまりあり
- ④ 黄褐色土 ②より、やや黒味を帯び、粘土が混る、小石の混入は少
- ⑤ 黒色粘質土 炭化物・粘土が混る、粘性強、しまりなし
- ⑥ 暗黃褐色土 基部近くに炭化物が認められる。上層には、小石の混入が多い、粘性あり、しまりあり



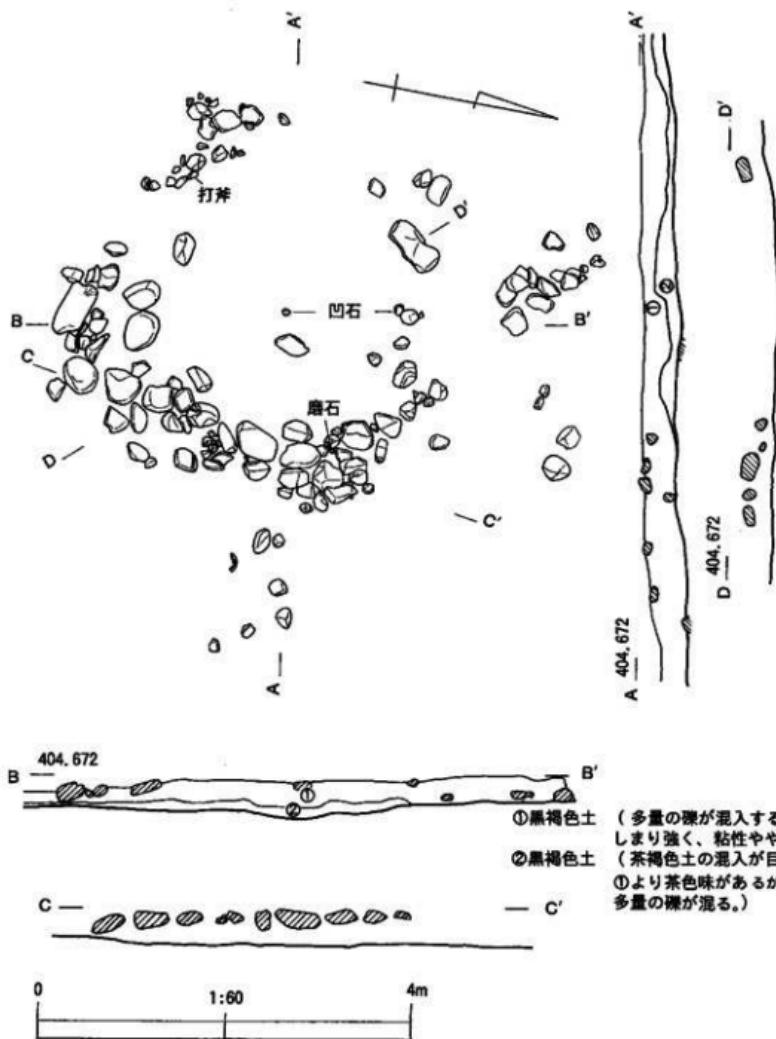
- ① 暗褐色土 黄褐色土・炭化物が混る、下層がやや黒味を帯び、礫を多く含む、粘性あり、しまりあり
- ② 黄褐色土 炭化物・黄褐色土が混る、粘性強、しまりあり
- ③ 暗黄褐色土 黄褐色土・灰色土がブロック状に混る、礫が地山に沿って堆積する。粘性あり、しまりあり



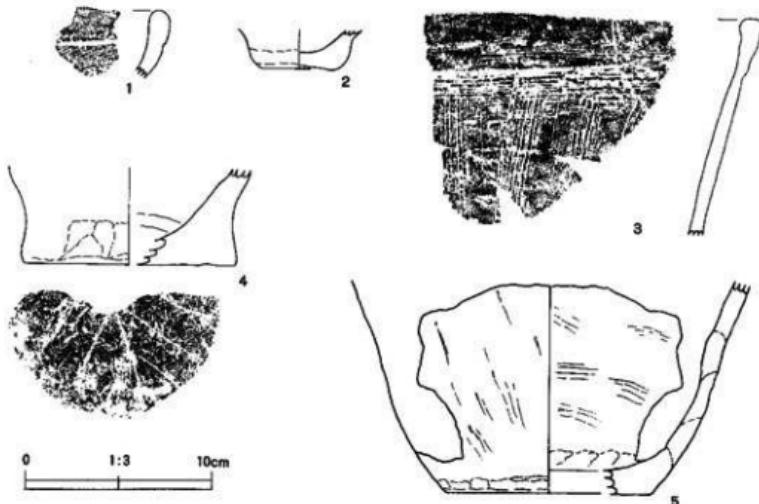
第30図 3, 4, 5号配石土坑実測図



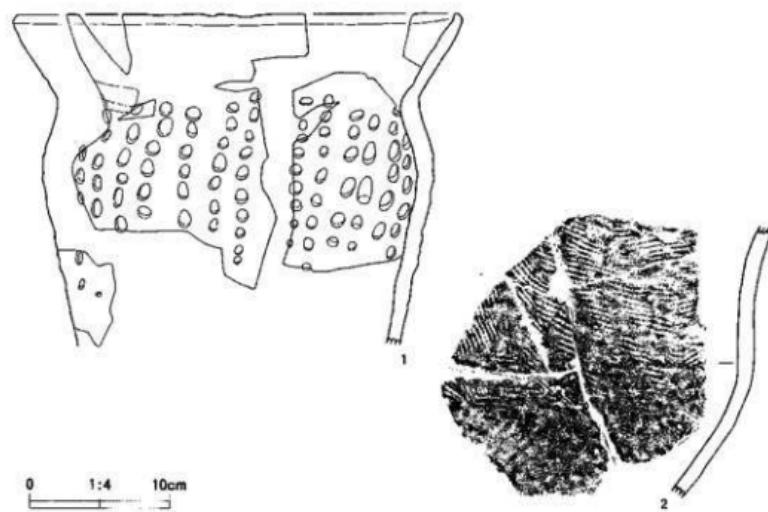
第31図 6,7号配石土坑実測図



第32図 第3区配石遺構実測図

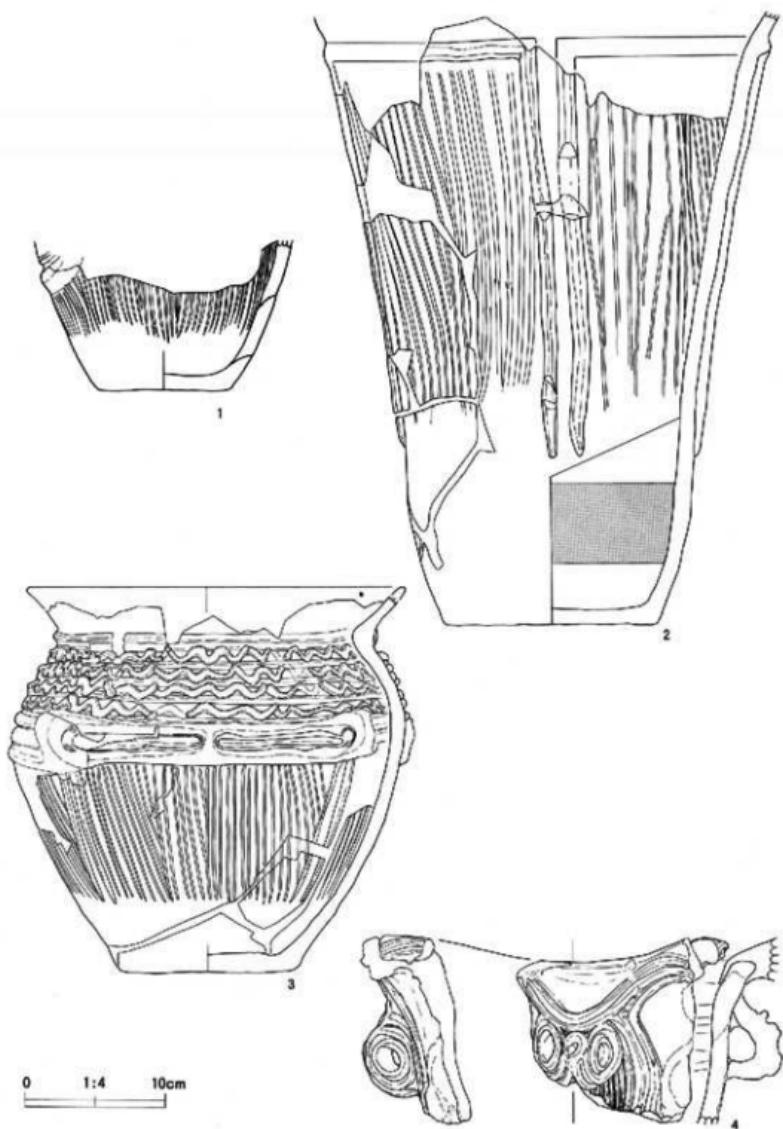


1号土坑出土土器

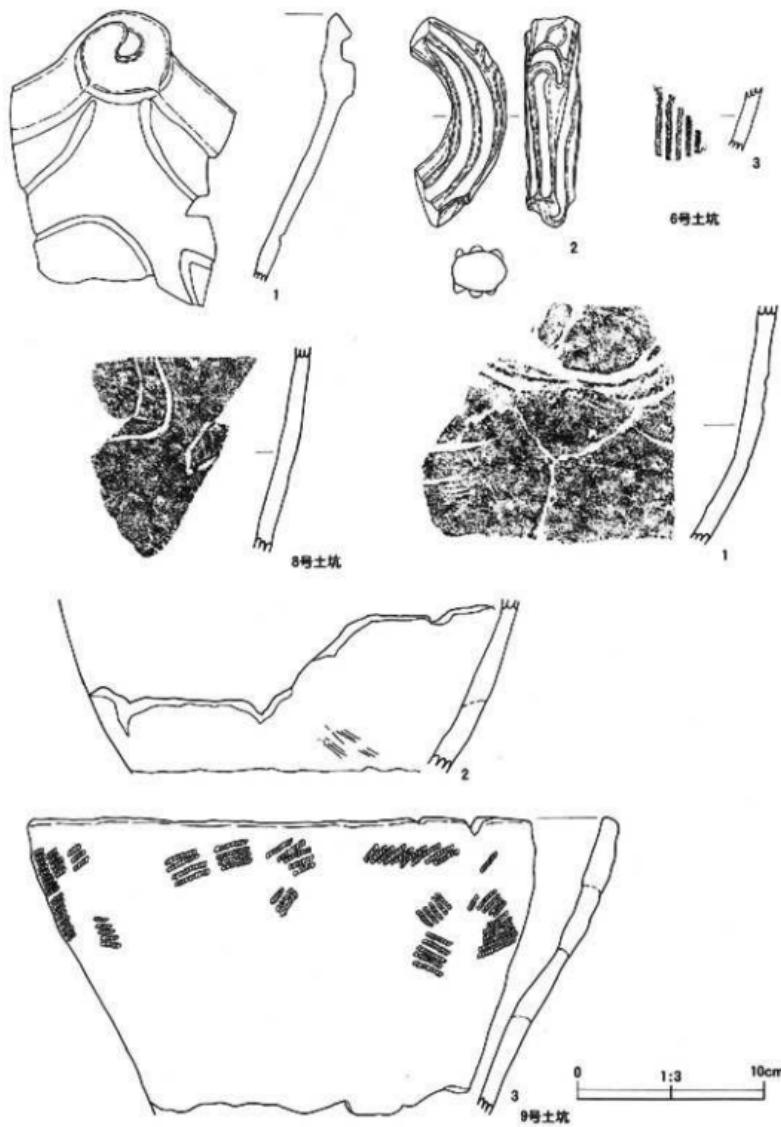


2号土坑出土土器

第33图 1,2号土坑出土土器



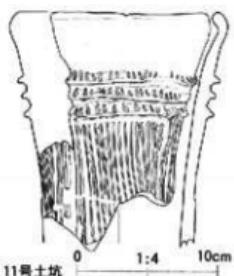
第34図 5号土坑出土土器



第35图 6, 8, 9号土坑出土土器



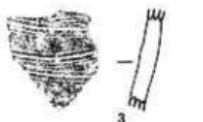
10号土坑



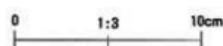
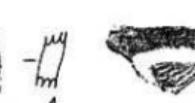
11号土坑



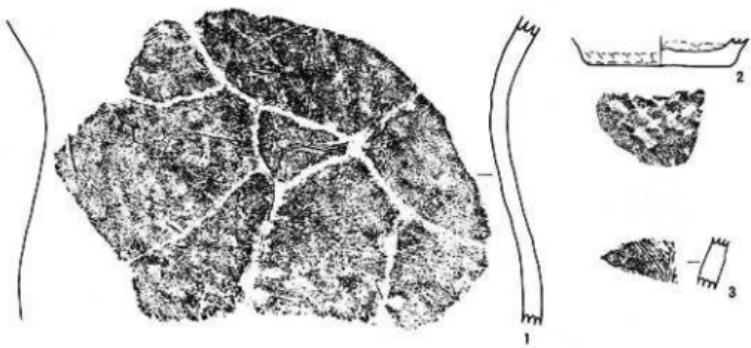
12号土坑



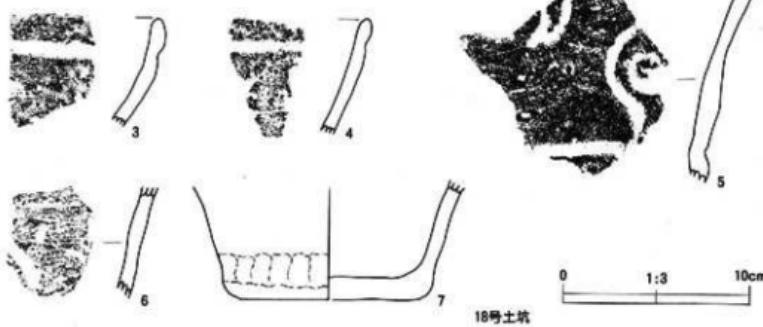
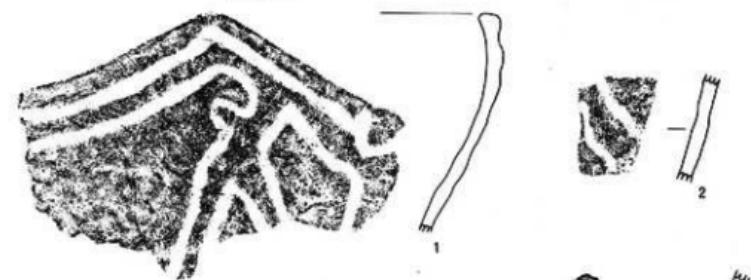
14号土坑



第36図 10, 11, 12, 14号土坑出土土器



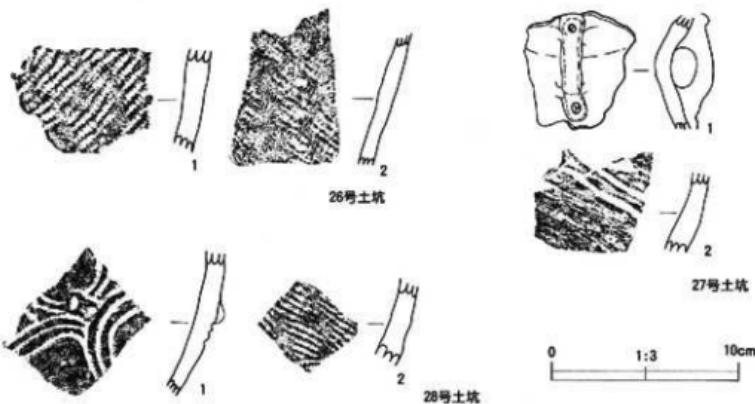
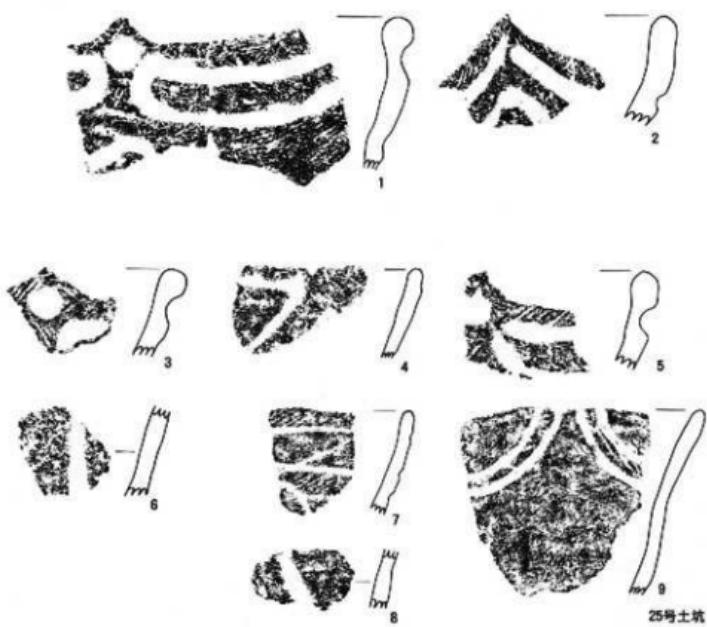
15号土坑



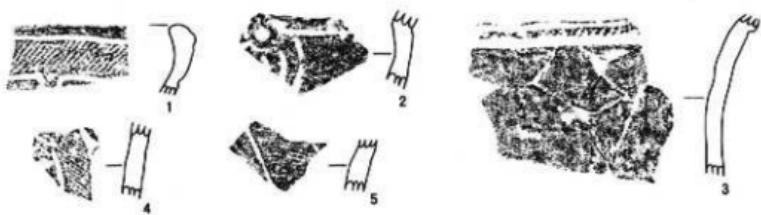
第37圖 15, 18號土坑出土土器



第38圖 19, 23, 24號土坑出土土器



第39図 25~28号土坑出土土器

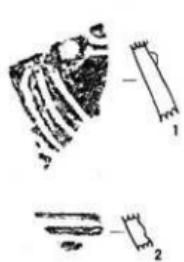


29号土坑



30号土坑

0 1:2 5cm
(10, 11のみ)



32号土坑

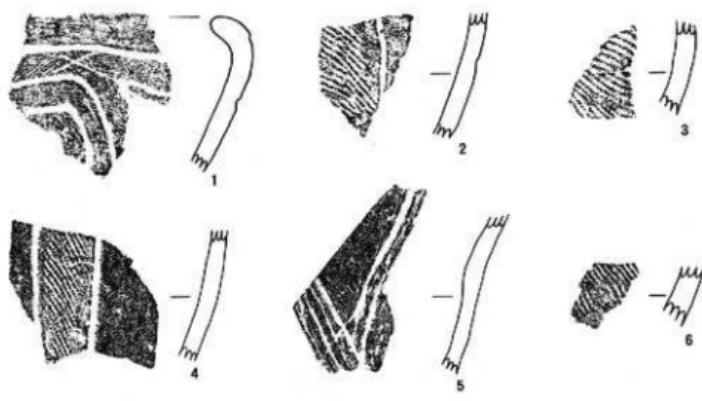


36号土坑 0 1:3 10cm

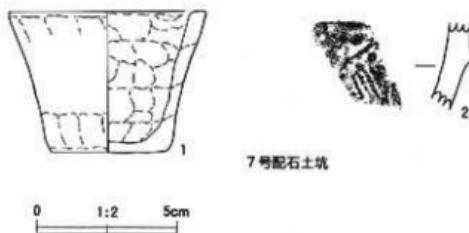
第40図 29, 30, 32, 36号土坑出土土器



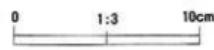
第41図 37, 39, 41, 42, 44, 45号土坑出土土器



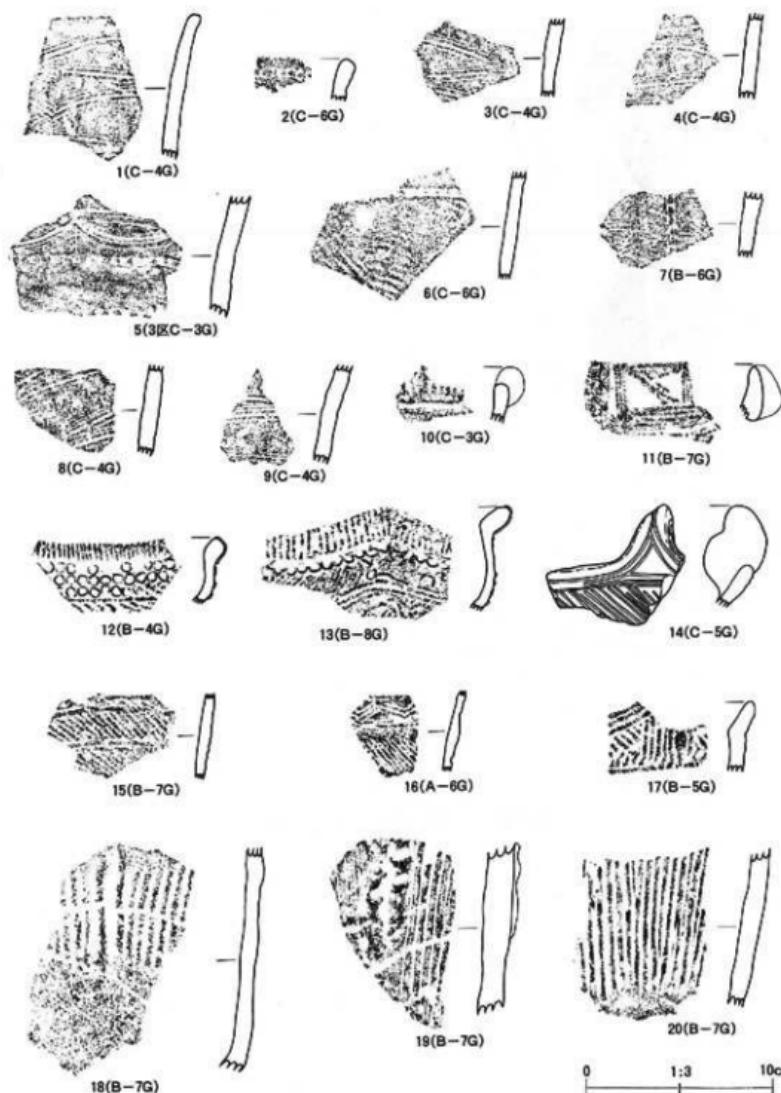
1号配石土坑



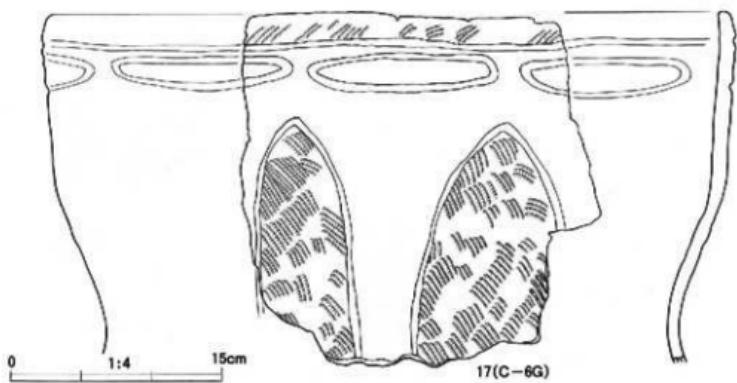
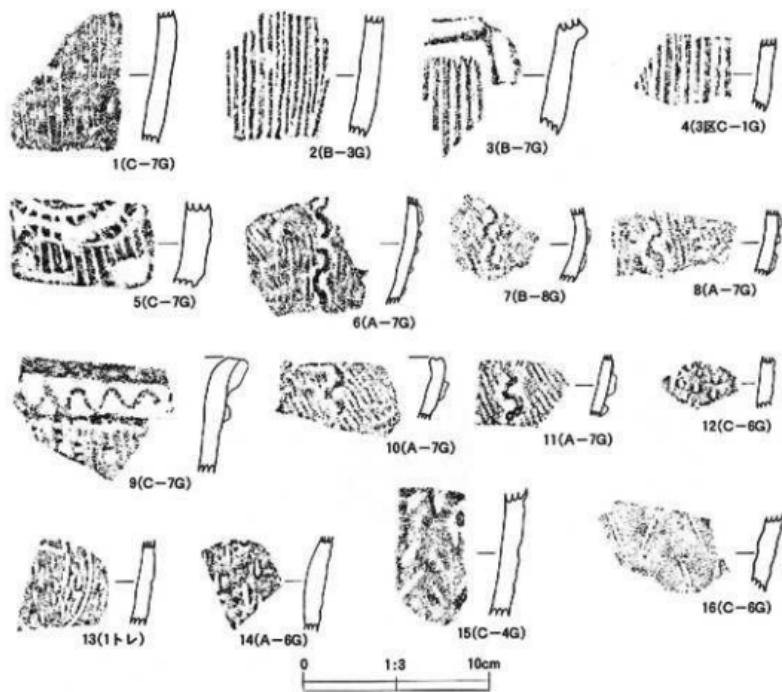
7号配石土坑



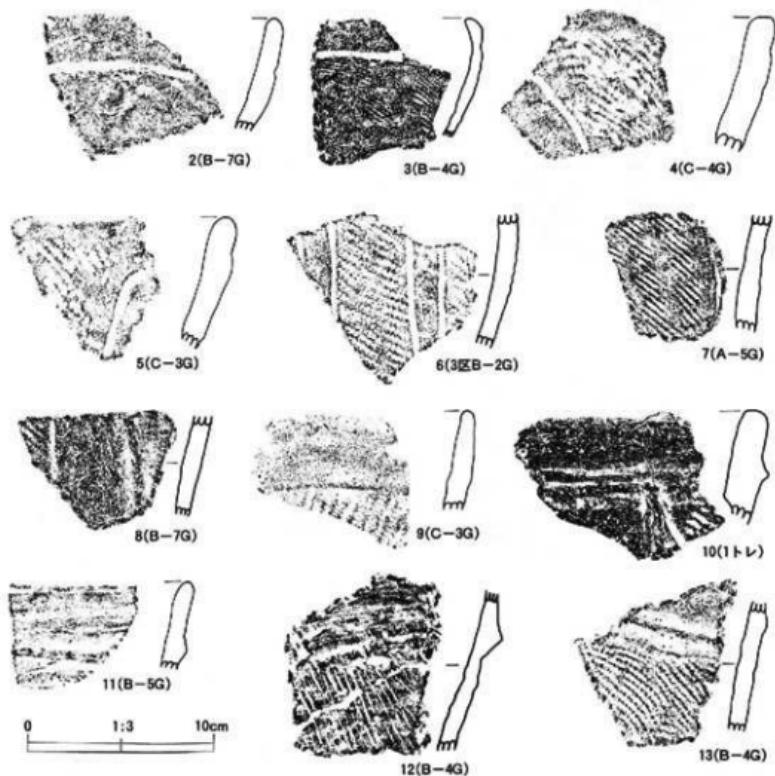
第42图 1,7号配石土坑出土土器



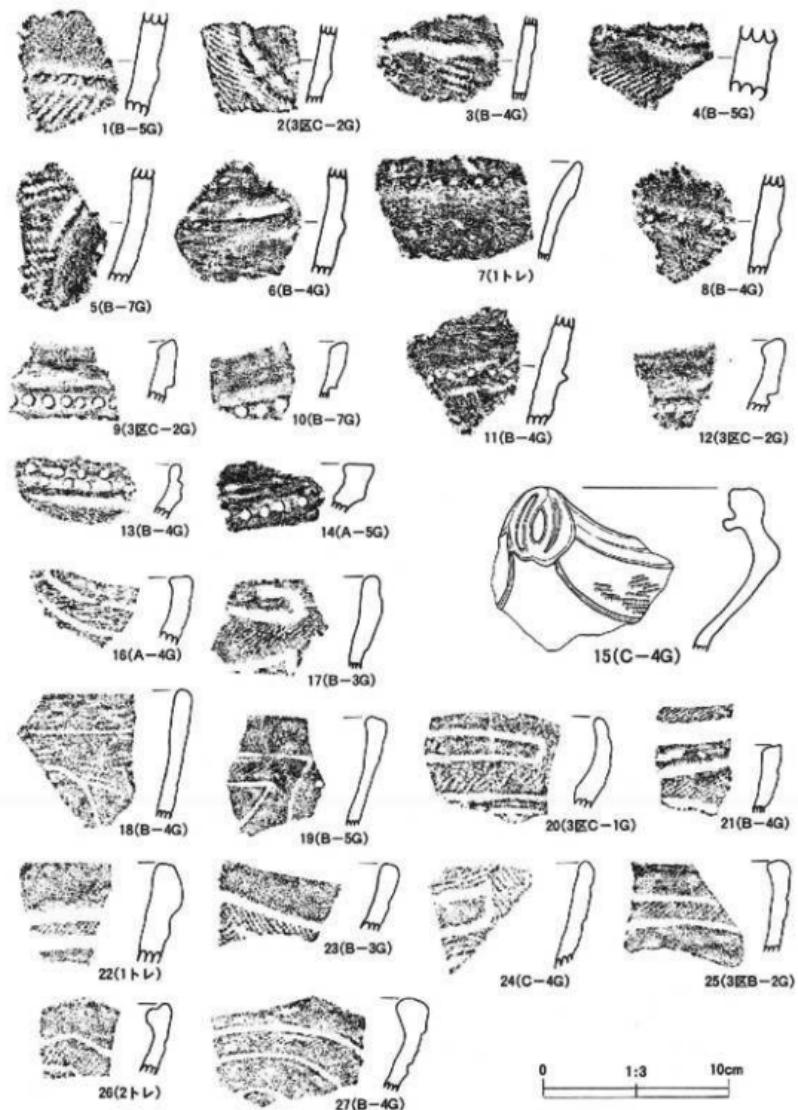
第43図 グリッド出土土器



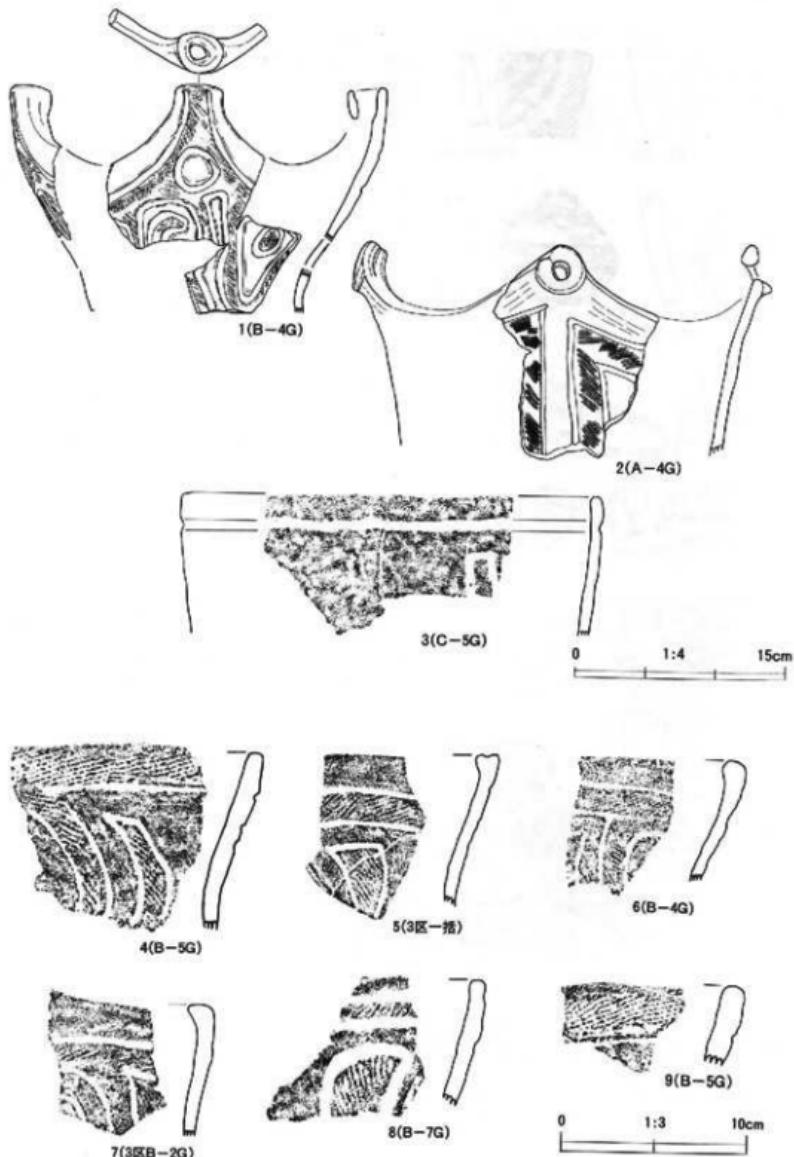
第44図 グリッド出土土器



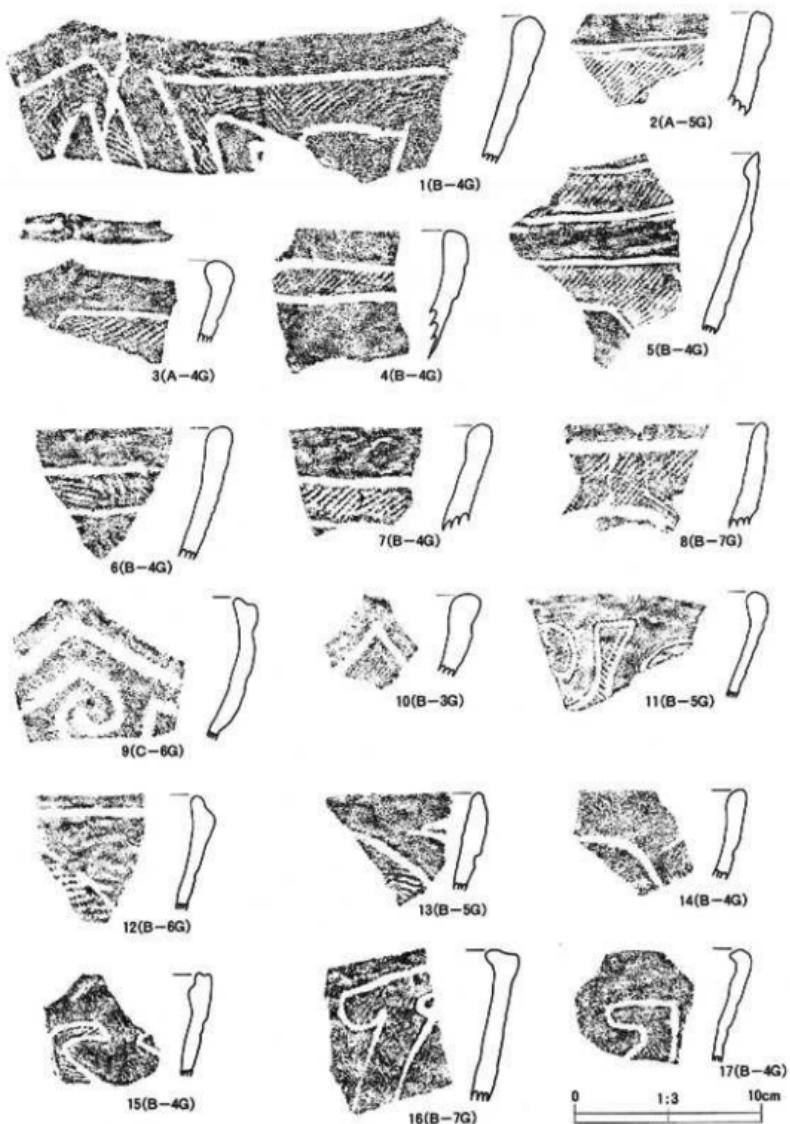
第45図 グリッド出土土器



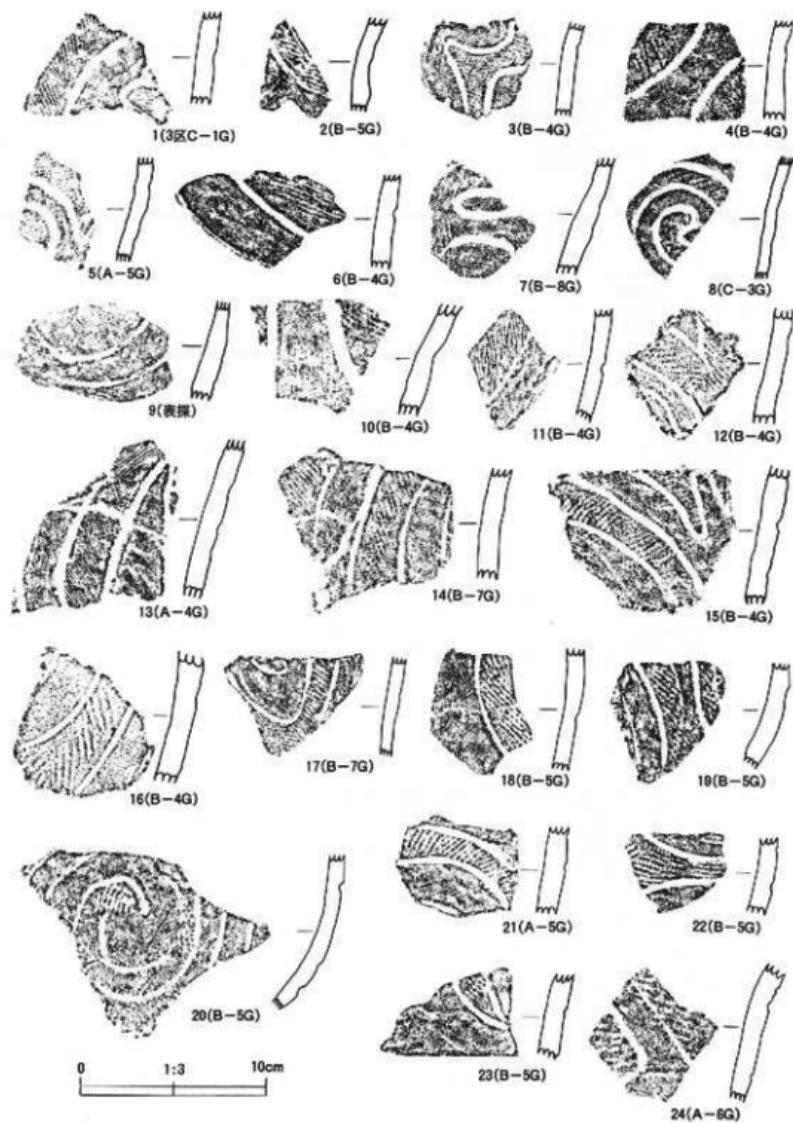
第46図 グリッド出土土器



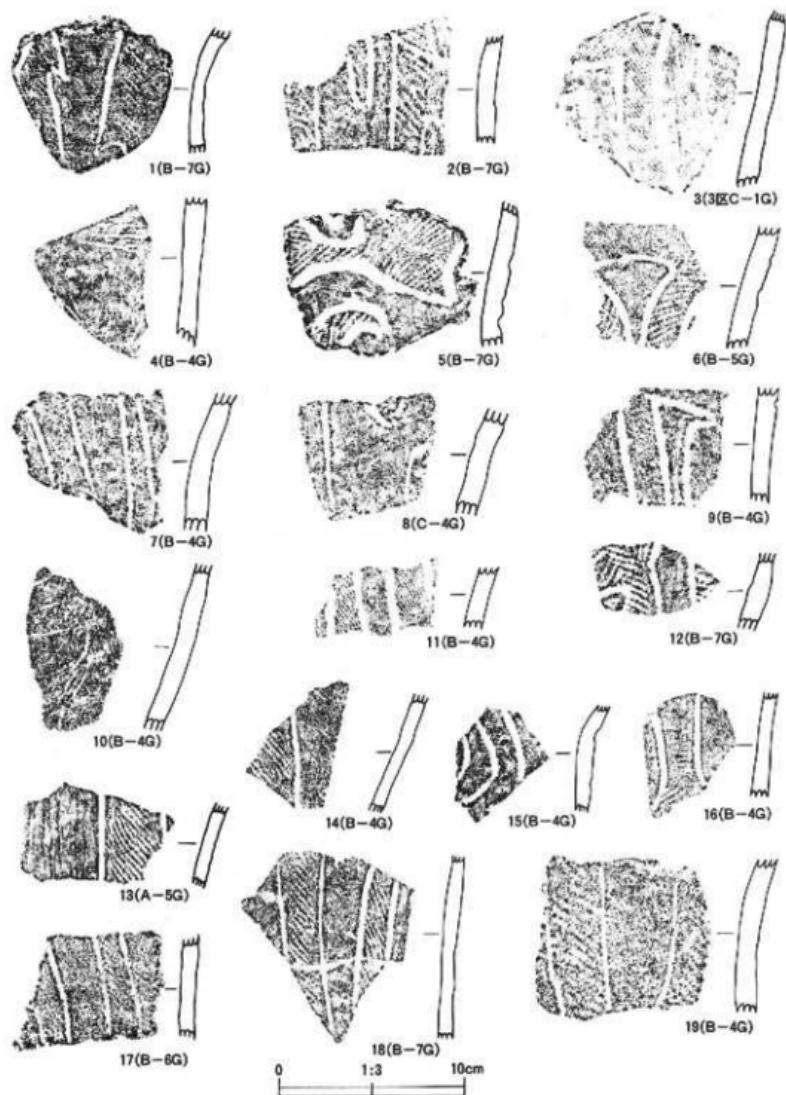
第47図 グリッド出土土器



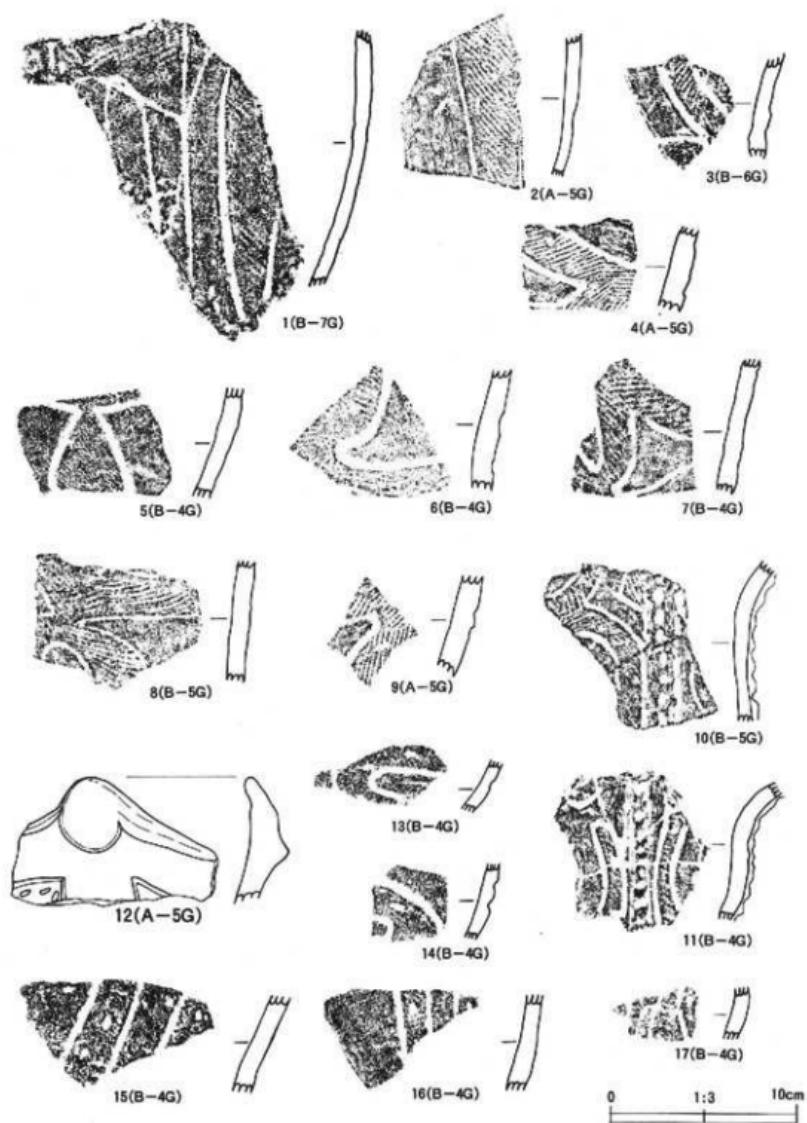
第48図 グリッド出土土器



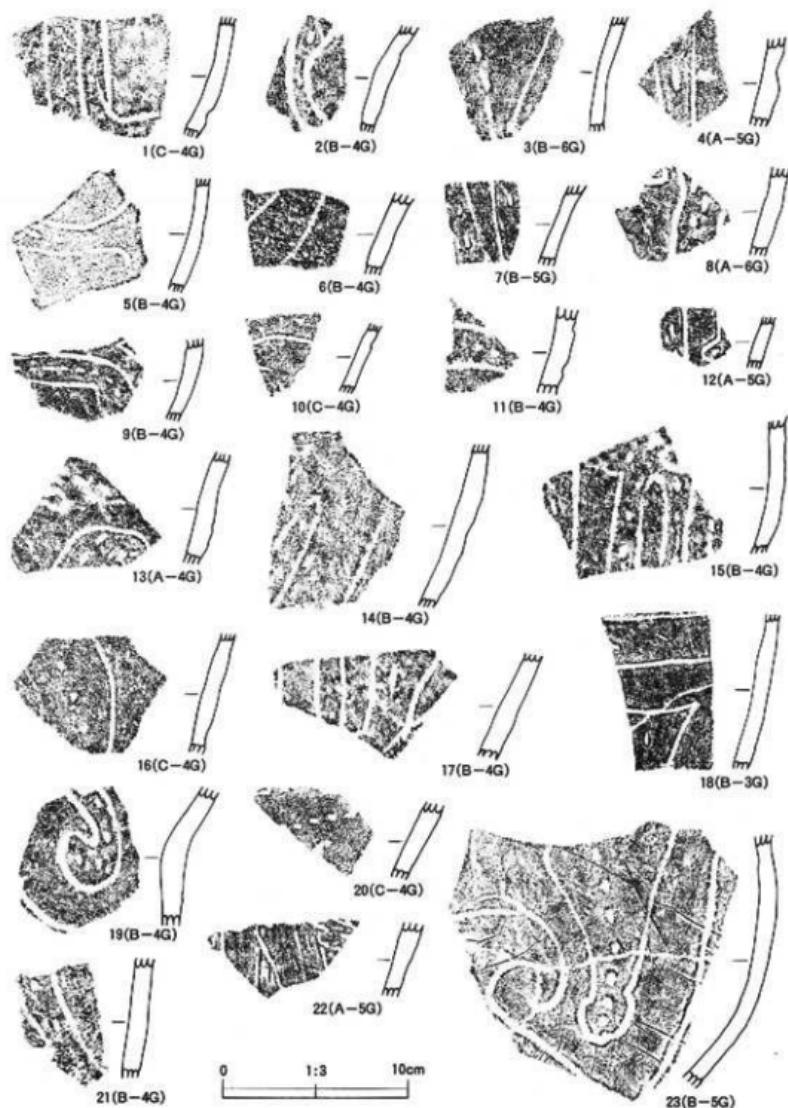
第49図 グリッド出土土器



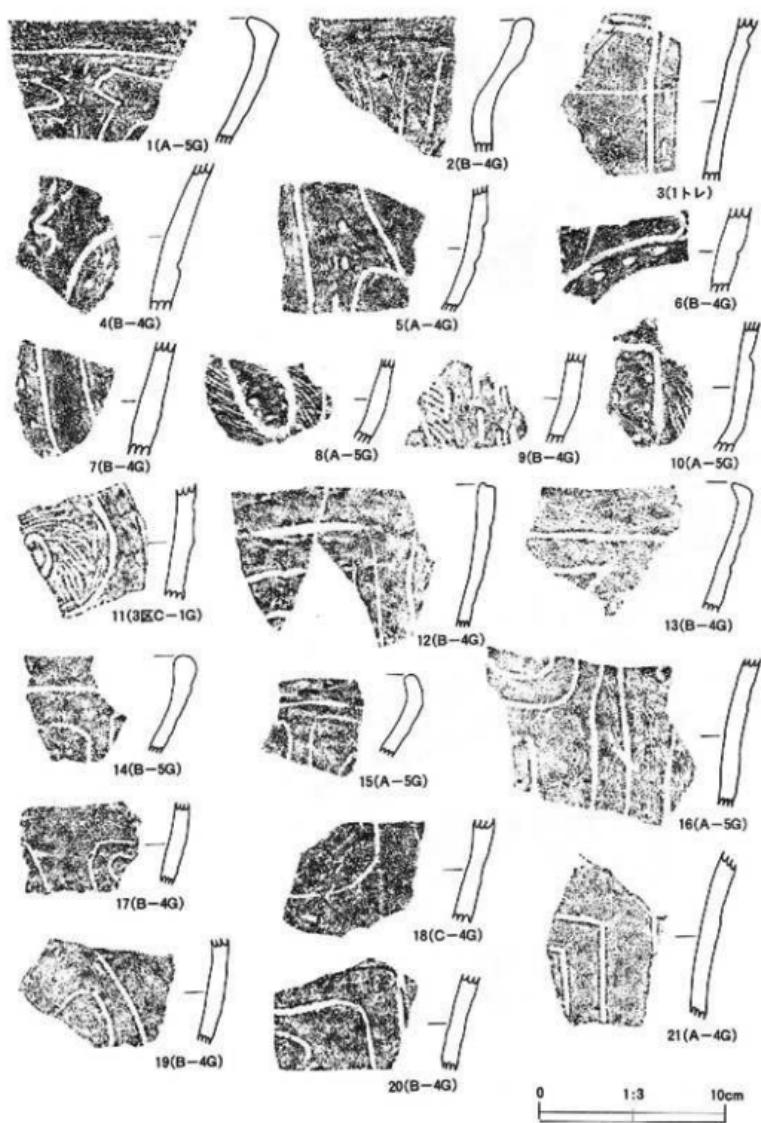
第50図 グリッド出土土器



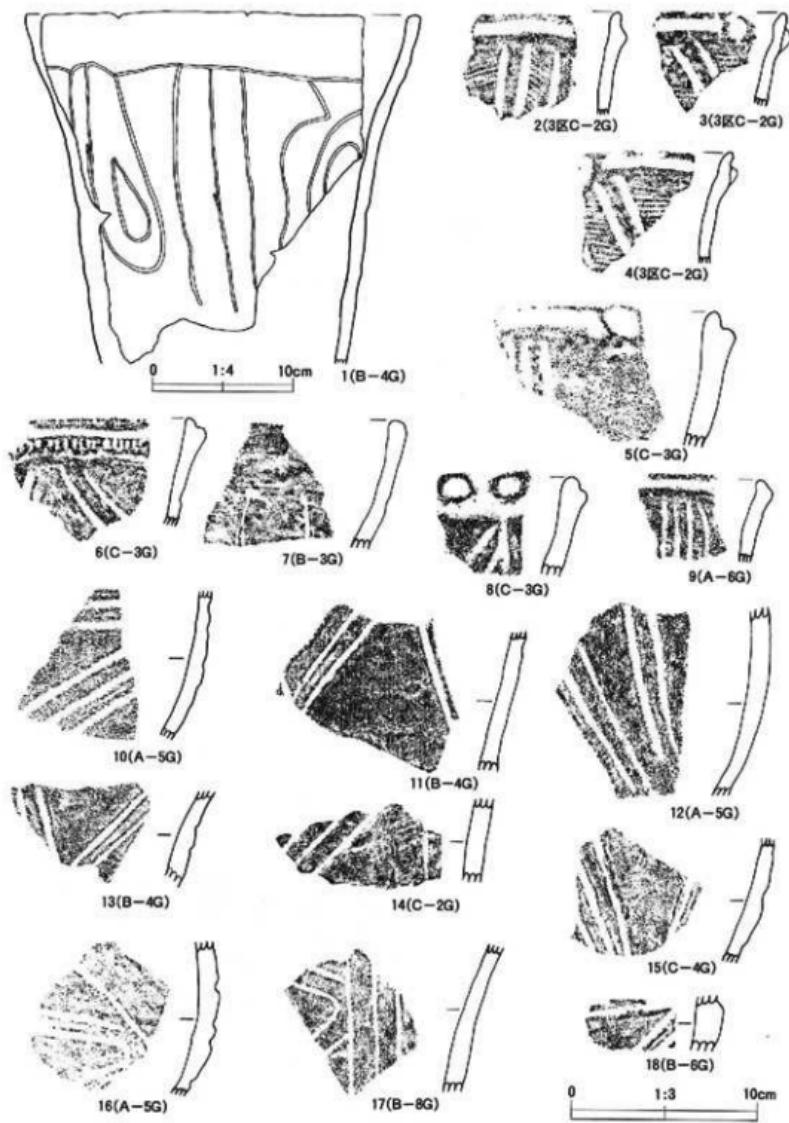
第51図 グリッド出土土器



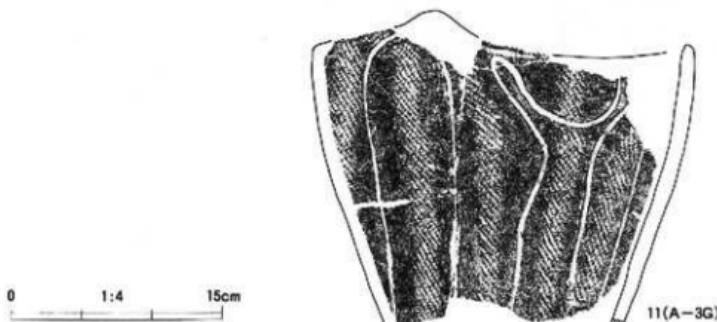
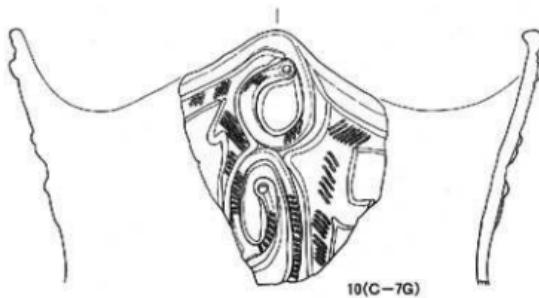
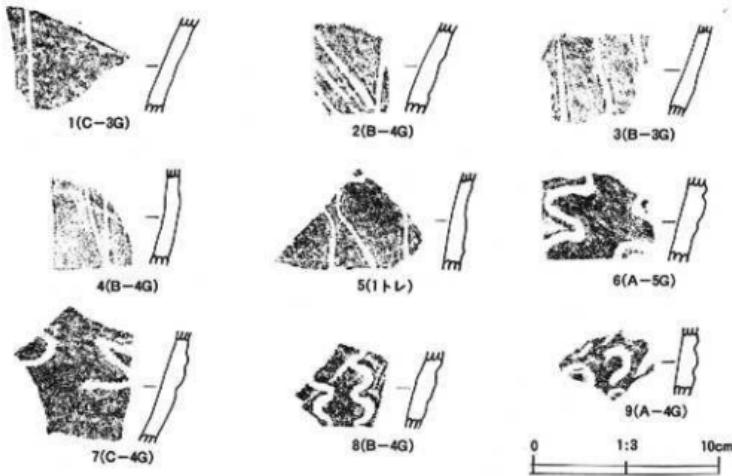
第52図 グリッド出土土器



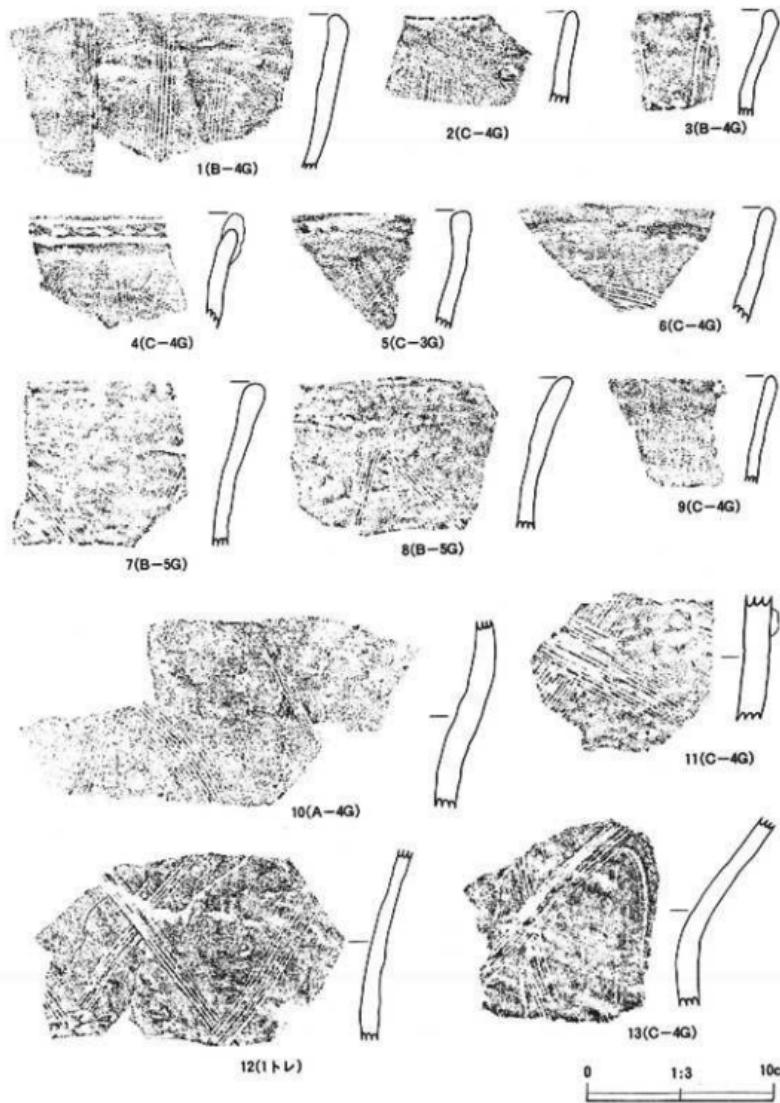
第53図 グリッド出土土器



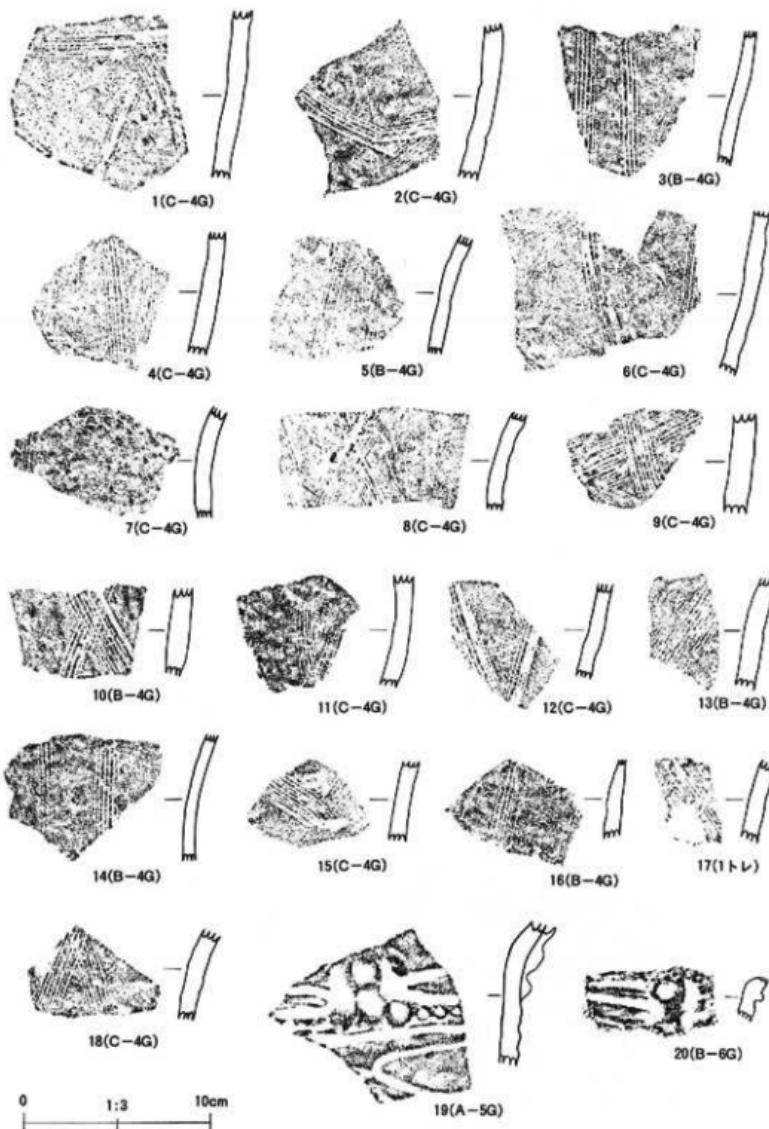
第54図 グリッド出土土器



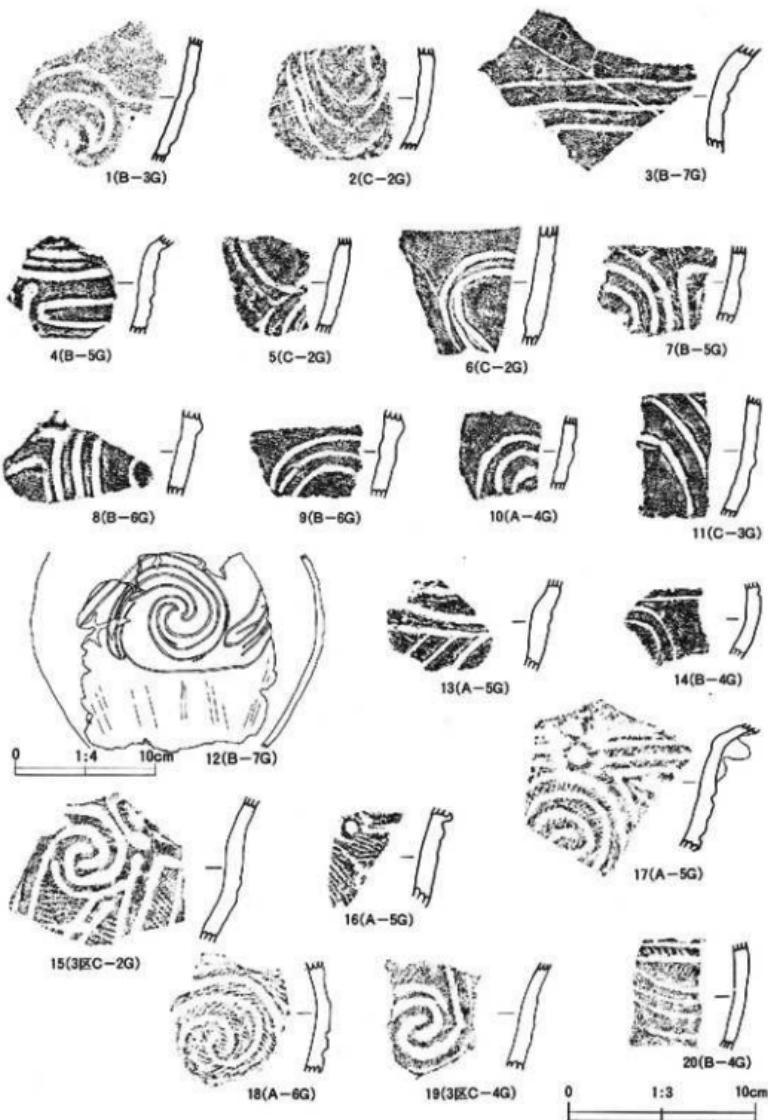
第55図 グリッド出土土器



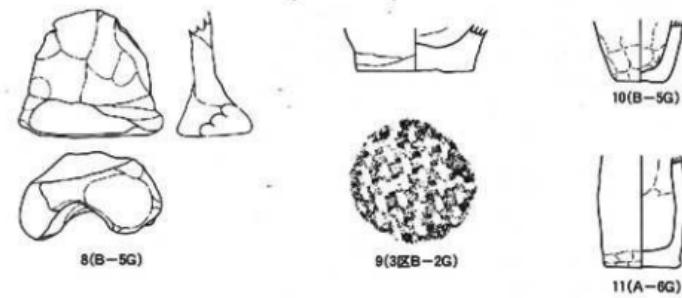
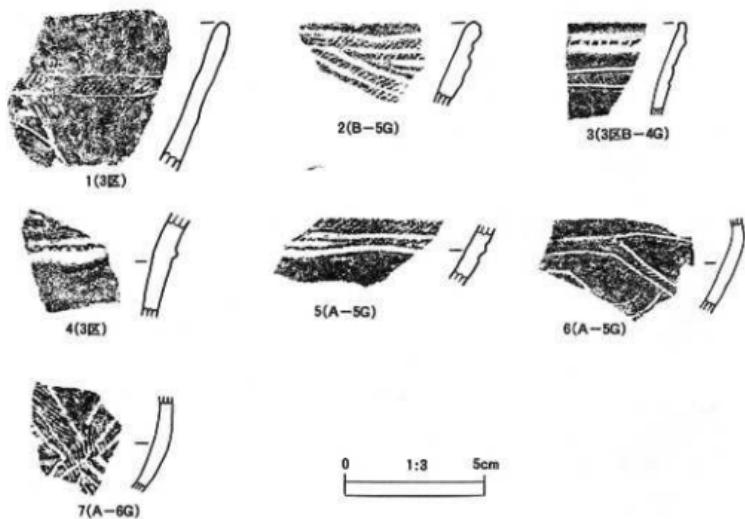
第56図 グリッド出土土器



第57図 グリッド出土土器

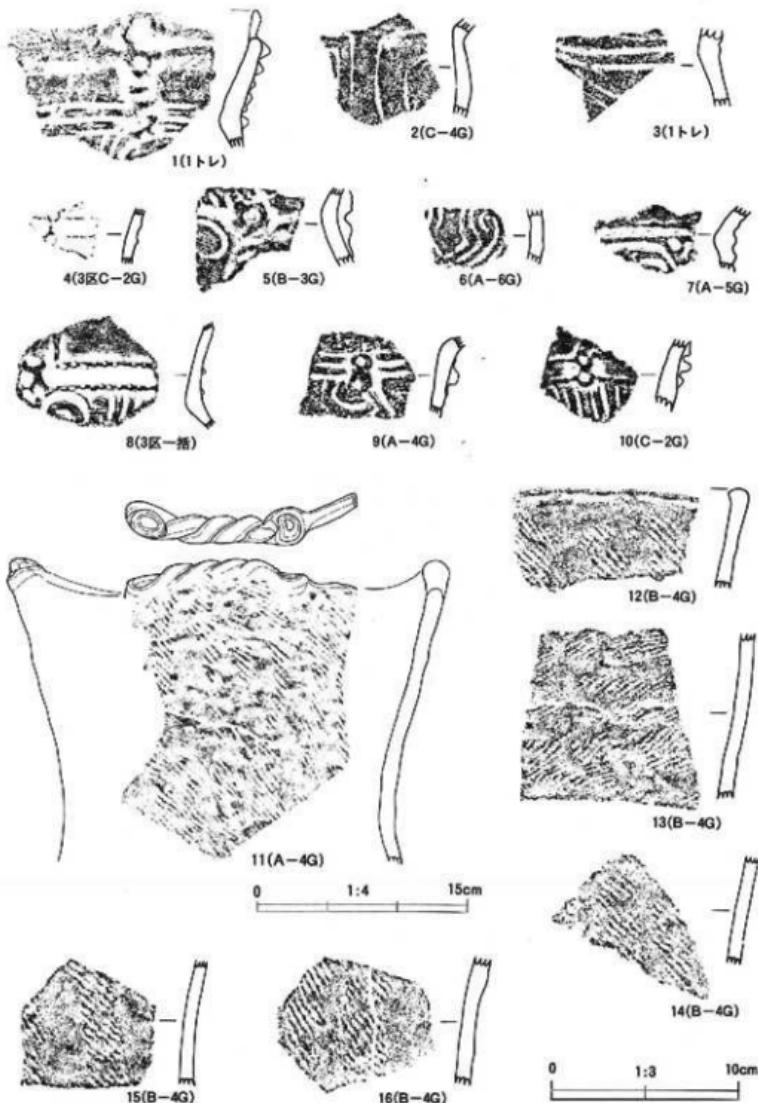


第58図 グリッド出土土器

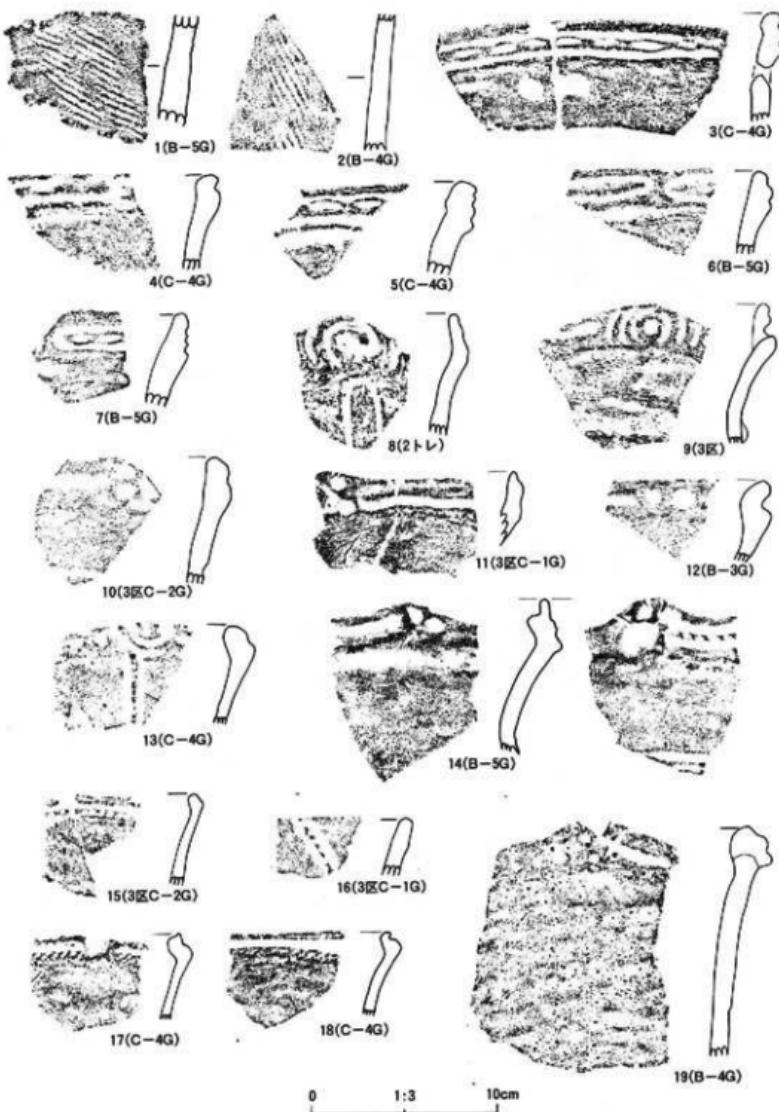


0 1:2 10cm

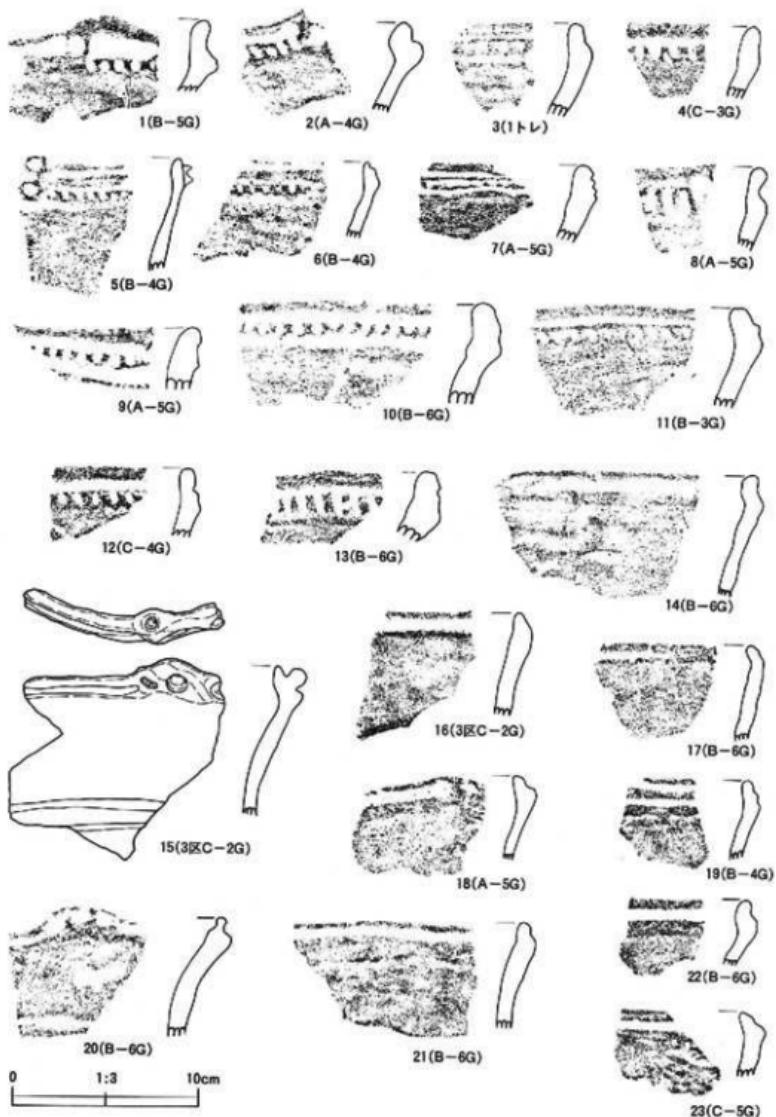
第59図 グリッド出土土器



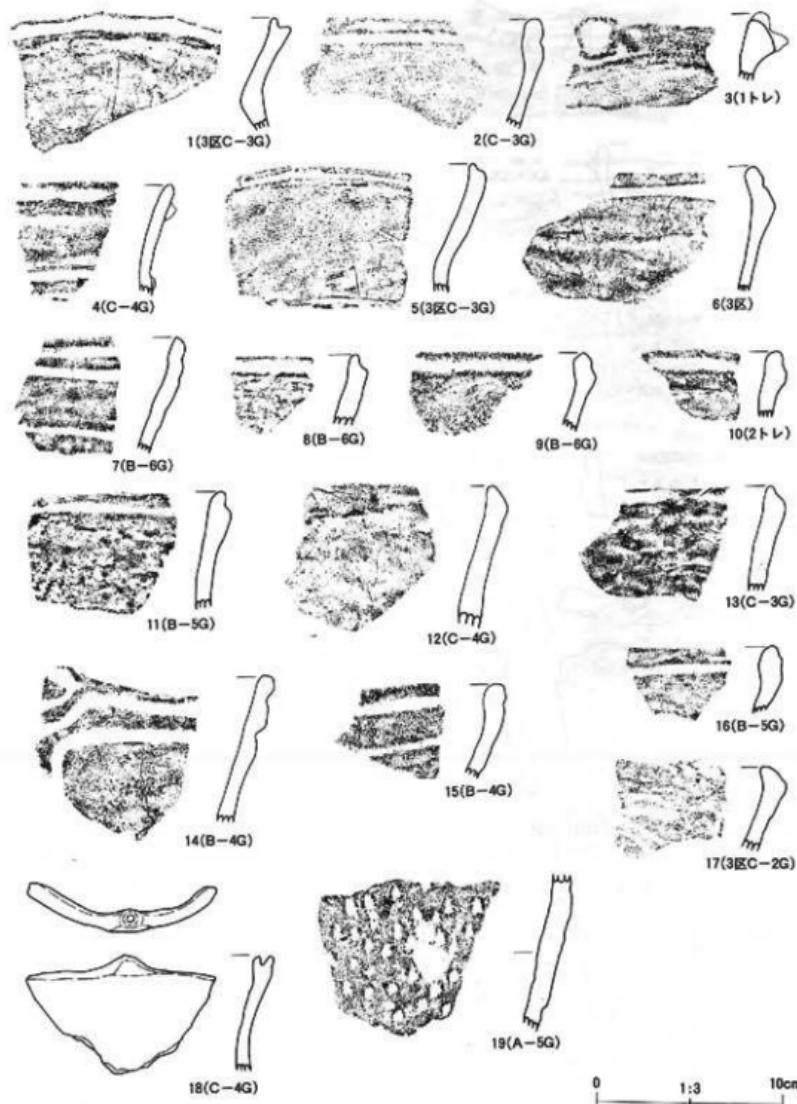
第60図 グリッド出土土器



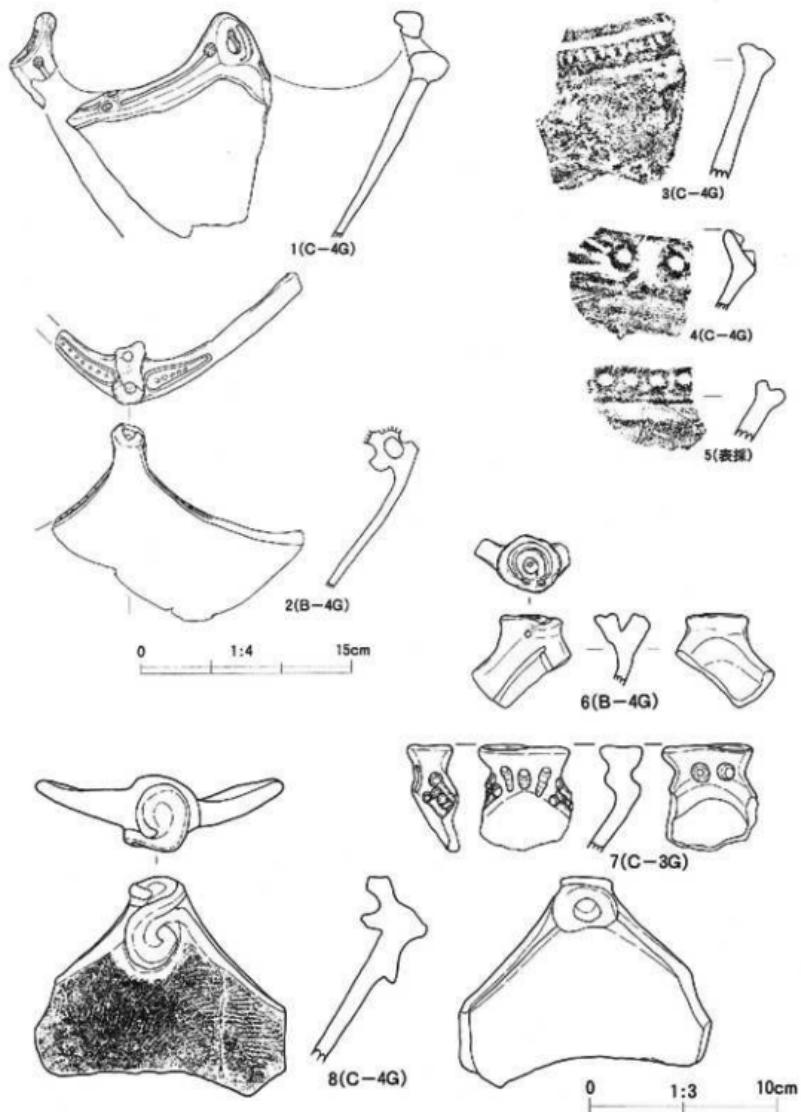
第61図 グリッド出土土器



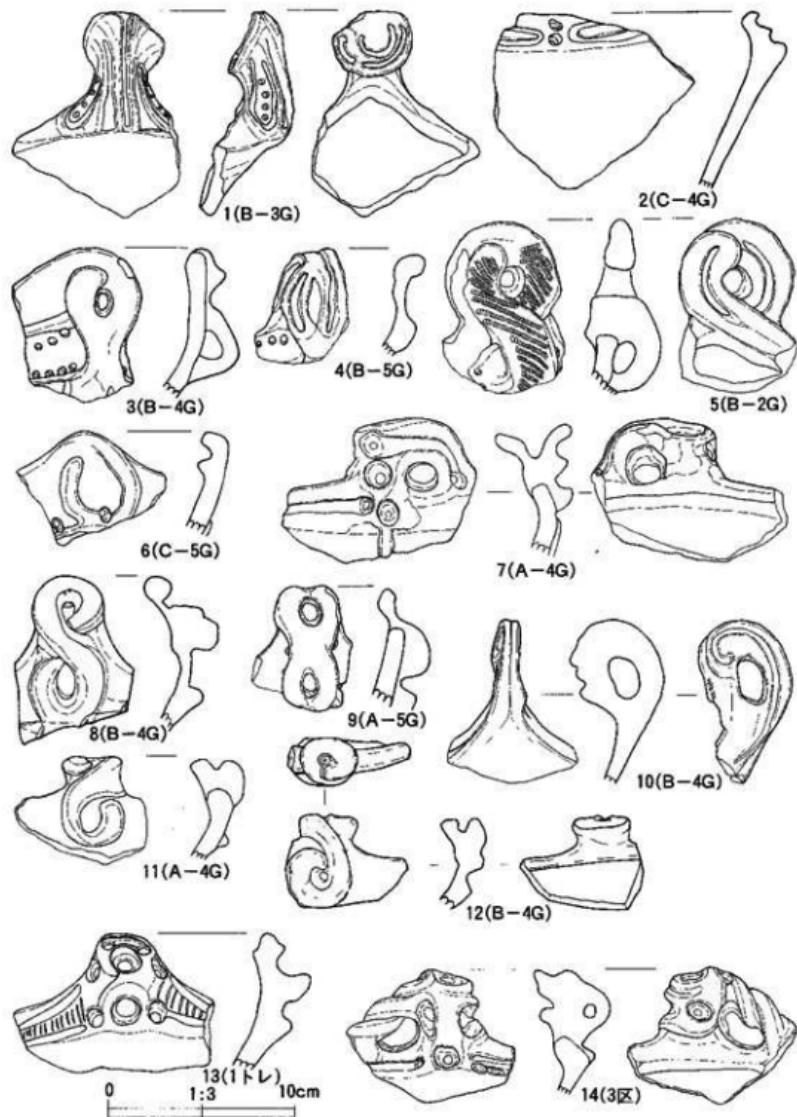
第62図 グリッド出土土器



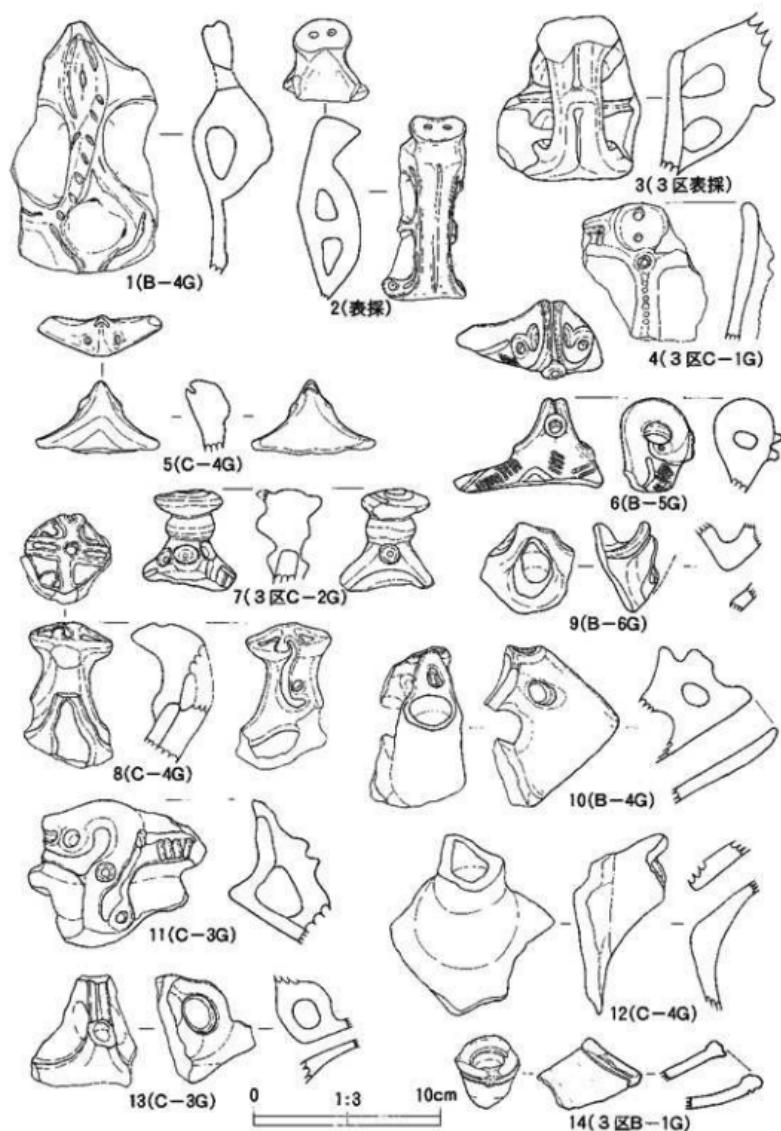
第63図 グリッド出土土器



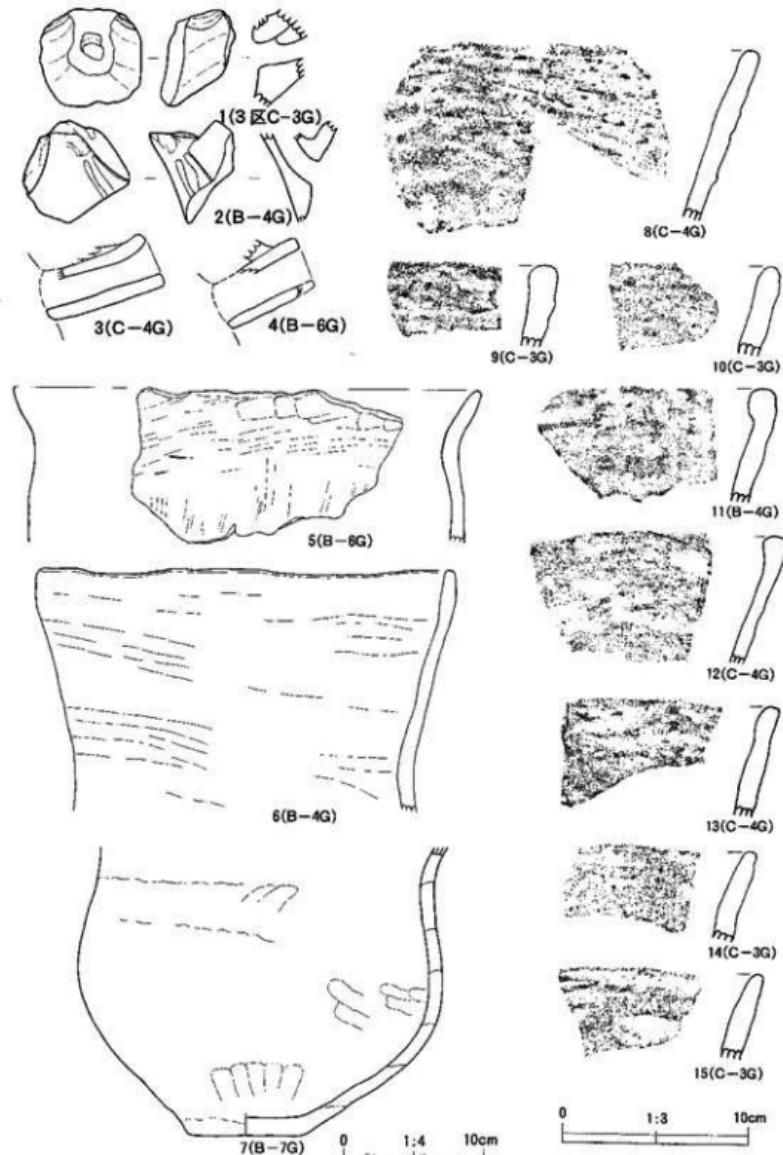
第64図 グリッド出土土器



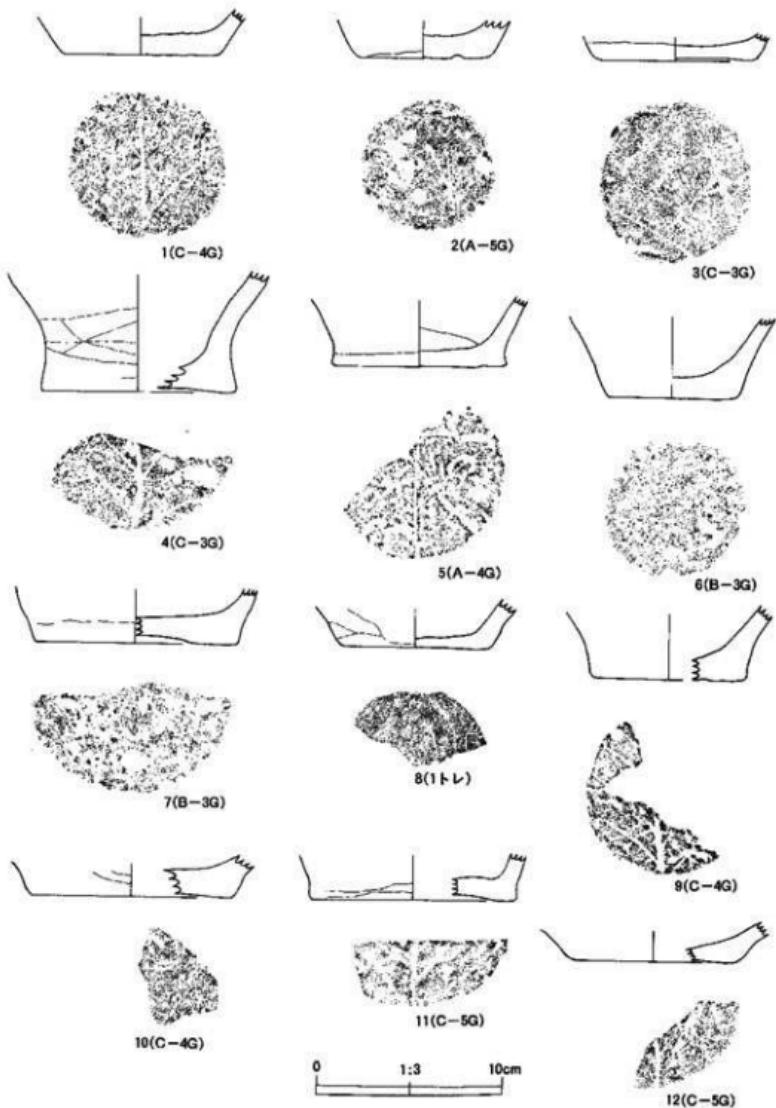
第65図 グリッド出土土器



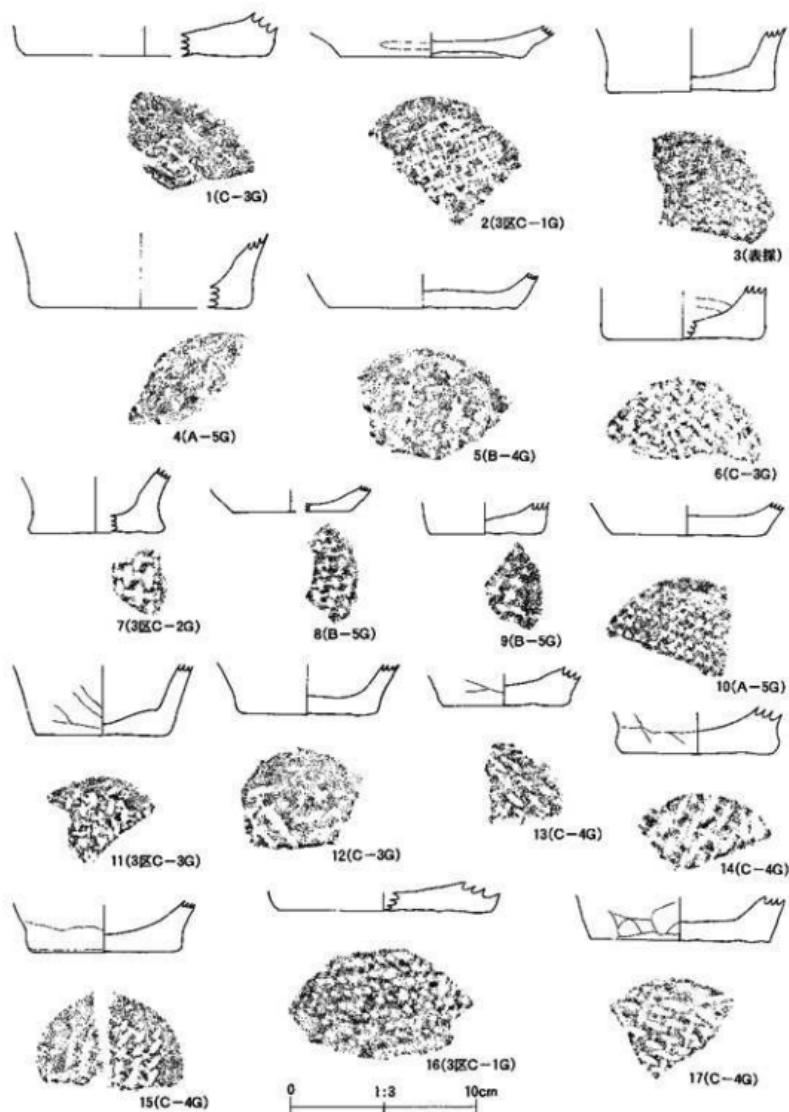
第66図 グリッド出土土器



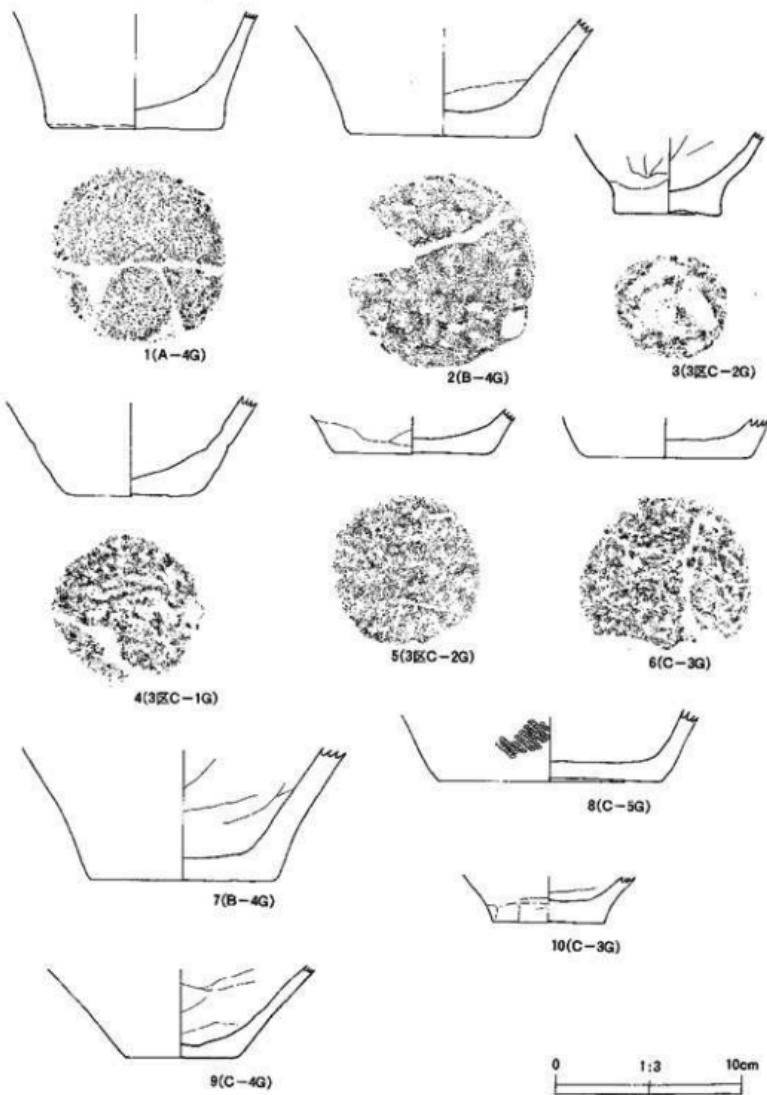
第67図 グリッド出土土器



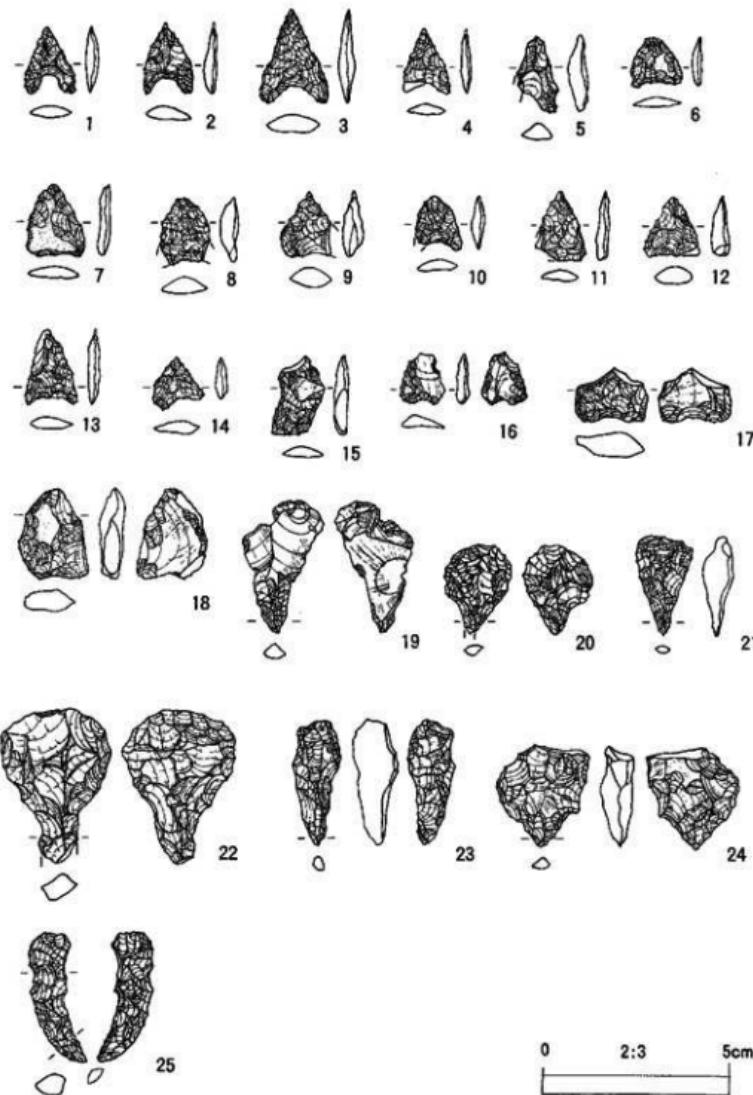
第68図 グリッド出土土器



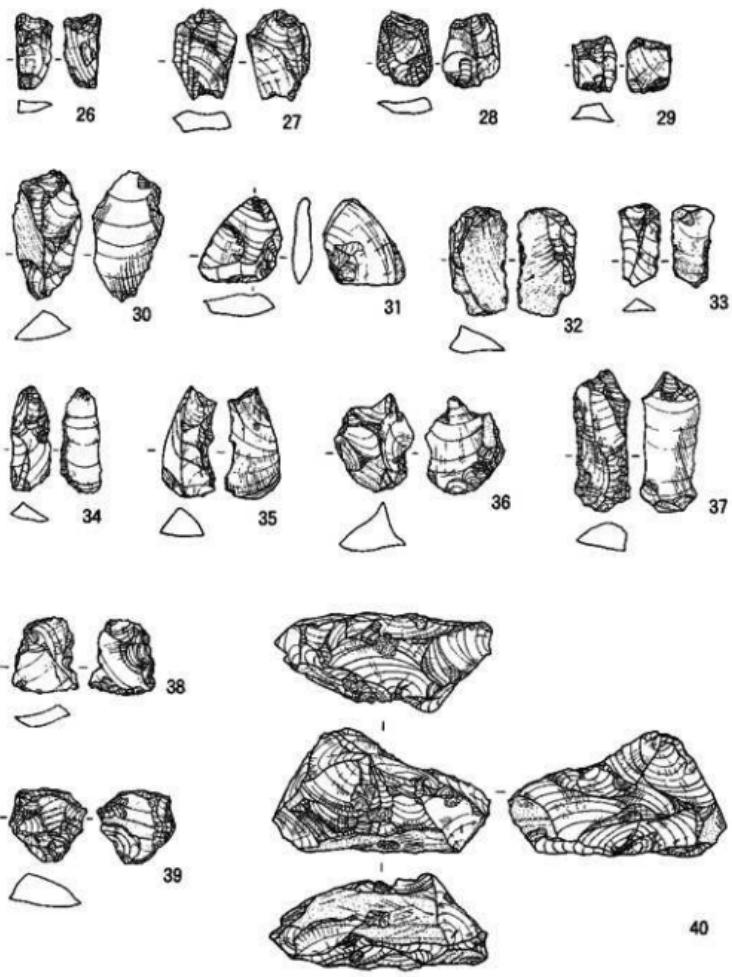
第69図 グリッド出土土器



第70図 グリッド出土土器

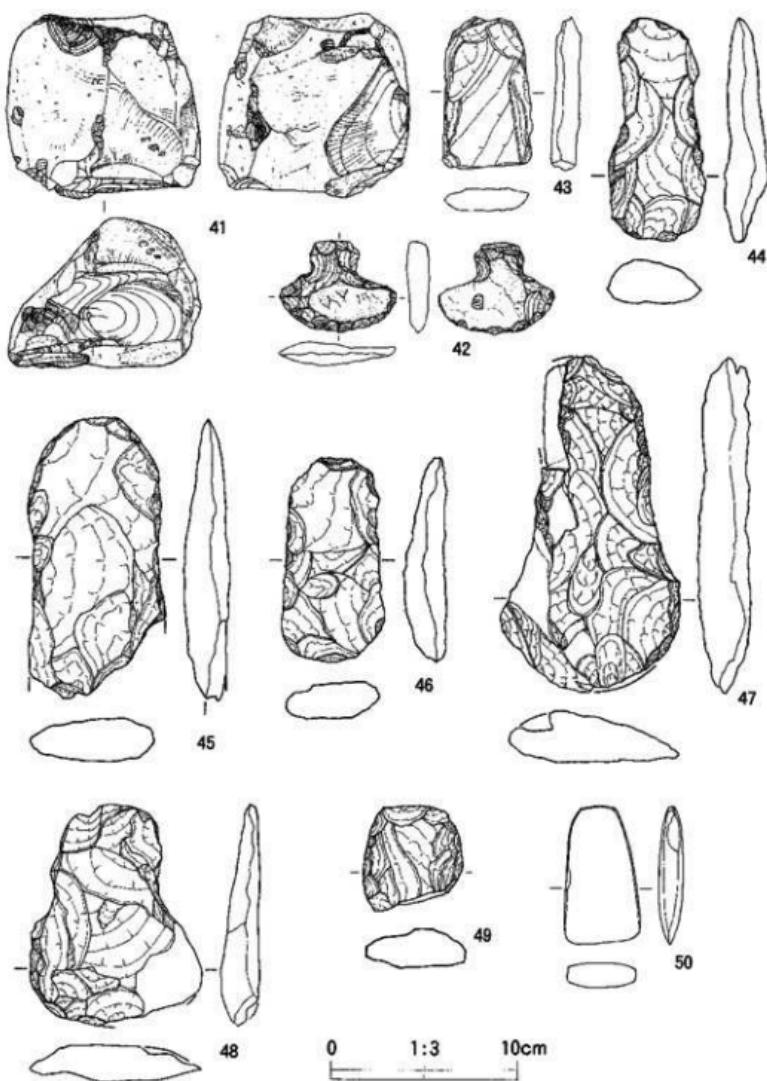


第71図 石器(1)

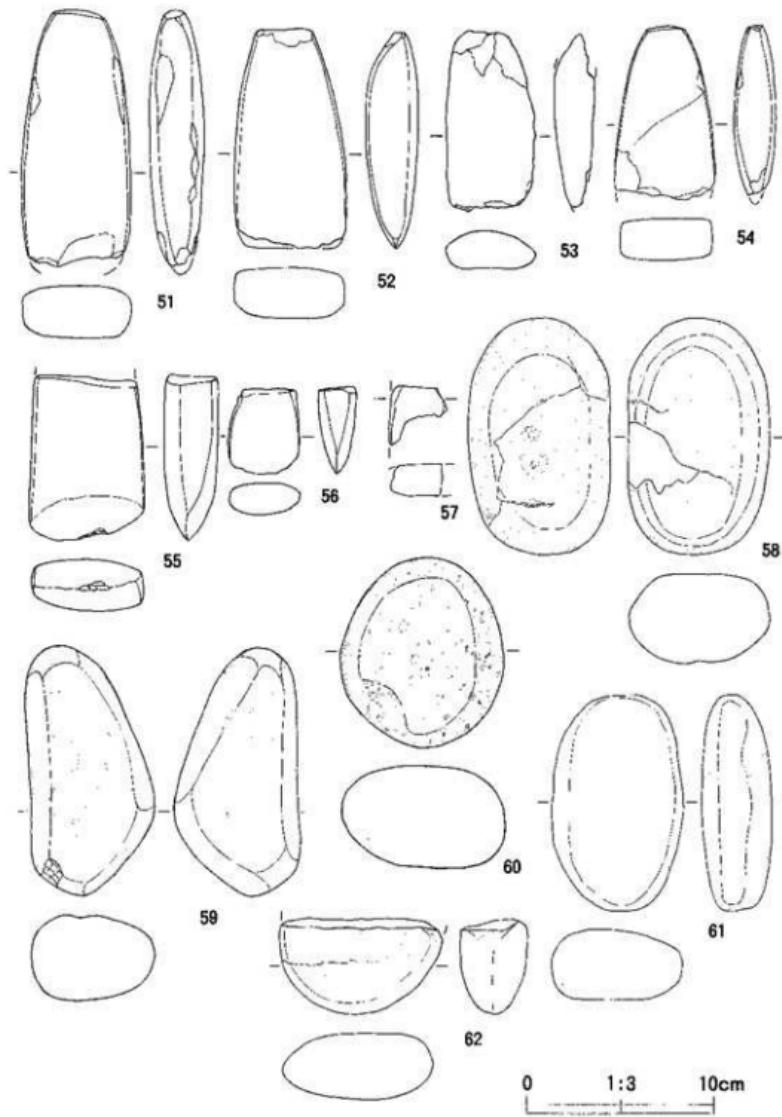


0 2:3 5cm

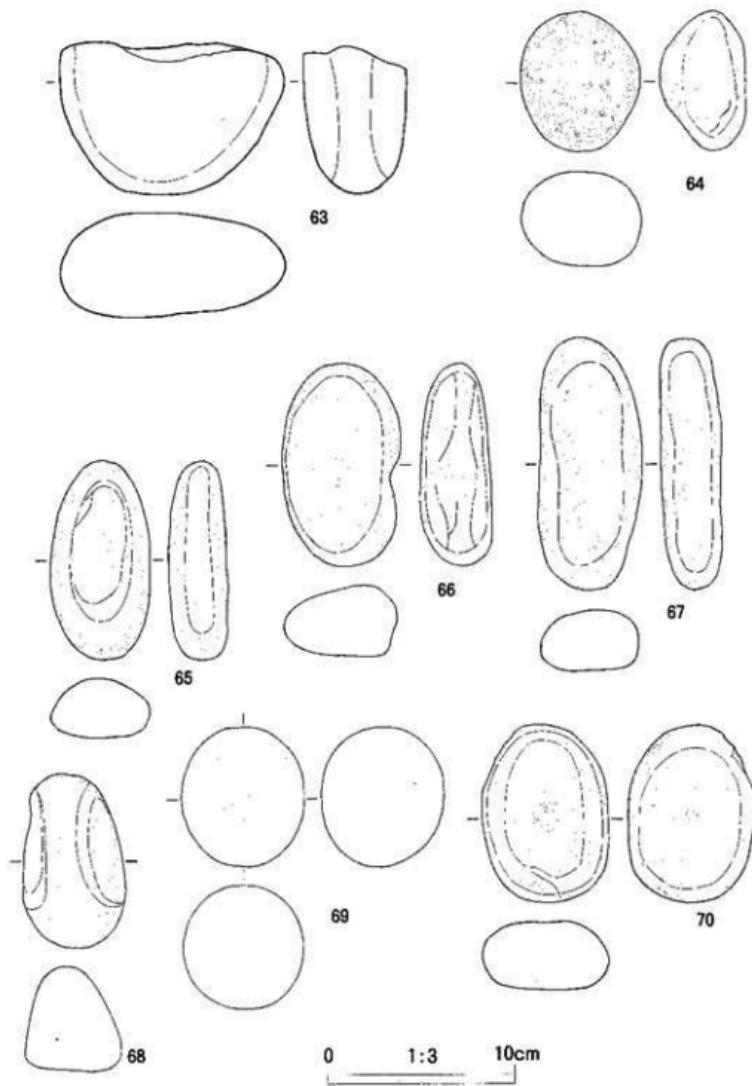
第72図 石 器 (2)



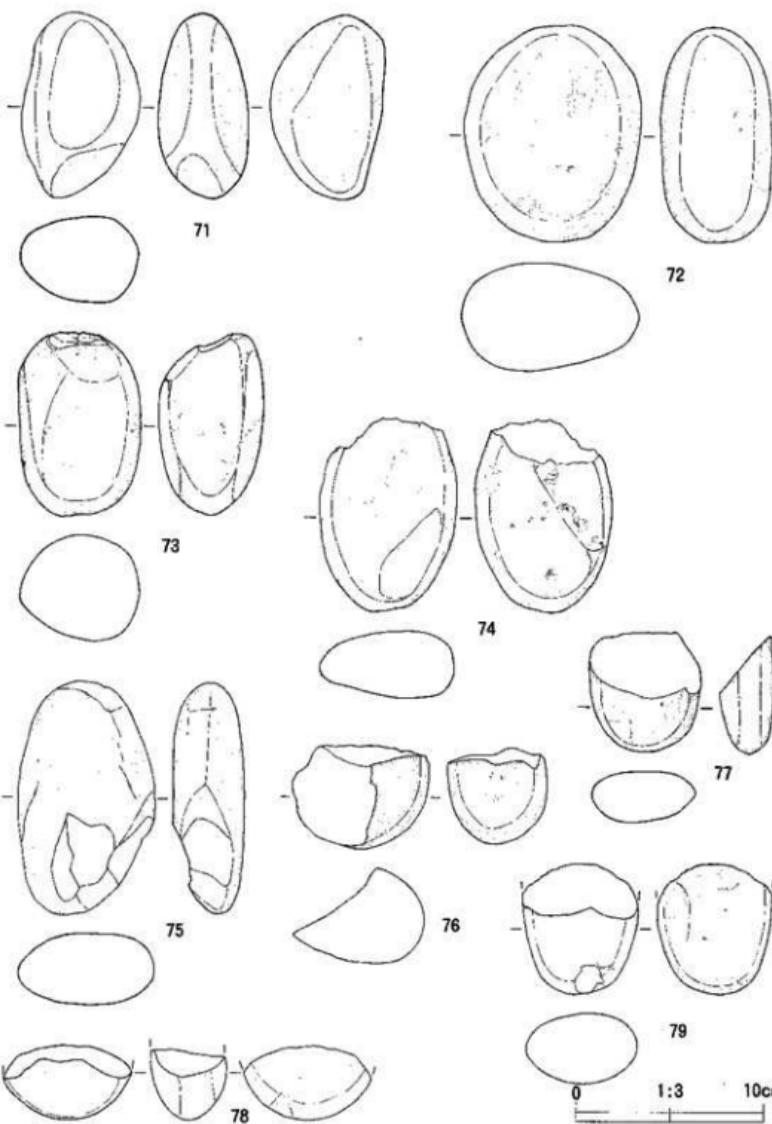
第73図 石 器 (3)



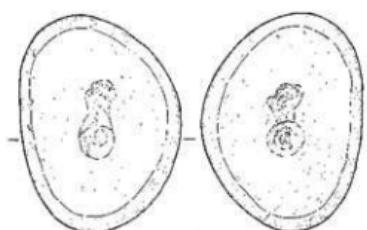
第74図 石 器 (4)



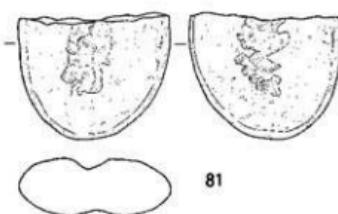
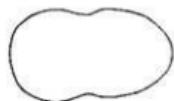
第75圖 石 器 (5)



第76図 石 器 (6)



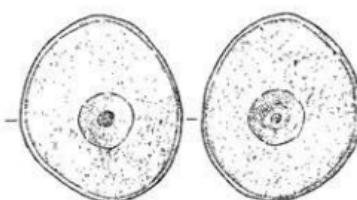
80



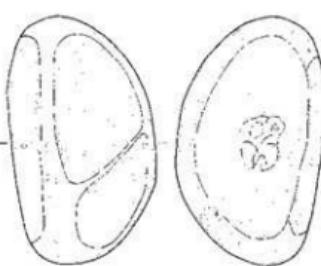
81



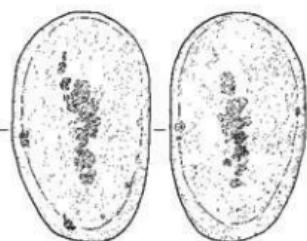
82



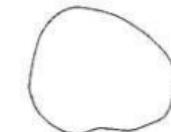
83



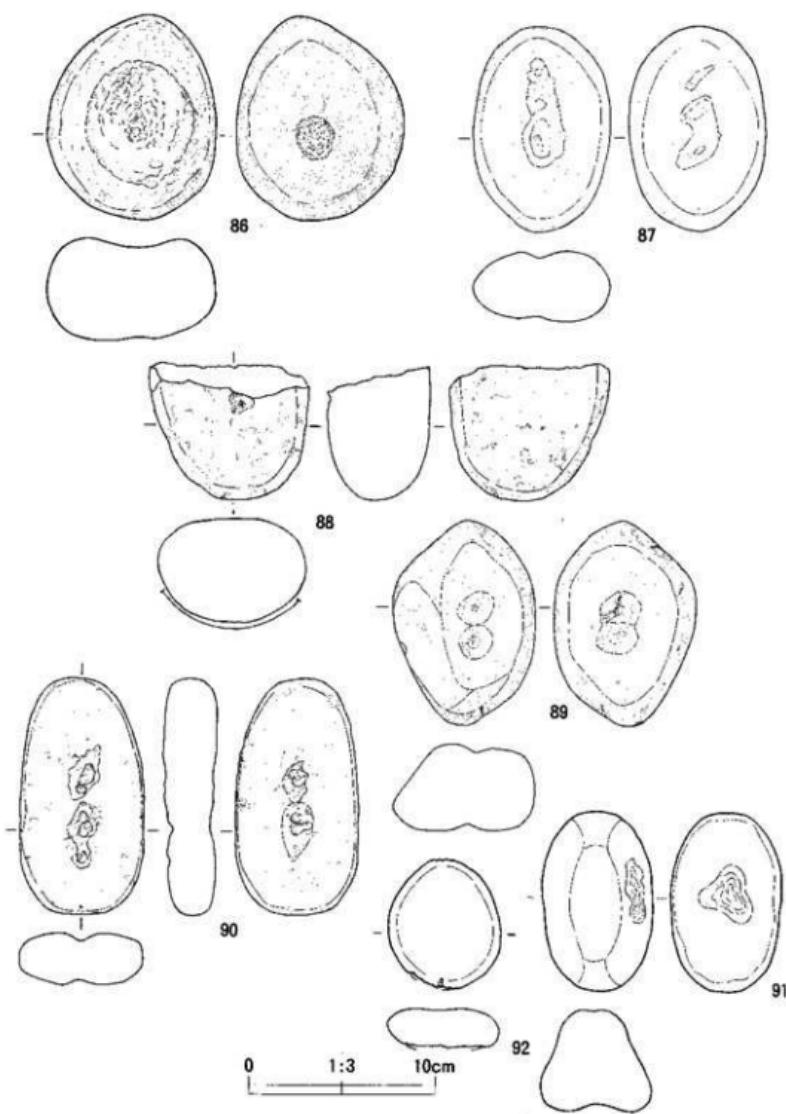
84



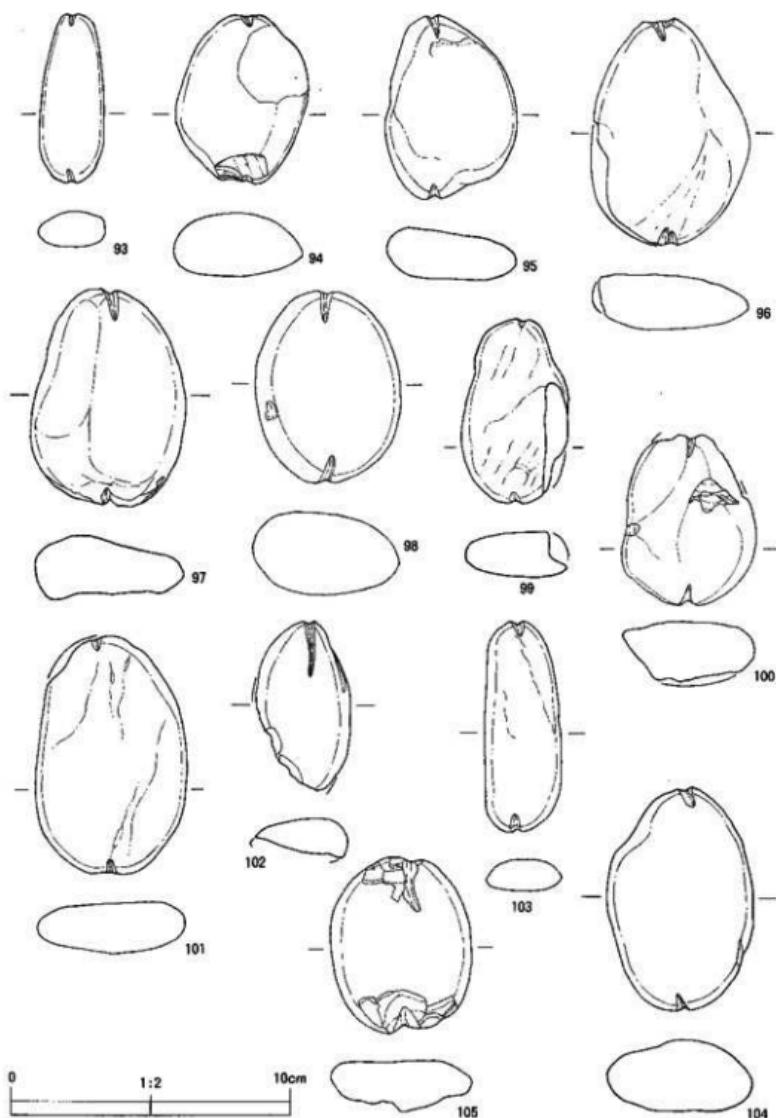
0 1:3 10cm



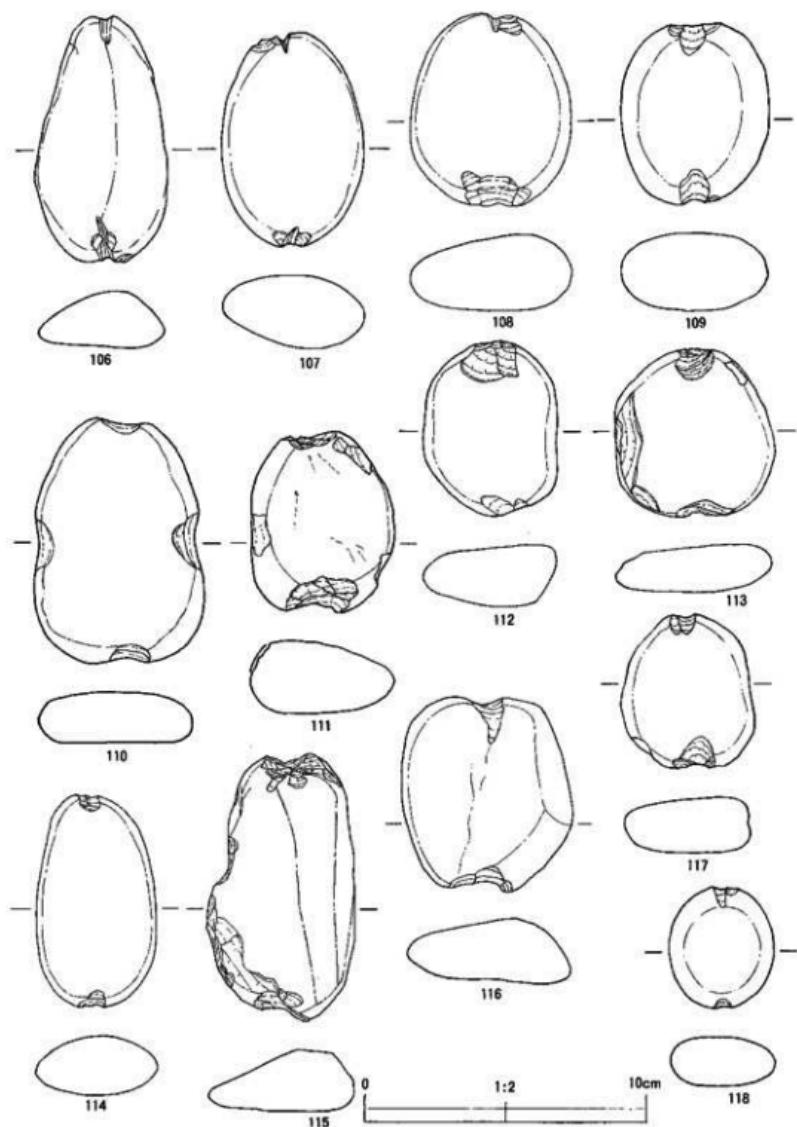
第77図 石器(7)



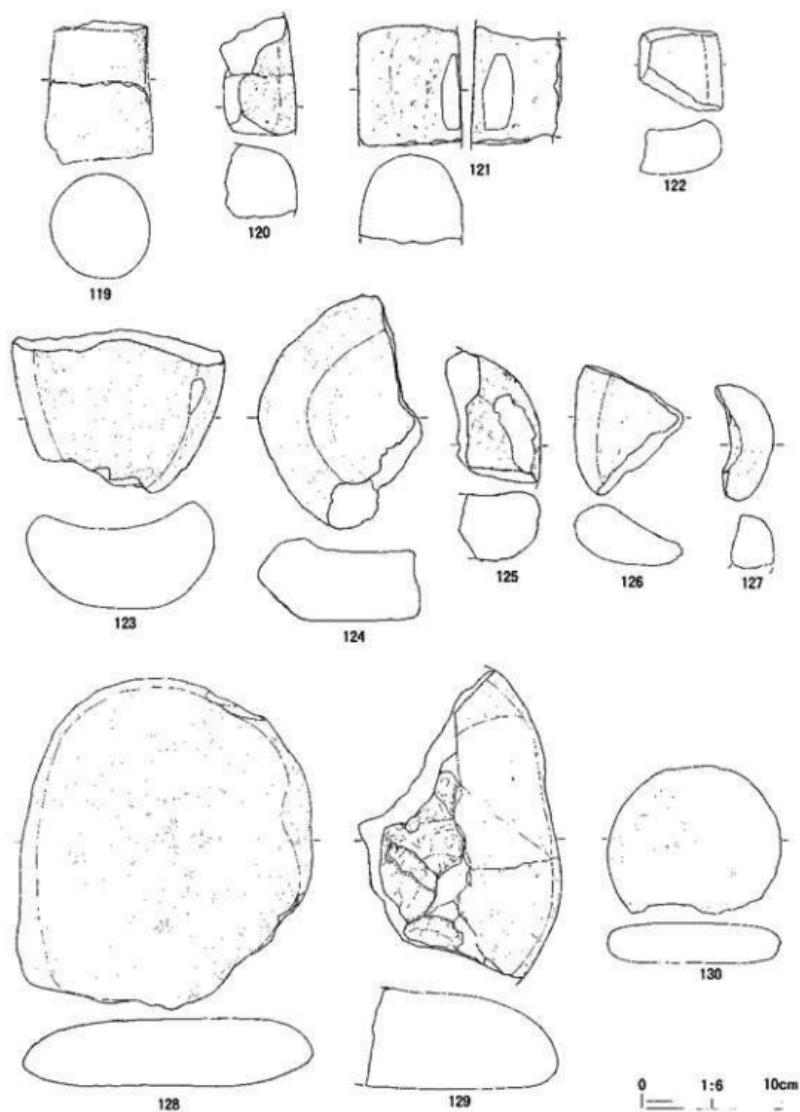
第78図 石 器 (8)



第79図 石 器 (9)



第80図 石器 (10)



第81図 石 器 (11)

第4章 まとめ

(1) 縄文時代

新田遺跡は縄文時代後期から弥生・平安時代にかけての複合遺跡であった。今回の発掘では調査区第1,3区から縄文時代の遺構・遺物が発見された。特に第1区からは河川の沖積作用によって縄文時代の文化ではなく地中深くから確認された。残念ながら調査区内から住居址の検出にはいたらなかったが、土坑42基、配石土坑7基、配石遺構などが確認された。土器の出土は多量であったが、多くは破片資料となっており器形が復元推定できるもの、あるいは遺構に伴うものは僅かであった。前期後半の諸式から後期前葉の堀之内式までの土器が見られ、主体となるものは後期の称名寺・堀之内式である。特に中期中葉の勝坂期に属するものは1点も見られず、出土土器から単純に見る限りではそこには断絶がある。

縄文後期初頭の称名寺式土器成立には西日本の中津式の東進のみからではなく、加曾利E IV式の系譜を引く土器の影響をも考慮すべきことは既に指摘がある(石井1992)。本遺跡出土の称名寺期の土器にも中津式・加曾利E IV式それぞれの系譜を引くと思われるものがあり、また北陸の三・十種場式土器の影響を受けている十器も出土し、当時の活発な交流が窺われる。明野村清水端、屋敷派、高台・中谷井遺跡においてもこうした非在地系土器の出土があり、今後周辺地域の成果も含めて検討すべきであろう。堀之内式土器に関しては、西関東において、この時期主体となる縦位・斜位の沈線及び蛇行沈線が施されるもの、東関東に分布の中心を持ち縄文が多用される土器も数は少ないながら出土した。堀之内式土器は僅かに数点の出土のみである、その時期集落は廃絶に向かったものと思われる。市内で中期末から後期の上器を検出した遺跡は藤井平と釜無川右岸の2地域、7遺跡が確認されている。そのほとんどの遺跡において出土土器は僅かである。全体的に縄文後期の土器が出土する本遺跡の調査はそうした意味において貴重な成果があった。

土坑については45号土坑以外、全てが1区からの確認であり、配石土坑にいたっては1区以外から確認されたものはなかった。3区からは環状を呈するであろう配石遺構と土坑1基が確認された。土坑からの出土遺物量は少なく、また全ての土坑から遺物の出土が見られたわけでもないため時期を確定することは困難であるが、曾利I式に比定できる5,11,23,37,41号土坑などが、確認された土坑では古いものであり、概ね曾利期から堀之内期までに上坑の時期を比定できよう。しかし詳細に見れば曾利II式以降からIV式までの遺構は確認されておらず、上記十坑に続くものとしては加曾利E IV式に位置付けられる19号土坑があり、その間少なからず断絶が生じることとなる。ただこうしたことはもう少し周辺の調査事例を待って検討すべきであるが、称名寺式土器に連続するものが加曾利E IV式の系譜を引く上器であるのは注意しておく必要がある。土坑の大半には底部付近、あるいは覆土中に若干浮いたように小砾から人頭大の砾が混入されていた。特に覆土中に若干浮いたように砾が多く混入されていた20,22,24,29,30,31,32号土坑あるいは配石土坑などは墓坑と考えて良いものであり、29,30,32号土坑などは他の石より一際大きな石が土坑上部に置かれている。こうしたことにも考慮すれば他に土坑上部に単独ではあるが比較的大きな石が存在するものなども同様に考えて良いであろう。22号土坑

などはこうした、あたかも蓋をするかのような石が石皿片を利用している。また24号土坑には口縁部から胴下半にいたる大きな土器片が礫を挟んで2枚重なっていた。約1/2程度に復元されたため埋葬時には1/4程の破片を利用したものであろう。土坑底部からは若干浮いており底に敷いていたとまで言えないが礫ばかりでなく土器を利用したものであろう。こうした様相から1区は墓域の一部に当たると思われる。前述したように曾利I式期まで遡る例もあるが、遺跡の継続性を判断するにやや不安な現状では墓域としての計画的利用を、次に述べる配石遺構と共に占地空間の分離が窺われることから縄文中期末から後期の時期に限定して解釈しておきたい。

次に3区において検出された環状を呈するかと思われる配石遺構についてだが、周辺からは45号土坑の他にピットが数基確認されただけであった。また配石遺構の中心及び配石下にも土坑らしき掘り込みは確認できなかった。配石下あるいは配石中に共伴した遺物は石器が主なもので土器など時期決定出来るものはなかった。ただグリッド掘り下げや周辺からの出土した土器片はほとんどが後期に属するものであることから遺構の時期を後期としておきたい。縄文中期末から見られる配石の出現は祭祀行為を通じ伝統的生活様式と集団の紐帯、集団相互の関係を維持するための適応行為として登場した、との解釈が提示されている（佐野・小宮山1994）。残念ながら住居址の検出がなく、遺跡の継続性も明確にできない以上、本遺跡からそれらを追認する術がないが、本遺跡では祭祀空間とも呼べる地が一定の場所に占地されていたことが窺われる。日常空間とは別に非日常空間を設けて集団の紐帯維持に努めたのであろうか。

以上、本遺跡は縄文後期を主体とする遺跡で、墓域と祭祀空間を明確に分離して占地していたものと考えられる。居住域が確認されてはいないが、おそらく西方に展開するものと思われる。縄文時代中期末が大きな変革期となることは既に多くの指摘がある。遺跡の存続期間を明確にし得ない以上変革期となる様相を指摘することは困難なことであるが、今後の周辺地域の調査によって明かになるであろう。

(2) 弥生時代

遺構の検出はなかったものの、遺物の出土がみられた。該期の遺跡は主に藤井平において調査されているが、釜無川右岸のこの地域でも約2.8km 南側に位置する旭町大輪寺東遺跡において本遺跡と同様に遺構には伴わずに土器が出土している。本遺跡周辺には弥生時代集落の存在が推測でき、更なる期待を抱く成果が得られた。今後の調査に注目しておきたい。

(3) 平安時代

調査では住居址6軒と溝1条が検出された。1号住以外5軒の住居は規模も同程度で時期的にも近接する時期である。更に主軸方位も20°程度の幅の中におさまれば同一方向をとっている。調査の最も多いのは条里制なども考慮すべきかと考えてみたが、地形上や無理なようであり、また同様の主軸方向をとる1号溝状遺構（河川跡）が検出されたことから地形に制約されたものと思われる。だが依然として住居址が同様の主軸方位をとっていることについての説明が必要である。おそらく血縁の紐帯の強い集団が排他的に居住域を占有し、住居を建て

替えることによって生じた結果と思われる。そうしたなかで一辺2m程度の小形で、カマド内から焼土層あるいは焼上ブロックなどの検出がなく、墨書き土器の出土があるなどのやや特異な様相を呈する6号住の在り方であるが、日常的な生活空間と考えるのは困難であり、通常遺跡で検出される住居で小形のものでも3m程度の規模を持ち、カマド内に焼土層を形成し生活の痕跡を残していることと比べると、何らかの祭祀に一時的に使用されたと考えるべきであろう。坏、皿で出土したものは墨書きされたもののみという在り方からも日常生活空間と考えられない。この住居が集団に付属する施設であるのか、更に大きな集団あるいは村落に属するものか、周辺の調査を待つて考えるべきことであるが、現段階では先の血縁的紐帯の強い集団とした堅穴住居址群に付属するものと考えておきたい。1号住についてはやや時期的に新しいもので10世紀末から11世紀初めに位置付けられるものである。住居内のピットから礫と共に鉄滓が検出されるなど特異なものである。

次に遺物についてだが3,4号住からロクロ整形土師器甕が出土している。3号住では甲斐型の甕も共伴しているが、主体は明らかにロクロ整形土師器甕である。こうした在り方は先の旭町大輪寺東遺跡3号住と同様の様相を呈しており、また市内の藤井平の遺跡においても確認されている。ロクロ整形土師器甕は北巨摩に分布の中心があると言われているもので、しかも各地域に複数の生産集団の存在が想定されている（保坂1988）。新田・大輪寺東どちらの遺跡も古代余戸郷の比定地内に位置している。今後こうした郷レベルでの地域性を遺物・遺構を通じて、更には文献などからも明らかにする必要があろう。

あとがき

調査を開始してからもうすぐ2年になろうとしている。1994年の夏は記録的な暑さだった。現場日誌を開くと「本日、甲府の気温日本最高を記録」というメモ書きが何ヵ所かに見える。しかしそれ以上に自分自身にとっては忘れない夏となり、途中発掘調査を2週間程中断せざるを得なかった。現場作業期日の延長と1年に及ぶ整理期間の恩恵を受けながら、どれだけ詳細な検討ができるのか誠に心もとないかぎりである。新田遺跡から発見された遺構と遺物は各時代の歴史を解明するのに重要なものであり、本書が今後の調査・研究に少しでも資することができればこの上ない喜びである。

最後に真夏の炎天下から寒風吹き下ろす初冬まで、現場作業に従事していただいた皆様、数々の御協力、御尽力を頂いた関係者諸氏、関係諸機関に対し衷心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 会田 明 1977 「関沢遺跡第2地点」『富士見市文化財報告』III 富士見市教育委員会
- 我孫子昭二 1971 『平尾遺跡調査報告』I 南多摩郡平尾遺跡調査会
- 阿部芳郎 1987 「縄文時代後期前葉型式群の構造と動態」『駿台史学』71
- 阿部芳郎 1988 「堀之内1式土器の構成と変遷」『信濃』40-4
- 石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究(予察)」『調査研究収録』5 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石井 寛 1990 『山田大塚遺跡』(財)横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 1992 「称名寺式土器の分類と編年」『調査研究収録』9 (財)横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 1993 『牛ヶ谷遺跡・華藏台南遺跡』(財)横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 1995 『川和向原遺跡・原出口遺跡』(財)横浜市ふるさと歴史財団
- 稻村見嗣 1990 「加曾利II系列の土器群」『調査研究収録』7 横浜市埋蔵文化財センター
- 今橋浩一 1980 「堀之内式土器について」『大田区史(資料編)考古II』
- 甲斐型上器研究グループ 1992 「甲斐型上器—その編年と年代—」山梨県考古学協会
- 甲斐丘陵考古学研究会 1977 「御料平遺跡」早川町教育委員会
- 甲斐丘陵考古学研究会 1979 「御坂町の埋蔵文化財」御坂町教育委員会
- 加納 実 1990 「千葉県における縄文後期前半土器型式研究の課題」『縄文後期の諸問題』
縄文セミナーの会
- 櫛原功一 1987 「姥神遺跡」大泉村教育委員会
- 櫛原功一 1993 「曾利I式土器の再検討」『縄文時代』4
- 近藤英夫他 1984 「帷子峯遺跡」横浜新道ミツツジジャングクション遺跡調査会
- 笛森健一 1985 「川崎遺跡(宅地添地区第4次)の調査」『埋蔵文化財の調査(VII)』上福岡市教育委員会
- 佐野 隆 1993 「屋敷派遺跡」明野村教育委員会
- 佐野隆・小宮山隆 1994 「縄文時代配石研究の一観点」『山梨考古学論集III』
山梨県考古学協会
- 佐野 隆 1995 「村之内II・III遺跡、高台・中谷井遺跡」明野村教育委員会
- 市立市川考古博物館 1982 「シンボジウム堀之内式土器の記録」
- 末木達、伊藤恒彦 1977 「山梨県北巨摩郡小瀬沢町上平出遺跡の縄文時代後期土器について」
『信濃』29-4
- 鈴木徳雄 1990 「称名寺・堀之内1式土器の諸問題」『縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄 1990 「称名寺式土器」『調査研究収録』7 横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木徳雄 1991 「称名寺式の変化と文様帶の系統」『土曜考古』16

- 鈴木徳雄 1992 「縄文後期注口土器の成立」『縄文時代』3
- 鈴木徳雄 1993 「称名寺式の変化と中津式」『縄文時代』4
- 鈴木保彦 1972 『東正院遺跡調査報告』 神奈川県教育委員会
- 鈴木保彦 1977 『下北原遺跡』 神奈川県教育委員会
- 田中耕作 1985 「所謂『三十稻場式土器』の成立について」『信濃』37-4
- 田中耕作 1989 「三十稻場式土器様式」『縄文土器大観』第4巻
- 田中耕作 1990 「三「稻場式上器研究の現状と課題」『新潟県考古学談話会会報』第5号
- 長沢宏昌、中山誠： 1986 「一の沢内遺跡、村上遺跡、後呂遺跡、浜井場遺跡」 山梨県教育委員会
- 新津健、丸山哲也、吉岡弘樹 1990 「大輪寺東遺跡」 山梨県教育委員会
- 新津健、三田村美彦 1993 「川又坂上遺跡」 山梨県教育委員会
- 平野 修 1988 「宮間田遺跡」 武川村教育委員会
- 平野修、樋原功一 1992 「宮ノ前遺跡」 喜崎市遺跡調査会
- 平林 彰 1983 「中部高地における縄文後期初頭の土器群」『長野県考古学会誌』46
- 平林 彰 1990 「中部高地の中期最終末及び後期初頭の土器群」『調査研究収録』7 横浜市埋蔵文化財センター
- 保坂康夫 1988 「山梨県下における古代前半のロクロ整形土師器甕をめぐって」『山梨県考古学協会誌』第2号
- 保坂康夫 1992 「山梨県下の平安時代鍛冶遺構の様相」『山梨県考古学協会誌』第5号
- 宮沢公雄 1986 「清水端遺跡」 明野村教育委員会
- 森原明廣 1994 「山梨県地域における古代末期の土器様相」『丘陵』14
- 山形洋一 1989 「西大宮バイパスNo.5遺跡」 大宮市遺跡調査会
- 山下孝司 1985 「中田小学校遺跡」 喜崎市教育委員会
- 山下孝司 1986 「金山・下木戸・中道遺跡」 喜崎市教育委員会
- 山下孝司 1989 「後田遺跡」 喜崎市教育委員会
- 山下孝司 1990 「北後田遺跡」 喜崎市教育委員会
- 山下孝司 1992 「堂地遺跡」 喜崎市教育委員会
- 山下孝司 1993 「草地遺跡II」 喜崎市教育委員会
- 山田仁和 1990 「出口遺跡称名寺I（古）期III類上器について」『栃木県考古学会誌』第12集
- 山木茂樹、今福利恵 1992 「甲ヶ原遺跡概報I」 山梨県教育委員会
- 吉田 稔 1995 「修理山遺跡」 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 領塙正浩 1992 「堀之内貝塚出土の堀之内式土器」『堀之内貝塚資料図譜』 市立市川考古博物館
- 渡辺 務 1990 「松風台遺跡」 日本窯業史研究所

付 章 自然科学分析調査

パリノ・サ・ヴェイ株式会社

はじめに

新田遺跡は、釜無川右岸の河岸段丘上に位置し、縄文時代後期および平安時代前期～中期の遺構・遺物が検出されている。このうち住居址では、近接する半繩田遺跡のように構築材などのような炭化材はほとんど確認できないが、カマド内には焼土が確認できる。

本報告では、各住居址のカマド内から採取した土壤について、植物珪酸体分析を行い、燃料材に使用された植物に関する資料を得る。また、1号住居址から検出された炭化材の同定と土壤の植物珪酸体分析から、構築材の植物利用に関する試料を得る。さらに、3号住居址から出土した骨についてもその種類を明らかにする。骨類同定については、早稲田大学 金子浩昌先生の協力を得た。

I. 燃料材に関する検討

1. 試 料

燃料材に関する検討では、1号・2号・3号・4号住居址のカマドから採取された土壤試料5点である。

2. 方 法

試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250KHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステイト、比重2.5)の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由來した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

3. 結 果

同定結果を表1、組織片の産状および植物珪酸体組成を図1に示す。1号住居カマド3層では、イネ属短細胞列やスキ属短細胞列も認められるが、不明組織片の検出が目立つ。また、単体の植物珪酸体としてイネ属、ウシクサ族、キビ族、タケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。しかし、4層では組織片が全く認められず、単体の植物珪酸体はタケ亜科などがわずかに認められる。

表1 各遺構の植物珪酸体分析結果

種類(Taxa)	試料名	炭化物		1号住		2号住		3号住		4号住	
		3層	4層	カット							
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属		41	57	-	5	-	-	2	-	-	-
キビ属		6	8	1	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科		13	39	8	7	13	14	-	-	-	-
ヨシ属		18	18	-	1	1	1	-	-	-	-
ウシクサ族ススキ属		45	34	-	3	2	7	-	-	-	-
イチゴツナギ亞科		12	15	-	2	-	-	4	-	-	-
不明キビ型		51	41	-	3	1	1	6	-	-	-
不明ヒゲシバ型		29	29	1	1	1	1	2	-	-	-
不明ダンチク型		31	24	-	3	6	3	3	-	-	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属		34	20	2	12	10	5	-	-	-	-
タケ亜科		10	27	4	4	7	7	-	-	-	-
ヨシ属		2	3	-	-	1	-	-	-	-	-
ウシクサ族		35	25	1	7	-	-	5	-	-	-
不明		25	37	2	1	9	4	-	-	-	-
合計		246		265	10	26	24	38	-	-	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体		106	112	9	24	27	27	21	-	-	-
検出個数		352	377	19	50	51	51	59	-	-	-
組織片											
イネ属短細胞珪酸体		1	-	-	-	-	-	22	-	-	-
イネ属短細胞列		12	11	-	-	-	-	-	-	-	-
ススキ属短細胞列		4	1	-	-	-	-	-	-	-	-
不明組織片		89	131	-	-	-	-	-	-	-	-

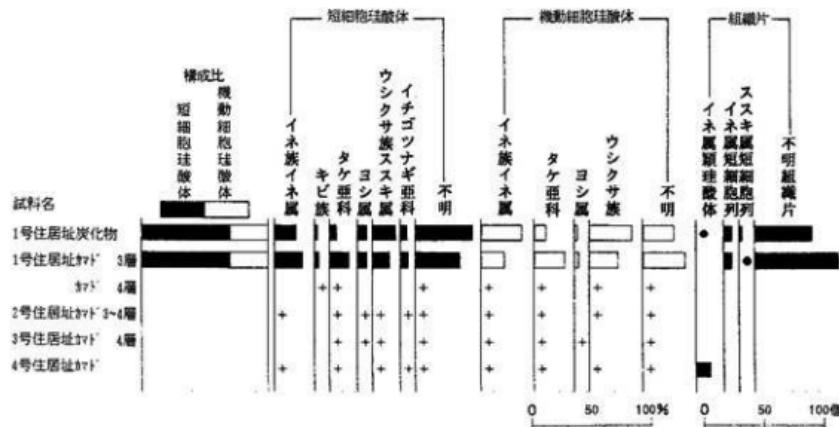


図1 各遺構の組織片の状況と植物珪酸体組成

植物珪酸体組成では、出現率は短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体それぞれの総数を基準とした百分率で算出した。なお、●○は1%未満の検出を示す。また、組織片は検出個数で示し、●は1個体の検出を示す。

2号住居カマド3～4層、3号住居カマド4層でも組織片が全く認められない。単体の植物珪酸体では、イネ属、ウシクサ族、キビ族、タケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科などがわざかに認められる。

4号住居カマドでは、組織片としてイネ属穎珪酸体が認められる。また、単体の植物珪酸体では、イネ属、ウシクサ族、タケ亜科、イチゴツナギ亜科などが認められる。

4. 考 察

カマド内でイネ科草本類が使用されていれば、これまでの調査例（佐瀬、1982；大越、1985）からもその組織片が残る可能性が高い。今回の調査では、1号住居と4号住居で組織片が検出され、燃料材に由来している可能性がある。

1号住居カマドでは、イネ属およびススキ属の短細胞列が検出され、少なくともイネ属やススキ属が燃料材として利用されていたことが推定される。また、不明組織片が多く確認できることから、イネ属・ススキ属以外にも使用された植物があったと考えられる。イネ属とススキ属については、近接する同時期の半縄田遺跡でも確認されており（未公表）、本地域で広く利用されていた可能性がある。周囲に生育するススキ属や栽培されていたイネ属などが使用されたものと考えられる。

4号住居カマドからは、組織片としてイネ属穎珪酸体が検出された。このことから、鞠穂が燃料材に利用された可能性がある。同様の例は、藤沢市内の慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡でも認められている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993a）。また、燃料材以外の使用を考えた場合、火種の保存もあるかもしれない。

II. 構築材の検討

1. 試 料

試料は、1号住居址から検出された炭化物1点（第1面1号住居炭化物）で、植物珪酸体分析は試料中より土壤を抽出して行う。また、炭化材は1袋中に細片が多数含まれていたが、同定できる大きさの炭化材は1点のみであった。

2. 方 法

(1) 炭化材同定

試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(2) 植物珪酸体分析

1章2. 方法を参照。

3. 結 果

(1) 炭化材同定

炭化材はクリに同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属

環孔材で孔圓部は1~4列、孔圓外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1~15細胞高。

(2) 植物珪酸体分析

同定結果を表1、組織片の産状および植物珪酸体組成を図1に示す。1号住居炭化材一括試料では、組織片として植物珪酸体を含まない組織片（不明組織片）の検出が目立ち、稻穀に形成されるイネ属穎珪酸体やイネ属短細胞列、ススキ属短細胞列も認められる。単体の植物珪酸体では、イネ属やウシクサ属の出現率が高く、キビ族、タケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科なども認められる。

4. 考 察

炭化材はクリに同定された。炭化材は、細片であるためにその用途などについては不明であるが、検出された位置から構築材の可能性がある。同定されたクリは、近接する半繩田遺跡や白州町上北田遺跡などでも住居構築材に認められており（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993b；未公表）、本試料が構築材としても矛盾しない。

一方植物珪酸体分析では、不明組織片の検出が目立つものの、イネ属穎珪酸体やイネ属短細胞列、ススキ属短細胞列等が認められた。単体の植物珪酸体で出現率が高かったイネ属やススキ属は、組織片から外れたものと思われる。これらの結果から、稻作後の稻藁や周辺に生育するススキ属等が屋根材や壁材などに利用されたと考えられる。稻穀の存在も示唆されるが、検出個数の少ないとともあり、利用された稻藁についていた稻殼と考えられる。

III. 骨の種類

1. 試 料

試料は、第3号住居址より採取された骨の細片が混在している土壌1点である。この試料中から骨の細片を選別し、同定試料とした。

2. 方 法

肉眼およびルーペで観察を行った。

3. 結果および考察

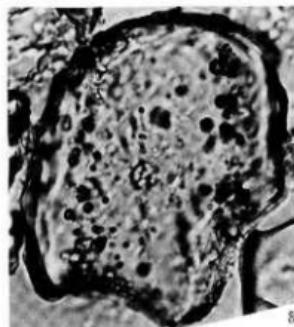
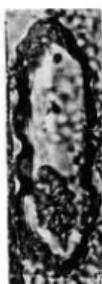
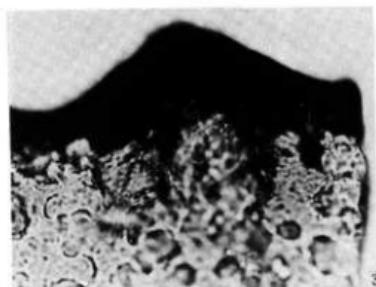
ウマ *Equus caballus*もしくはウシ *Bos taurus*の歯の碎片である。細かく割れたエナメル質部分の破片であって、もともと破損した歯であったのをさらに発掘時に破損したものではないかと思われる。一個体の歯としては量的に少なすぎ、単独のものが埋存していたのである。

この時代にウマ、ウシがかなり普及していたことは、文献や出土遺物においても知られるところである。埋葬した例も知られるが、祭祀的な扱いをされた例もある。歯などが単独で出土することは、埋葬とは別の扱いを受けたもの一部であったかも知れない。

<引用文献>

- 近藤誠三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析、その特性と応用・第四紀研究, 25, p.31-64.
- 大越昌子 (1985) プラント・オパール分析、「平賀遺跡群発掘調査報告書」, p.803-815, 平賀遺跡調査会.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1993a) 自然科学分析からみた人々の生活(1), 慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, p.347-370, 慶應義塾.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1993b) 上北田遺跡から出土した炭化材および炭化種子の同定.
「山梨県北巨摩郡白州町 上北田遺跡 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,
p.1-5, 白州町教育委員会・県北土地改良事務所.
- 佐瀬 隆 (1982) 古墳時代住居址の炉に関する焼土について、—植物起源粒子の植物珪酸体から見て—, 東京都埋蔵文化財センター調査報告書第2集「多摩ニュータウン遺跡」, p.303-308.

図版1 組織片・植物珪酸体



50 μm

- 1. イネ属短细胞列(1号生;炭化物)
- 2. イネ属機動细胞珪酸体(1号生;カド3層)
- 3. イネ属網状珪酸体(4号生;カド3層)
- 4. イネ属颖珪酸体(4号生;カド)
- 5. ヨシ属短细胞珪酸体(1号生;カド3層)
- 6. ススキ属短细胞珪酸体(1号生;炭化物)
- 7. イチゴツナギ亞科短细胞珪酸体(1号生;カド3層)
- 8. ヨシ属機動细胞珪酸体(1号生;カド3層)

図版2 炭化材

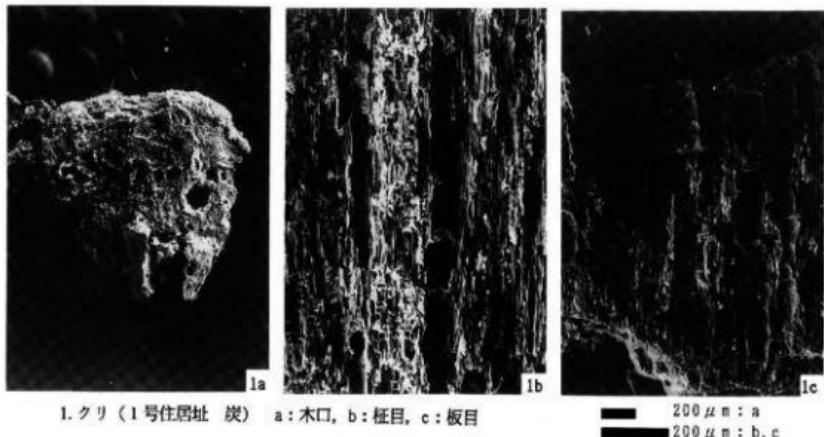
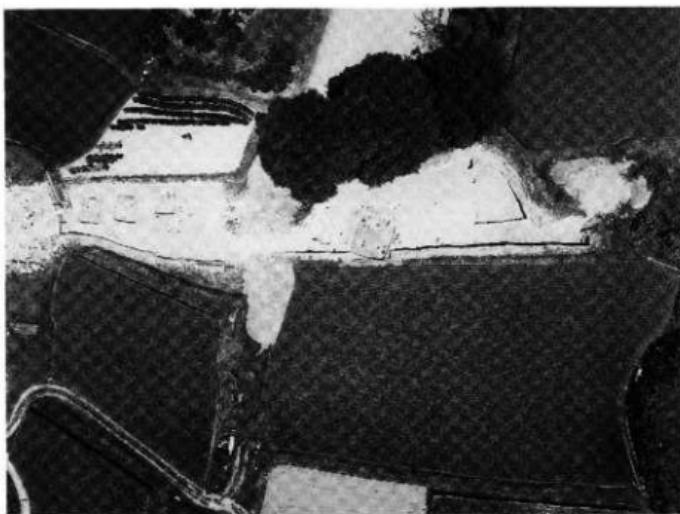


図 版





調査区第1区、2区（平安時代）



調査区第2区、北側（平安時代）

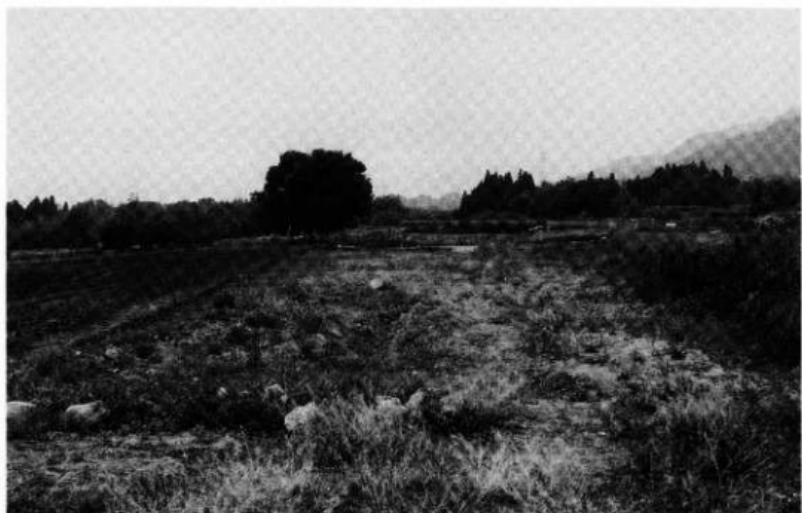


調査区第1区（縄文時代）



配石遺構（西より）

図版 3

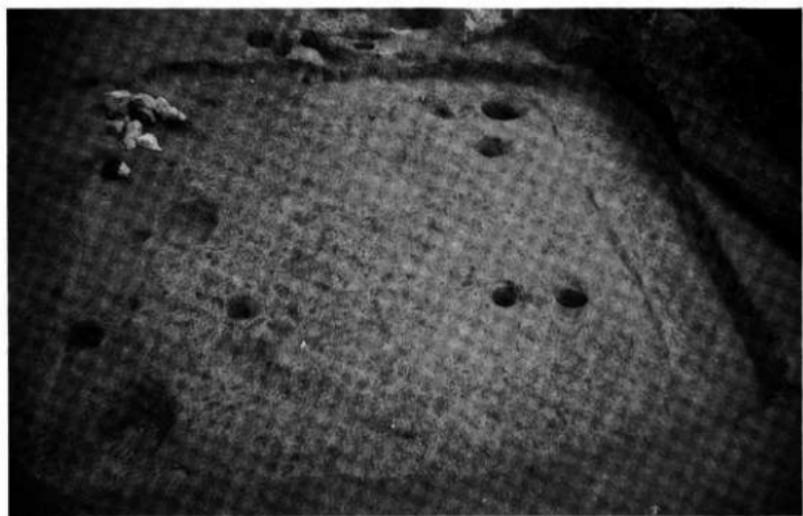


調査区現況

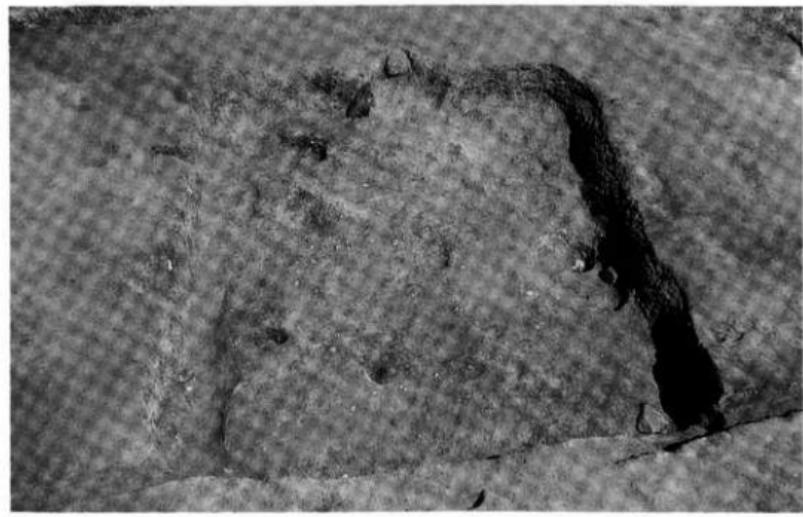


作業風景

図版 4



第1号住居址

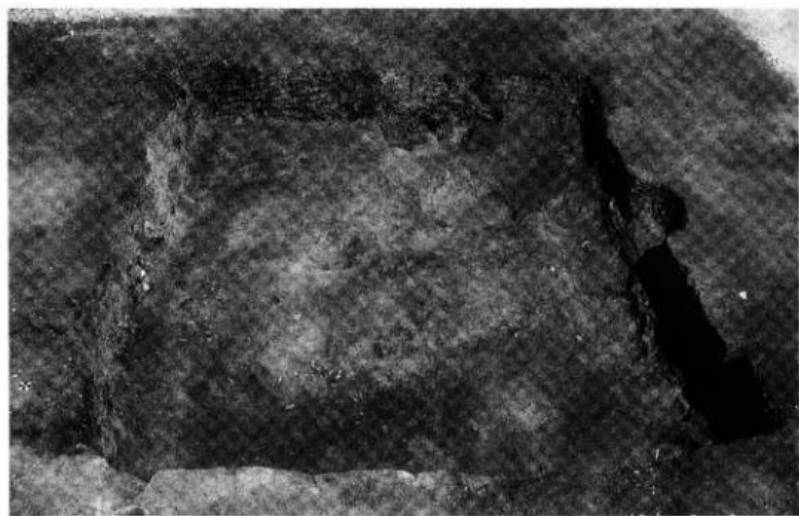


第2号住居址

図版 5



第3号住居址

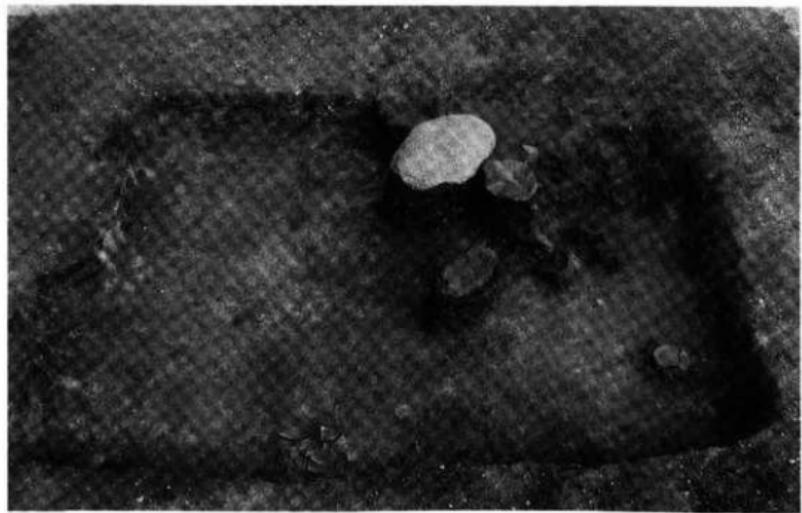


第4号住居址

図版 6



第5号住居址遺物出土状況

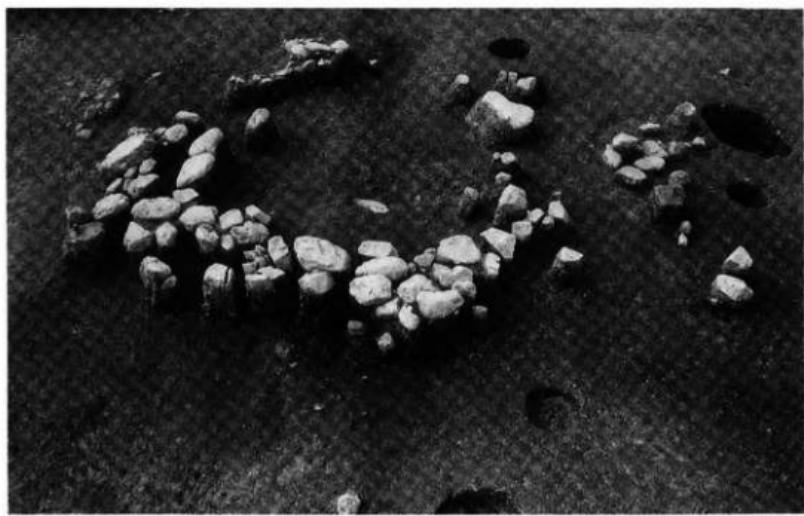


第6号住居址

図版 7



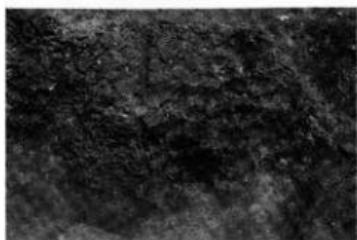
1号溝状遺構土層堆積状況



配石遺構



1号カマド完掘状況



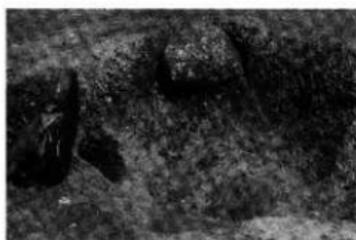
4号カマド完掘状況



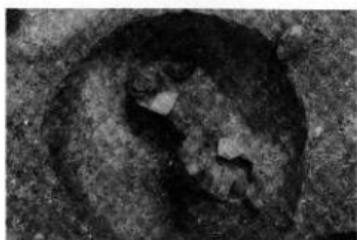
調査状況



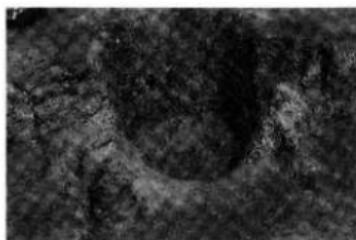
6号カマド完掘状況



2号カマド完掘状況



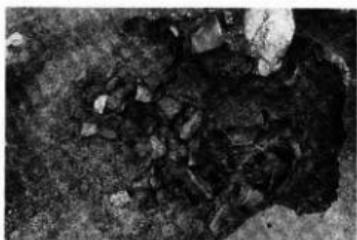
1号土坑遺物出土状況



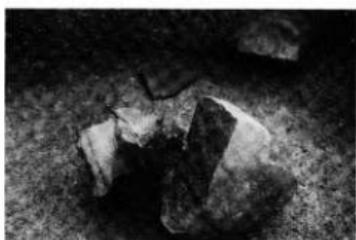
3号カマド完掘状況



2号土坑遺物出土状況



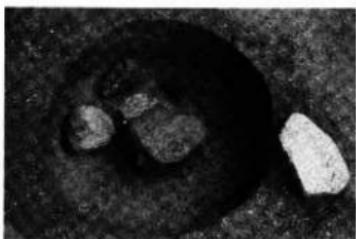
5号土坑遺物出土状況



19号土坑遺物出土状況



9号土坑遺物出土状況



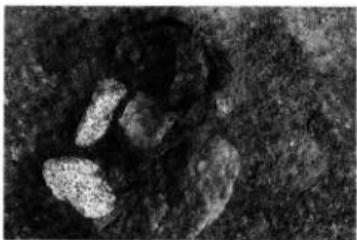
22号土坑遺物出土状況



11号土坑遺物出土状況



23号土坑遺物出土状況



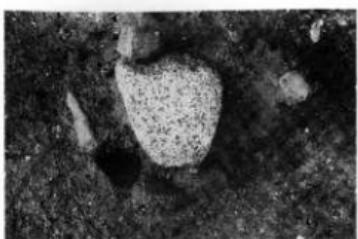
18号土坑確認状況



ヒスイ出土状況



24号土坑確認状況



39号土坑確認状況



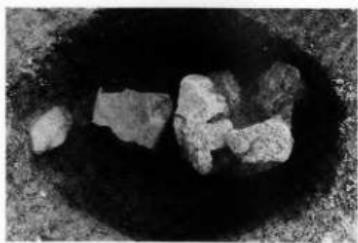
29, 32号土坑確認状況



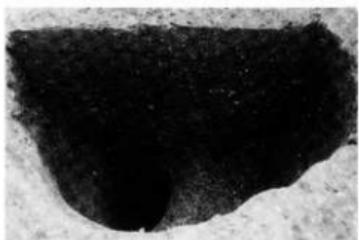
41号土坑遺物出土状況



30, 31号土坑確認状況



45号土坑遺物出土状況



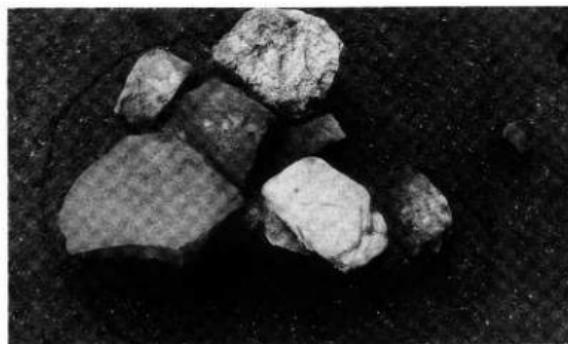
34号土坑土層堆積状況



調査区第1区 東壁



1号配石土坑確認状況



2号配石土坑確認状況



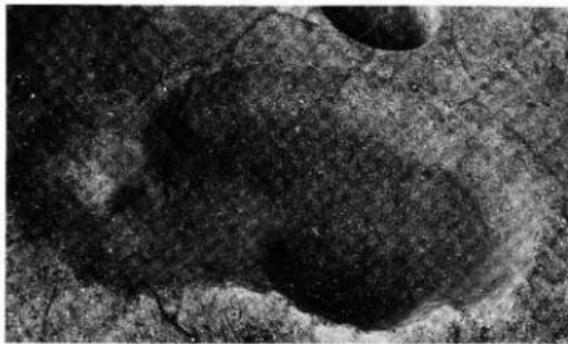
3号配石土坑確認状況



4号配石土坑確認状況



5号配石土坑確認状況



5号配石土坑完掘状況



6号配石土坑確認状況

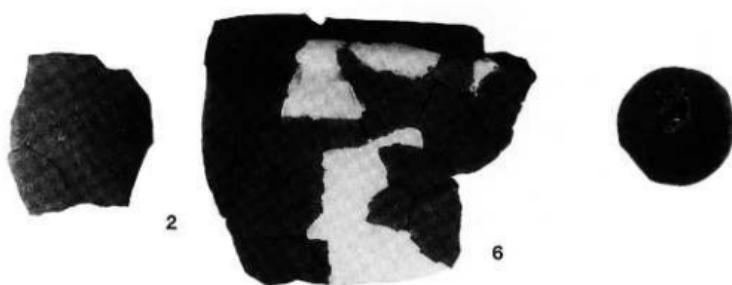


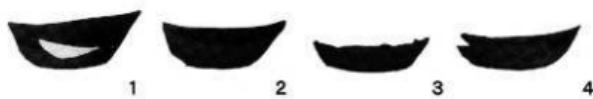
7号配石土坑確認状況



遺跡見学会

図版 14





4号住出土紡錘車



3号住出土土器 (1~4, 6)

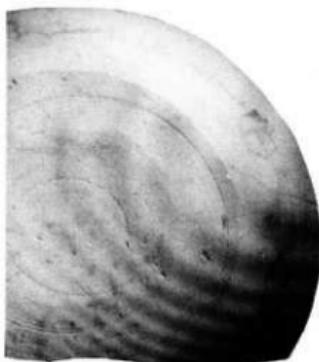


4号住出土土器

図版 16



3



墨書き土器赤外線写真



6号住出土土器 (3, 4)



1



2



3



4



5

磨製石器 勾玉

1号溝状遺構出土土器



遺構外出土土器



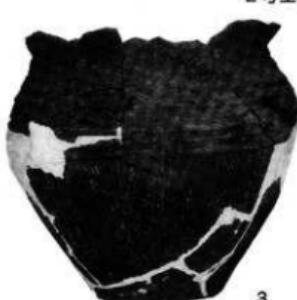
2号土坑出土土器



1



2



3



4



11号土坑出土土器

5号土坑出土土器 (1~4)



19号土坑出土土器



23号土坑出土土器

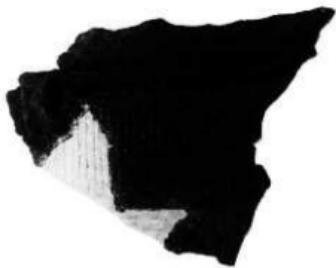
圖版 18



25号土坑出土土器



24号土坑出土土器



37号土坑出土土器

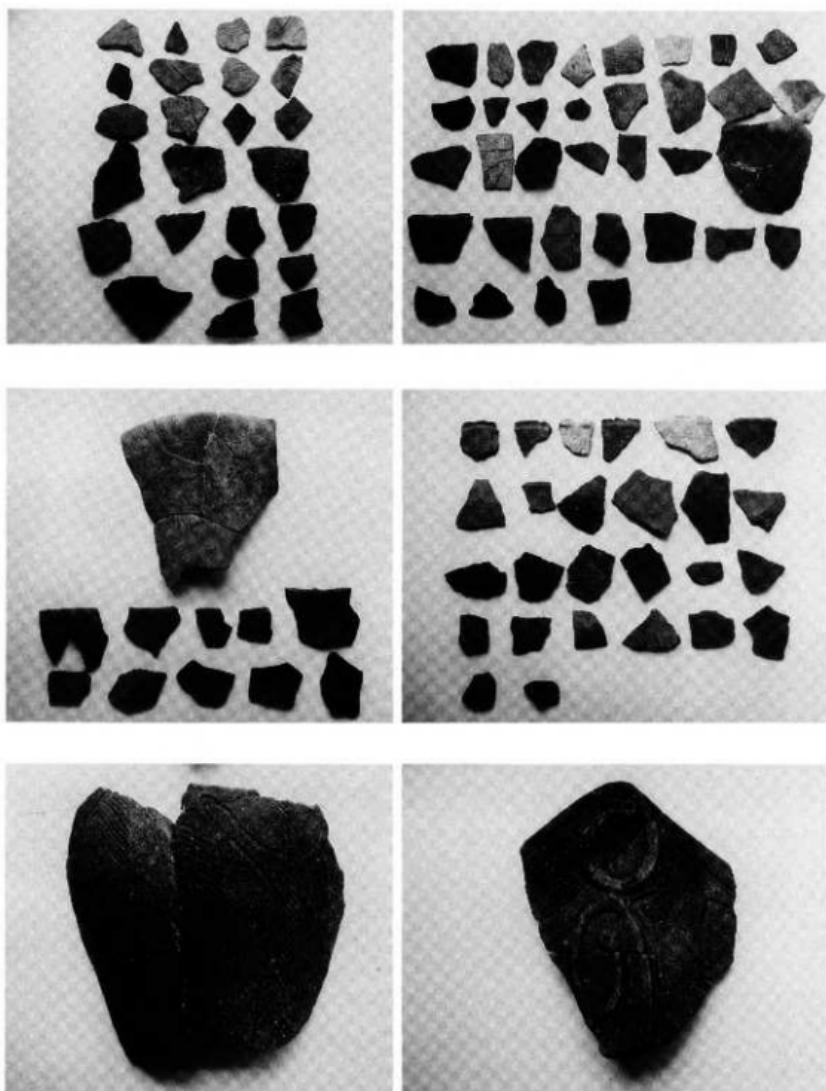


41号土坑出土土器

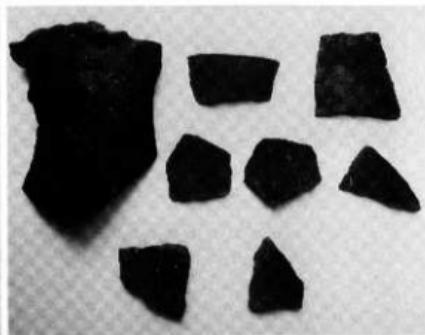
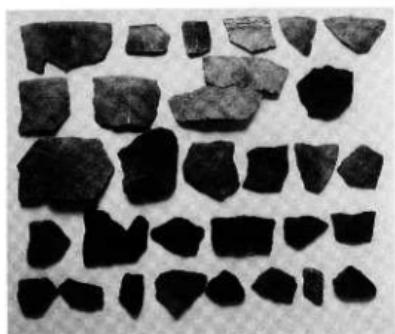


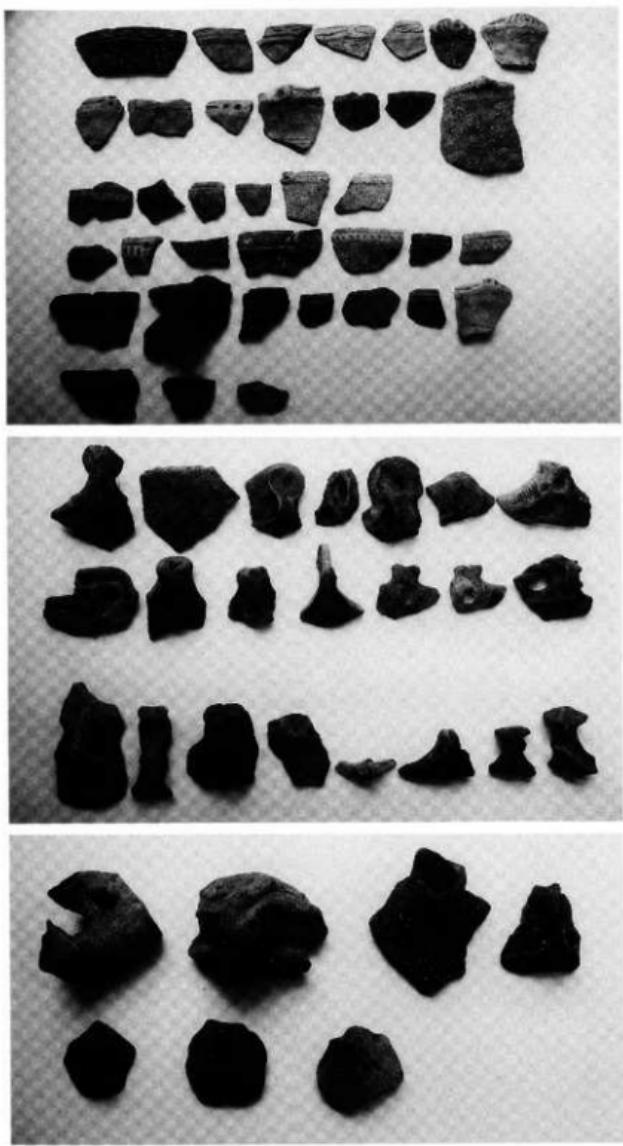
遺構外出土土器



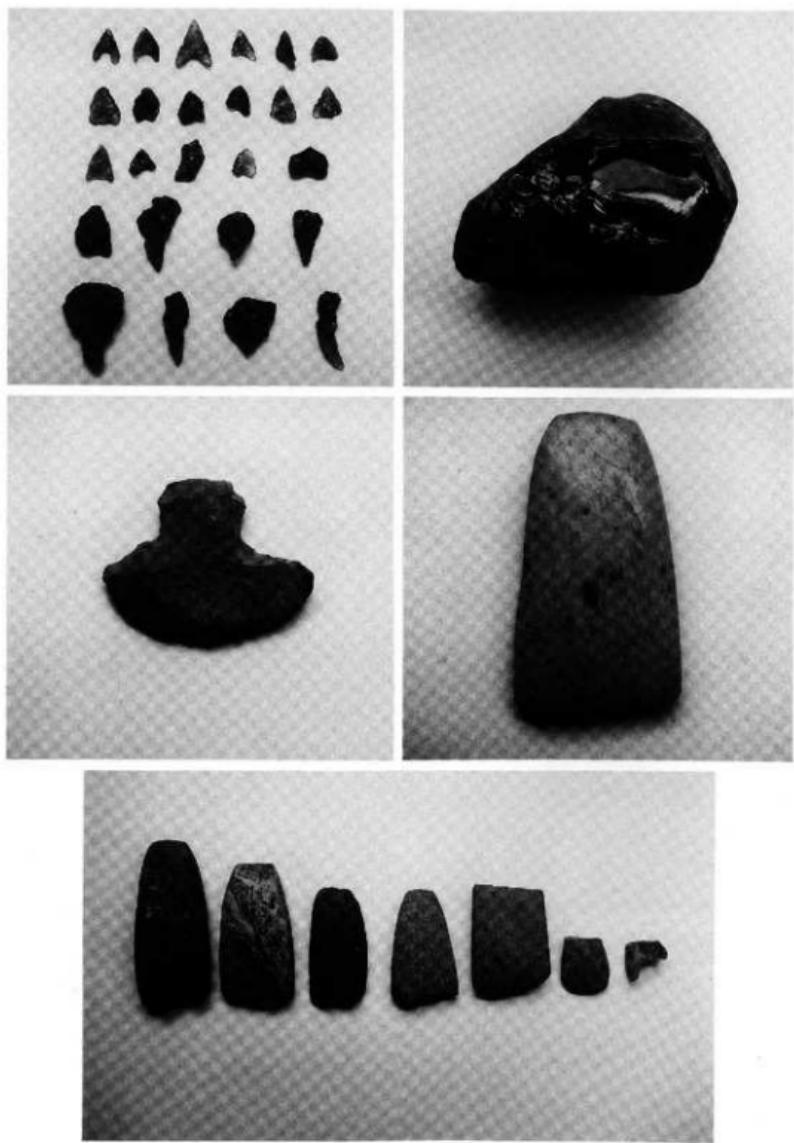


遺構外出土土器

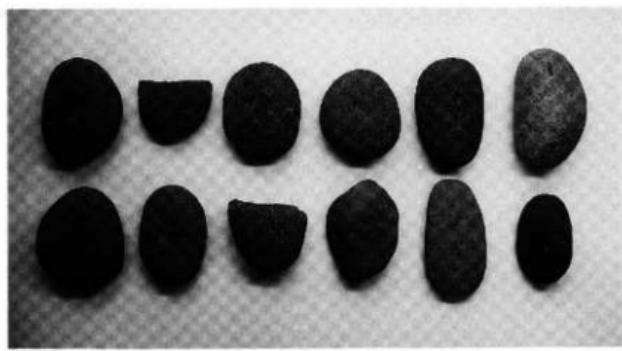
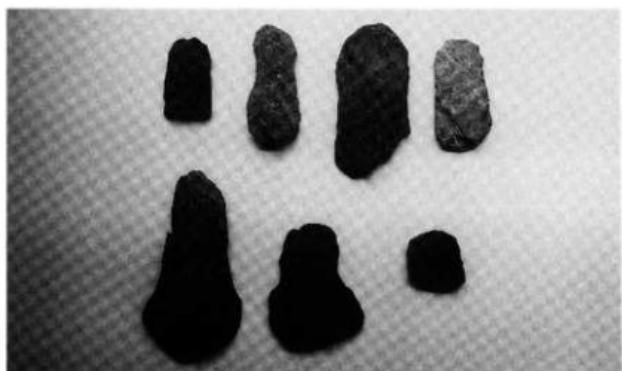




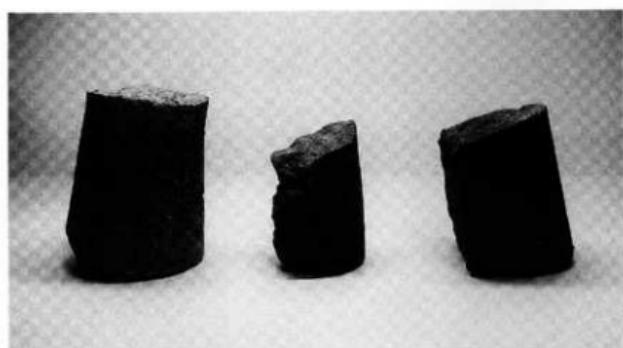
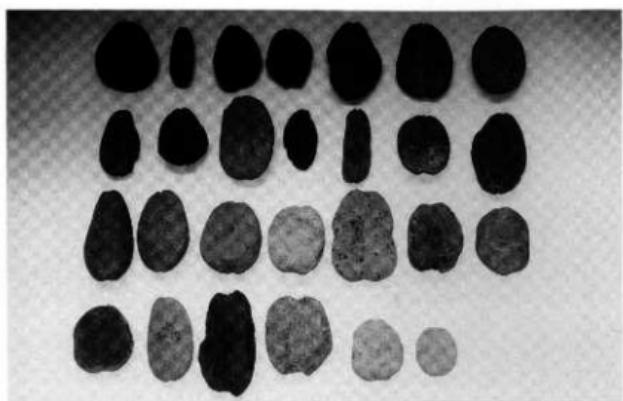
遺構外出土土器



出土石器



出土石器



出土石器

新田遺跡

1996年 3月5日印刷

1996年 3月15日発行

発行 蕨崎市教育委員会
〒407 山梨県蕨崎市水神一丁目3番1号
TEL 0551-22-1111 (代)

印刷 有限会社 タクト/印刷・デザイン

